3　中世・近世

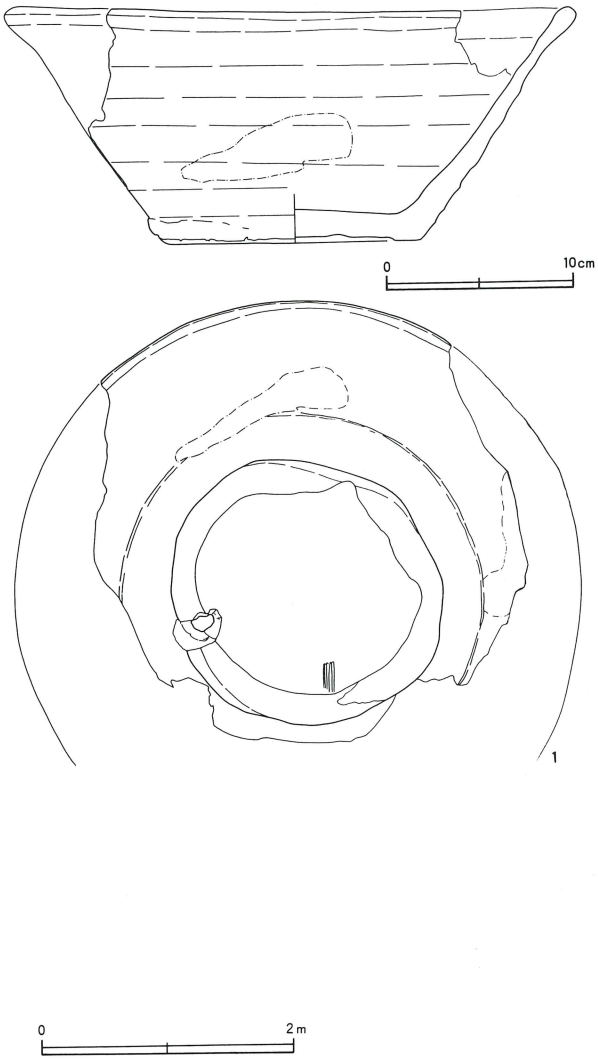
(1)　竪穴状遺構

第１号竪穴状遺構（第62・63図　図版17　口絵）

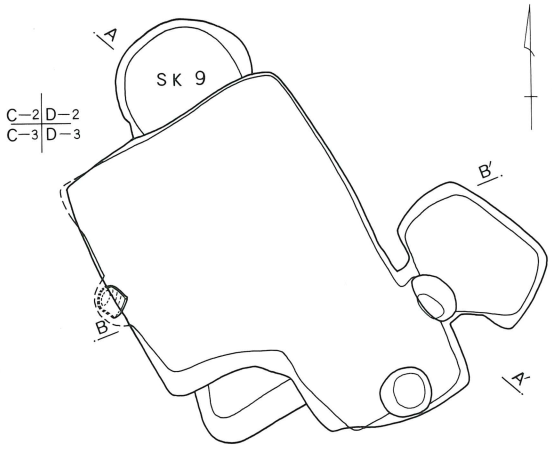
中世の竪穴状遺構は、Ｄ－３グリッドより１基だけ検出された。９号土壙と重複し、縄文時代の６号・７号・９号住居跡を壊している。平面プランは片袖型で、規模は約2.02ｍ×2.01ｍのほぼ正方形になる。入り口（片袖部分）から奥壁までの距離は約3.04ｍ、遺構の確認面からの深さは約0.75ｍになる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、下半がわずかに内傾している。

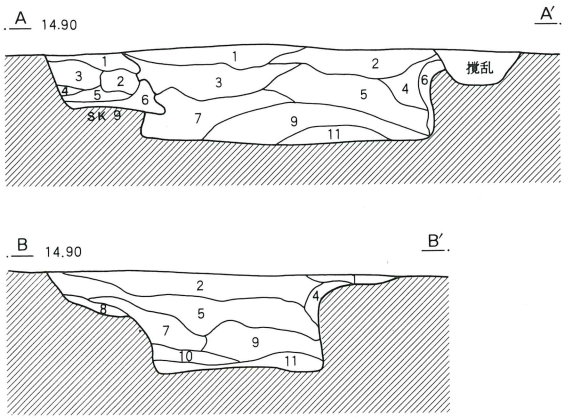
遺物は、浅鉢が１点、鉢を置くために、西壁をオーバーハングさせたような箇所の、床面直上から上向きの状態で出土している。13世紀末頃の常滑の鉢と思われ、片口鉢の可能性もある。推定口径は29.6cm、底径13.8cm、器高12.8cmで、褐色がかった灰色をしている。胴下半部には鉄分が付着したような暗赤色の部分が見られる。

第62図　Ｉ号竪穴状遺構出土遺物



第63図　Ｉ号竪穴状遺構・９号土壙





１号竪穴遺構

1	黒褐色土	耕作土による攪乱
2	暗褐色土	ローム粒子混
3	黒褐色土	ローム粒子少量混
4	黒褐色土	炭化物粒多量混
5	暗褐色土	ローム粒子微量混
6	灰黄褐色土	炭化物粒多量粒・ハードローム混
7	黒褐色土	炭化物粒多量混
8	黒褐色土	ローム粒子多量混
9	黒褐色土	炭化物粒・ローム粒子多量混
10	黒褐色土	ローム粒子多量混
11	黒色土	炭化物粒少量混　常滑出土

９号土壙

1	褐灰色土	ローム粒子微量混
2	暗黄褐色土	黒褐色土多量混
3	暗黄褐色土	炭化物粒子微量混
4	暗黄褐色土	ローム粒子多量混
5	灰黄褐色土	炭化物粒微量混
6	褐色土	ローム粒子多量混

(2) 集合土壙

今回、集合土壙と名付けたものは都合３箇所から検出されている。個々の土壙同士の重複が激しく、当初一つの遺構と考えて掘りはじめたが、解釈がつかず、最終的に長方形の土壙の集合と判断し、集合土壙という名を付けた。めぼしい遺物はほとんど出土していないが、中世陶器の小破片等が見つかったため、一応中世以降の遺構として捉えておきたい。

第１号集合土壙（第64図　図版18）

１号集合土壙は、Ｅ－２グリッドから検出された。２号集合土壙と重複しており、当集合土壙が新しい。南西の隅から時計回りに、長軸を北東にもつ土壙（１－１、2.05m×0.95m）、それと直行する北西方向に長軸をもつ土壙（１－２、2.05m×1.05m）、その北側の長軸を北北東にもつ小型の土壙（１－３、1.25m×0.75m）、さらにその北側の長軸を東北東にもつ重複している二つの土壙（南より１－４、1.90m×0.90m、１－５、1.55m×0.75m）、さらに長軸を北北西にもち、東側の大きな落ち込みと重複している土壙（１－６、2.01m×1.16m）の合計６基の土壙の集合体と考えたい。深さは１で約20cm、２で約40cm、４で約50cm、５で約35cm、６で35cmと一定の深さをもっており、立ち上がりも６を除いて、ほぼ垂直に立ち上がる。いずれも覆土は比較的軟らかくローム粒子およびローム＝ブロックの混入が多かった。また、覆土の中段に黒色土が堆積しているものも多い。６は約十数センチの浅い落ち込みを掘り込んでいるが、ここに堆積していた覆土はふかふかで荒れており、遺構の一部とは考えがたい。しかし、後述する３号集合土壙の場合も同様の浅い落ち込みが伴っており、何らかの遺構であった可能性も捨てがたい。

遺物は、中世陶器の小破片が数点出土しているのみである。調査時に、度量衡に関係すると考えられる石製のオモリが出土していが、一夜のうちに紛失していた。当遺構がどのような性格のものなのか、今後に判断を待たなければならないと考えるので、大変残念な思いを込めて、あえて記しておきたい。

第２号集合土壙（第64図　図版18）

２号集合土壙は、Ｅ－２グリッドから検出された。１号集合土壙と重複しており、当集合土壙が古い。４基の土壙が確認できた。もともと判りずらいプランのうえ、１号集合土壙によって壊されているため、全貌は不明である。南側の２－１と２－２は、１－３および１－４によって壊されており、深さもないため１と２の新旧関係は不明である。２－１は長軸の長さは不明であるが幅が約75cmぐらいの長方形の土壙になると考えられる。２－２は約1.25m×1.20mぐらいの正方形になると考えられる。深さは１で約15cm～20cmになる。北側の２－３と２－４は、３が４を壊すかたちで重複している。また２－４は、１－５によって壊されている。２－３は約1.20m×0.86mと小型の土壙である。２－４は一辺が約1.55mぐらいの正方形になると考えられる。深さは３が約20cm、４は約10cmぐらいになる。

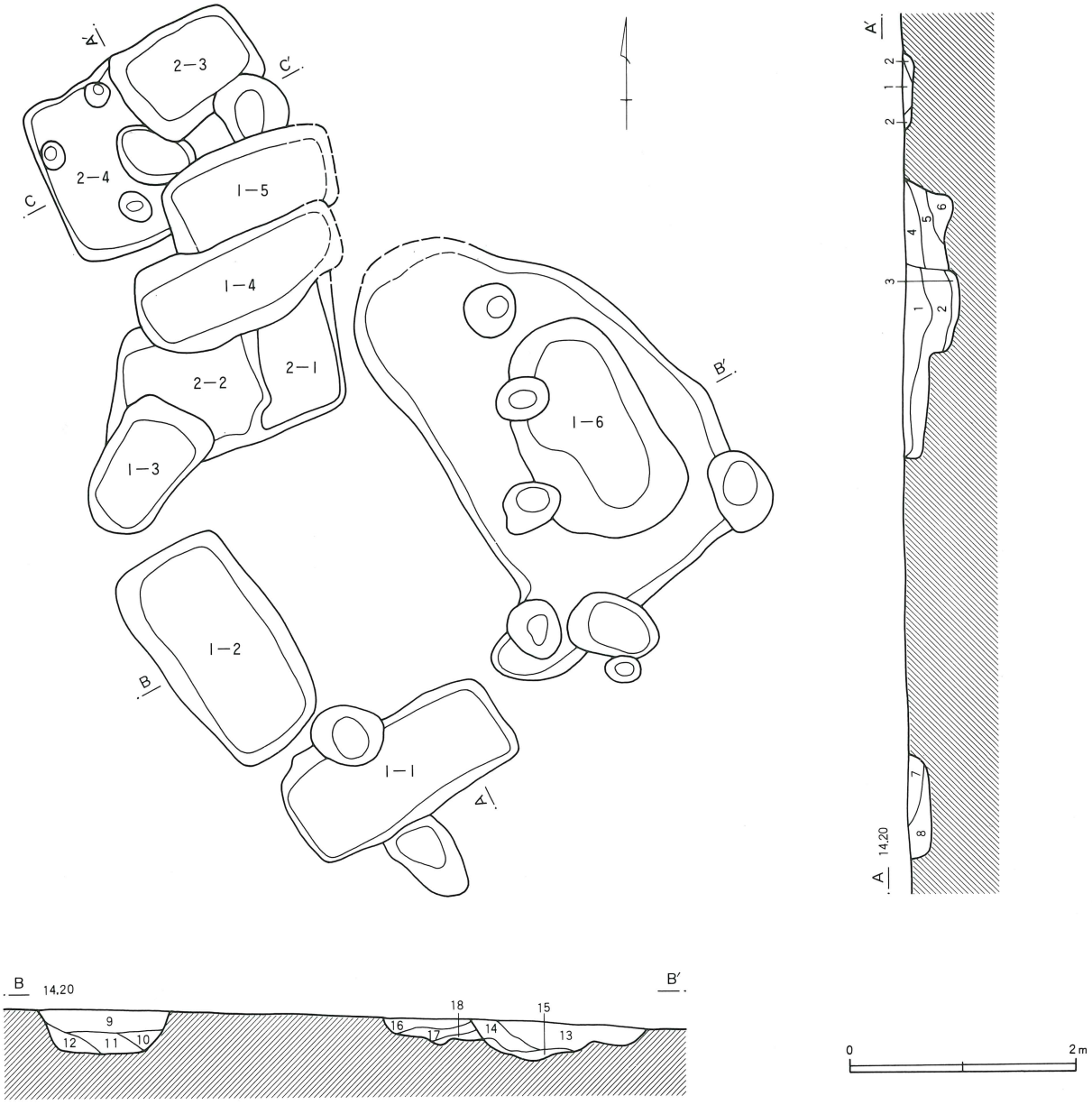
遺物は、中世陶器の小破片が数点出土しているのみである。

第３号集合土壙（第65図　図版18）

３号集合土壙は、Ｄ・Ｅ－２グリッドから検出された。14号土壙と重複しており、当集合土壙が古い。また、縄文時代の３号住居跡と接している。２基の土壙と浅い落ち込みがが確認できた。浅い落ち込みの北壁寄りには現代の攪乱がある。３号集合土壙の掘り込みは２基の土壙とも深い。２基の土壙の新旧関係は不明で、ある一定の深さまでは同じ頃に埋まったと考えられる。覆土はいずれも軟らかく、ローム粒子やローム＝ブロックが多く混じっている。西側の土壙①は約1.55m×0.95mぐらいの長方形の土壙になると考えられる。確認面からの深さは約70cmほどでやや傾斜をもって立ち上がる。東側の土壙②は約1.74m×1.38mぐらいの長方形の土壙になると考えられる。確認面からの深さは約109cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。やや傾斜をもって立ち上がる。他に比べて深いのが特徴である。

遺物の出土はなかった。

第64図　1号・2号集合土壙



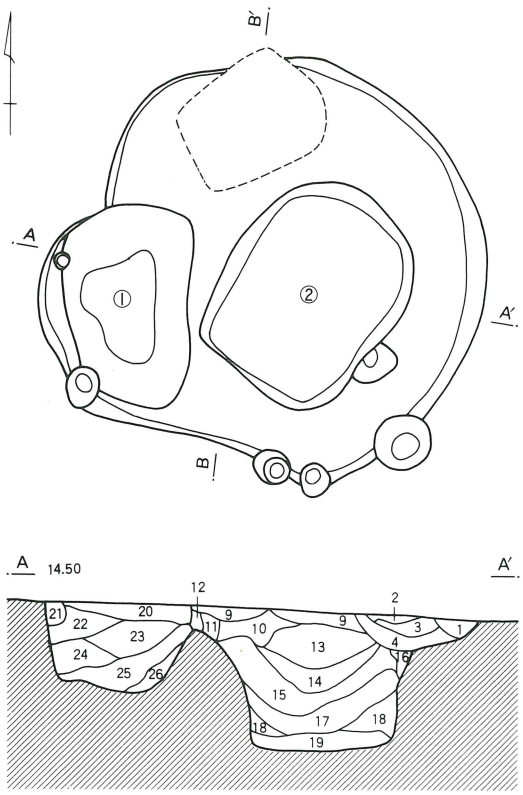
1号集合土壙

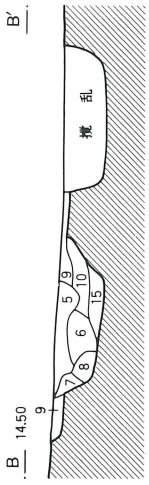
1　灰黄褐色土　ローム粒子混
2　灰黄褐色土　ロームブロック混
3　黒褐色土　ロームブロック少量混
4　暗褐色土　焼土粒・炭化物粒少量混
5　黒褐色土　炭化物粒・ローム粒子混
6　褐灰色土
7　灰黄褐色土　炭化物粒少量・ローム粒子多量混
8　黒褐色土　ロームブロック多量混
9　灰黄褐色土　ロームブロック混
10　黒褐色土
11　灰黄褐色土　ハードローム混
12　褐灰色土　ハードローム混
13　黒褐色土　ハードローム混
14　灰黄褐色土　ローム粒子多量混
15　暗褐色土　ハードローム混
16　灰黄褐色土　ローム粒子混
17　暗黄褐色土　ハードローム混
18　灰黄褐色土

2号集合土壙

1　黒褐色土　焼土粒・炭化物粒混
2　褐灰色土　ロームブロック混
3　暗黄褐色土　地山の崩落
4　灰黄褐色土

第65図　3号集合土壙





1　褐灰色土　炭化物粒多量混
2　灰黄褐色土　炭化物粒多量・ローム粒子微量混
3　暗黄褐色土　炭化物粒・ローム粒子多量混
4　暗褐色土　炭化物粒多量混
5　暗褐色土　炭化物粒少量混
6　灰黄褐色土　焼土・炭化物粒・ローム粒子混
7　褐色土　炭化物粒少量混
8　褐色土　ロームブロック多量混
9　黒褐色土　炭化物粒少量混
10　黒褐色土　ローム粒子多量混
11　褐灰色土　炭化物粒少量混
12　灰黄褐色土　ハードローム混
13　黒褐色土　焼土粒・炭化物粒多量混
14　黒褐色土　炭化物粒子多量混
15　暗褐色土　炭化物少量・ローム粒子多量混
16　灰黄褐色土　炭化物粒微量混
17　暗黄褐色土　砂質土
18　褐灰色土　ローム粒子多量混
19　黒褐色土　炭化物粒多量混
20　暗褐色土　炭化物粒多量混
21　褐色土　地山の崩落
22　暗褐色土　炭化物粒微量混
23　暗褐色土　焼土粒・炭化物粒多量混
24　黒褐色土　炭化物粒微量混
25　暗黄褐色土　ロームブロック多量混
26　黒褐色土　炭化物粒微量混

0　2m

(3)　焼土土壙

第1号焼土土壙（第66図　図版19）

1号焼土土壙は、D－5グリッドから検出された。41号土壙と重複しており、当焼土土壙が古い。古墳時代前期の2号方形周溝墓と3号方形周溝墓の中間に位置する。長軸を北西方向にもつ長方形の土壙で、四隅は円みをもつ。北西側のコーナーを41号土壙に壊されている。遺構確認の段階で、遺構上面は焼土に覆われていた。焼土は堅く、かなり火を受けたものと思われる。焼土部分以外の覆土は比較的軟らかく、ローム＝ブロック等が混じっている。規模は約2.60m×1.19mになる。確認面からの深さは中心部でも約15cmと浅く、低い段をもって立ち上がる。立ち上がり付近の深さは約7cmである。また、性格不明の後世のpit数基による攪乱を受けているため、床面はでこぼこであった。なお、B－B'のセクションラインにかかるpitには焼土がぎっしり詰まっており、深さも約15cmと、この土壙と関連するものと考えられる。このpitと重複している深さ約60cmのpitに関しては、当土壙より古いことは確かであるが、直接関連するものとは考えられない。

遺物は、近世の皿の破片（75図－5）が1点出土している。

(4)　土壙

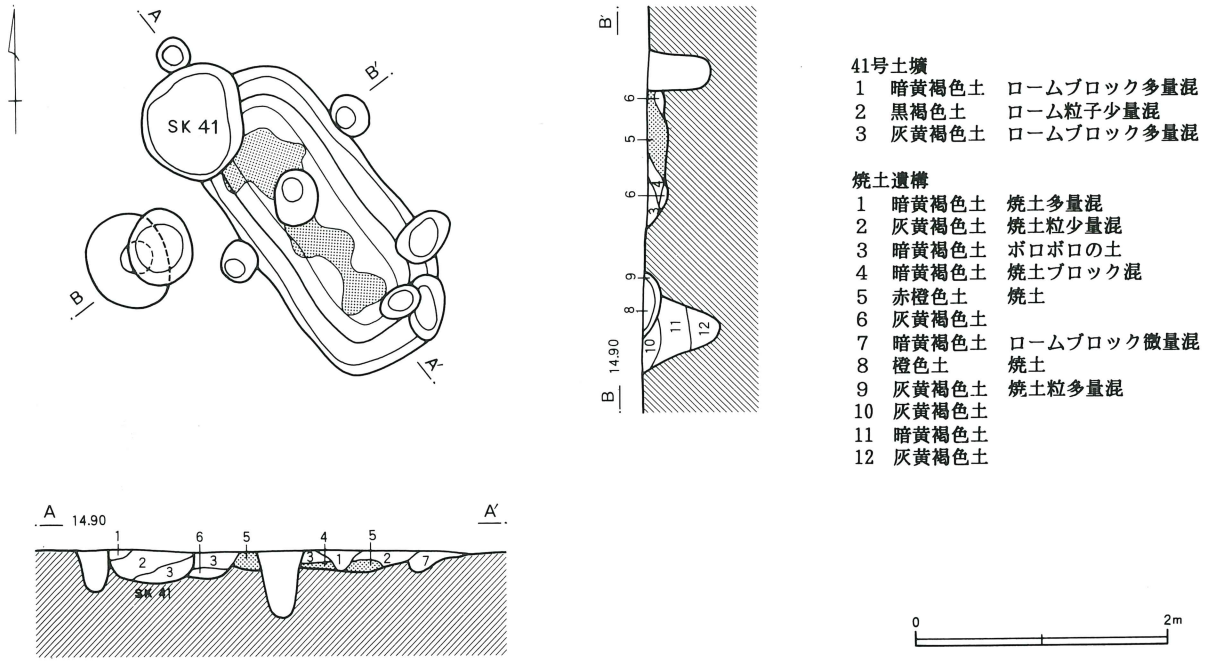
第1号・44号・45号土壙（第67図）

1号土壙は、E・F－1グリッドから検出された。44号・45号土壙と重複しており、1号土壙が新しい。長軸を北西方向にもち、ほぼ長方形になる。規模は約2.75m×1.02mになる。確認面からの深さは約25cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は比較的平らである。遺物の出土はない。

44号土壙は、E・F－1グリッド、1号土壙の北側から検出された。1号土壙と重複しており、大半を1号土壙に壊される。長軸は北北西になると思われる。規模は不明。確認面からの深さは約20cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物の出土はなかった。

45号土壙は、E・F－1グリッド、1号土壙の南側から検出された。1号土壙と重複しており、大半を1

第66図　1号焼土土壙・41号土壙



号土壙に壊される。形状は、ほぼ正方形なると思われ、残存部分の規模は約1.56mになる。確認面からの深さは約18cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物の出土はない。

第2号土壙（第67図）

2号土壙は、F－1グリッドから検出された。1号土壙の南東側にある。他の遺構との重複はない。長軸を北東方向にもち、ほぼ長方形になると思われるが、長軸の約三分の一は調査区外にある。規模は、幅が約0.90mになる。確認面からの深さは約23cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物の出土はない。

第3号土壙（第67図）

3号土壙は、F－2グリッドから検出された。2号土壙の南東側にある。他の遺構との重複はない。長軸を北東方向にもち、ほぼ長方形になると思われるが、長軸の約二分の一は調査区外にある。規模は、幅が約1.03mになる。確認面からの深さは約36cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は比較的平らである。遺物の出土はない。

第4号土壙（第67図　図版19）

4号土壙は、F－3グリッドから検出された。1号土壙のほぼ南にある。他の遺構との重複はない。長軸を北東方向にもち、ほぼ長方形になる。規模は約2.10m×1.13mになる。確認面からの深さは約20cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は平らである。遺物の出土はない。

第5号土壙（第67図　図版19）

5号土壙は、E－3グリッドから検出された。ほぼ円形で、径は約1.80mになる。確認面からの深さは約43cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は平らである。遺物の出土はない。

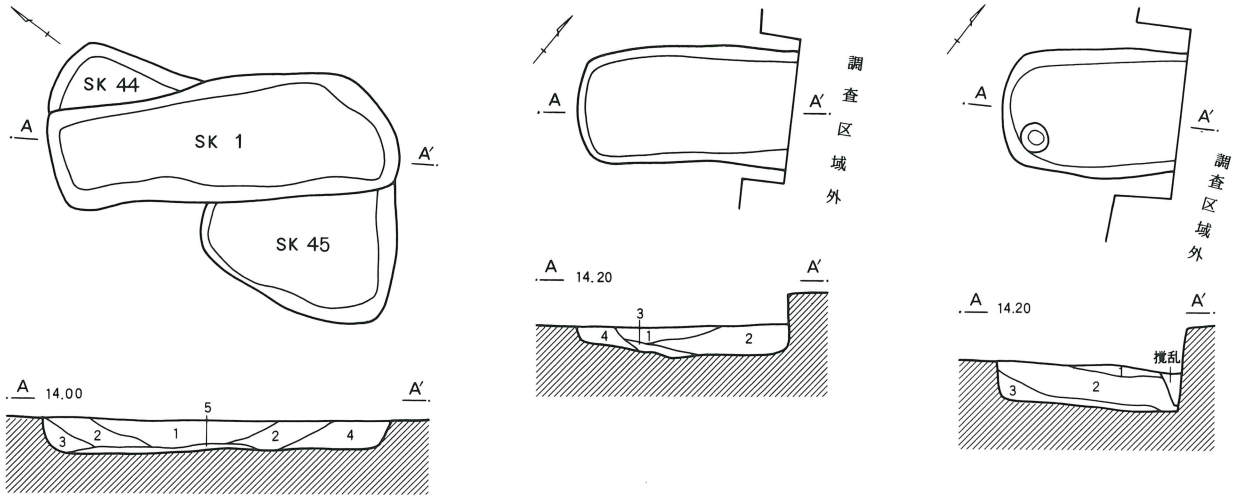
第9号土壙（第63図　図版17）

9号土壙は、D－2グリッドから検出された。1号竪穴状遺構に壊される。ほぼ円形で、径は約1.12mになる。確認面からの深さは約41cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は締まっており、ローム粒子が多く混じっていた。床面は平らである。遺物の出土はない。

第13号土壙（第67図）

13号土壙は、D－2グリッドから検出された。3号集合土壙の西側にある。小型で、ほぼ円形になる。径は約0.90mになる。確認面からの深さは約22cmで、緩やかなカーブで立ち上がる。遺物の出土はない。

第67図　中世・近世の土壙(1)



1号土壙

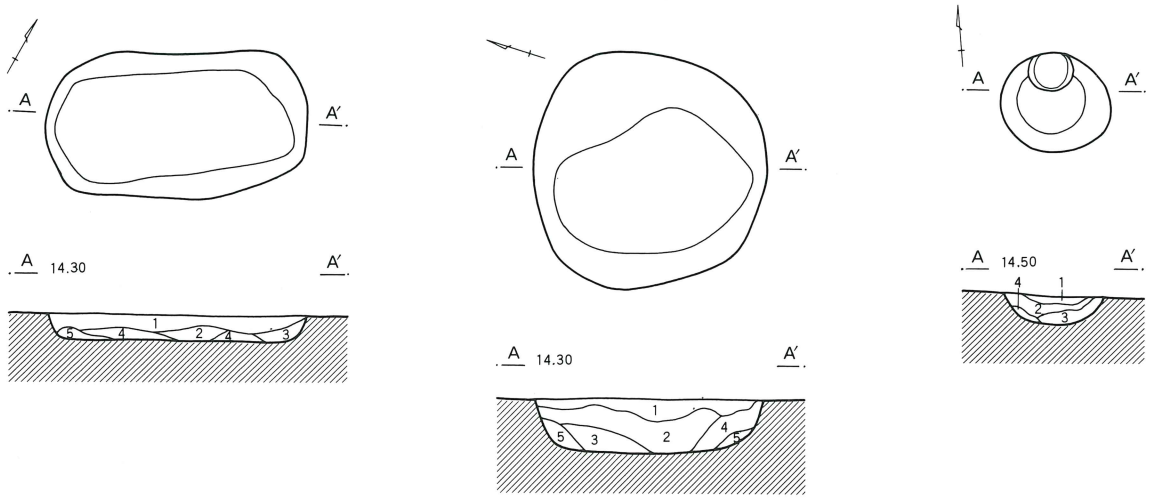
1　灰黄褐色土　焼土微量・炭化物粒・ローム粒子混
2　灰黄褐色土　炭化物粒・ローム粒子少量混
3　暗褐色土
4　暗黄褐色土　炭化物粒微量・ロームブロック混
5　黒色土　炭化物が敷き詰められた層

2号土壙

1　暗黄褐色土　ロームブロック少量混
2　黒褐色土　ローム粒子少量混
3　灰黄褐色土
4　暗黄橙色土　炭化物粒微量・ローム粒子多量混

3号土壙

1　暗黄褐色土　ローム粒子少量混
2　黒褐色土　炭化物粒・ローム粒子少量混
3　灰黄褐色土



4号土壙

1　黒褐色土　焼土・炭化物粒少量混
2　暗褐色土　炭化物粒微量混
3　暗褐色土　炭化物粒多量混
4　暗黄褐色土　ロームブロック混
5　褐色土　炭化物粒微量混

5号土壙

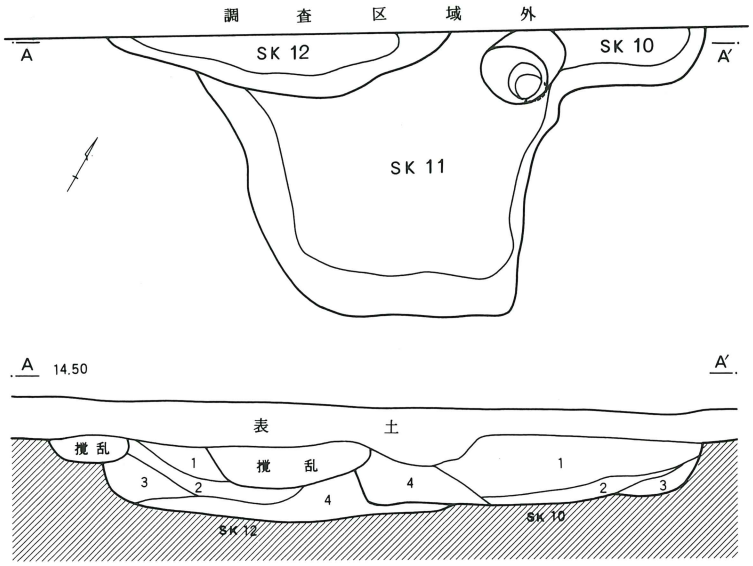
1　黒褐色土　炭化物粒・ロームブロック少量混
2　黒褐色土　ロームブロック多量混
3　灰黄褐色土　炭化物粒多量混
4　暗褐色土　焼土粒・炭化物粒・ローム粒子少量混
5　暗黄褐色土　炭化物粒微量混

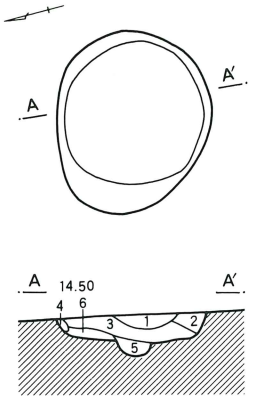
13号土壙

1　黒褐色土　炭化物粒多量混
2　暗黄褐色土　炭化物粒多量混
3　暗褐色土　焼土粒・炭化物粒少量混
4　暗褐色土　炭化物粒微量混

0　2m

第68図　中世・近世の土壙(2)





１０号土壙

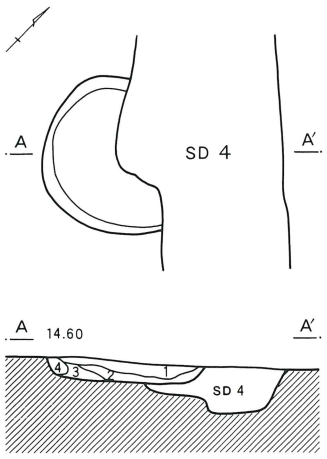
1　灰黄褐色土　ロームブロック多量混
2　黒褐色土　ローム粒子微量混
3　褐灰色土　ローム粒子多量混
4　褐灰色土　焼土粒・炭化物粒・ローム粒子少量混

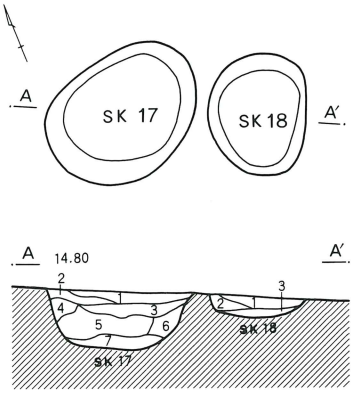
１２号土壙

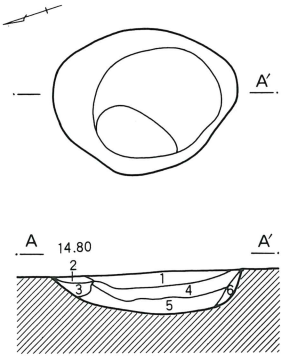
1　灰黄褐色土　ローム粒子多量混
2　黒褐色土　ロームブロック少量混
3　黒褐色土　ローム粒子微量混
4　暗黄褐色土　ハードローム粒子多量混

１４号土壙

1　黒褐色土　炭化物粒多量混
2　黒褐色土　炭化物粒・ローム粒子多量混
3　暗褐色土　焼土粒・炭化物粒少量混　ローム粒子多量混
4　暗褐色土　地山の崩落
5　黒褐色土　ボロボロの土　ハードローム混
6　暗褐色土　ローム粒子多量混







１６号土壙

1　黒褐色土　ローム粒子多量混
2　褐灰色土　炭化物粒・ローム粒子多量混
3　黒褐色土　焼土粒・炭化物粒少量混
4　褐色土　ロームブロック多量混

１７号土壙

1　暗褐色土　焼土粒・ローム粒子少量混
2　暗褐色土　焼土粒・炭化物粒少量・ローム粒子多量混
3　黒褐色土　焼土粒・炭化物粒多量混　古銭出土
4　暗黄褐色土　ロームブロック多量混
5　黒褐色土　炭化物粒微量・ローム粒子多量混
6　灰黄褐色土　ローム粒子微量混
7　褐色土　ロームブロック混

１８号土壙

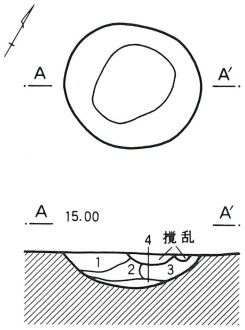
1　黒褐色土　炭化物粒・ローム粒子少量混
2　黒褐色土　炭化物粒少量・ローム粒子多量混
3　灰黄褐色土　焼土粒微量・ローム粒子多量混

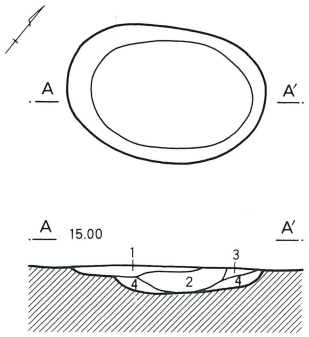
２７号土壙

1　黒褐色土　炭化物粒微量・ローム粒子多量混
2　褐灰色土　炭化物粒・ローム粒子多量混
3　黒褐色土　炭化物粒・ローム粒子少量混
4　黒褐色土　炭化物粒微量・ローム粒子少量混
5　黒褐色土　焼土粒・炭化物粒混・ローム粒子多量混
6　暗黄褐色土　炭化物粒少量混

0　2m

第69図　中世・近世の土壙(3)



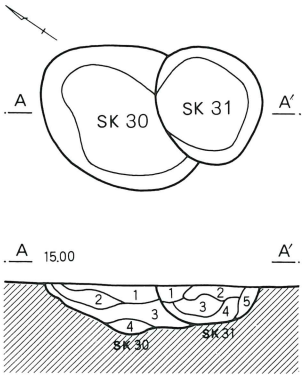


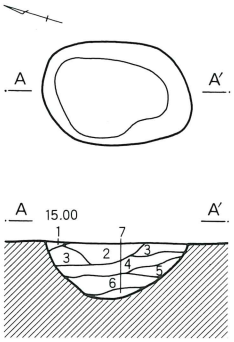
２８号土壙

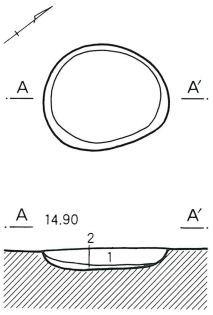
1　黒褐色土　炭化物粒少量・ローム粒子多量混
2　黒褐色土　炭化物粒多量・ローム粒子微量混
3　黒褐色土　焼土微量・炭化物粒・ローム粒子少量混
4　褐色土　炭化物粒微量・ローム粒子多量混

２９号土壙

1　黒褐色土　炭化物粒・ローム粒子微量混
2　黒褐色土　炭化物粒多量・ローム粒子微量混
3　暗褐色土　炭化物粒・ローム粒子少量混
4　暗褐色土　炭化物粒微量混







３０号土壙

1　黒褐色土　炭化物粒・ローム粒子多量混
2　黒褐色土　炭化物粒少量・ローム粒子多量混
3　黒褐色土　焼土粒・炭化物粒混・ローム粒子多量混
4　黒褐色土　焼土粒・炭化物粒・ローム粒子混

３１号土壙

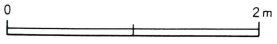
1　黒褐色土　炭化物粒多量混
2　黒褐色土　炭化物粒少量混
3　暗黄褐色土　炭化物粒混・ローム粒子多量混
4　灰黄褐色土　炭化物粒少量・ローム粒子多量混
5　褐色土　炭化物粒少量混

３２号土壙

1　黒褐色土　締まりよし
2　黒褐色土　炭化物粒多量混
3　黒褐色土　炭化物粒・ローム粒子多量混
4　褐灰色土　炭化物粒少量混
5　暗褐色土　炭化物粒微量混
6　灰黄褐色土　炭化物粒微量・ロームブロック混
7　褐色土　炭化物粒少量混

３８号土壙

1　黒褐色土　ローム粒子少量混
2　黒色土　ロームブロック混



第10・11・12号土壙（第68図）

10号土壙は、E－1グリッドから検出された。長軸を東北方向にもつが大半が調査区の北壁外にある。11号・12号土壙と重複し、最も新しい。土層断面から長さは約2.80mになると思われる。確認面からの深さは約55cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物の出土はない。

11号土壙は、E－1グリッドから検出された。ほぼ正方形の土壙で、10号および12号土壙に壊される。一辺の長さは約2.35mになると思われる。確認面からの深さは約70cmで、だらだらと立ち上がる。覆土はふかふかで締まりがわるい。遺物の出土はない。

12号土壙は、E－1グリッドから検出された。ほぼ正方形の土壙で、10号土壙に壊され、11号土壙を壊す。土壙の大半は調査区外であり、調査区際の長さは約2.75mになる。確認面からの深さは約60cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物の出土はない。

第14号土壙（第68図）

14号土壙は、D－2グリッドから検出された。縄文時代の3号住居跡及び中世の3号集合土壙と重複し、3号集合土壙よりも新しい。ほぼ円形で径は約1.22mになる。確認面からの深さは約22cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物の出土はない。

第16号土壙（第68図）

16号土壙は、D－3グリッドから検出された。4号溝と重複し、4号溝よりも古い。ほぼ円形で径は約1.22mになる。確認面からの深さは約18cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。遺物の出土はない。

第17号・18号土壙（第68図　図版19）

17号土壙は、E－3グリッドから検出された。南東側を18号土壙と接しているが、重複関係はない。プランは、ほぼ円形で径は約1.15mになる。確認面からの深さは約45cmで、緩やかに立ち上がる。寛永通寶（第76図2）が1点出土している。

18号土壙は、E－3グリッドから検出された。17号土壙の南東にある。縄文時代の19号土壙を壊している。プランは、ほぼ円形で径は約0.95mになる。確認面からの深さは約18cmで、緩やかに立ち上がる。遺物の出土はない。

第27号土壙（第68図　図版19）

27号土壙は、D－3グリッドから検出された。他の遺構との重複はない。プランは、楕円形で規模は約1.50m×1.14mになる。確認面からの深さは約33cmで、緩やかに立ち上がる。遺物の出土はない。

第28号土壙（第69図）

28号土壙は、D－4グリッドから検出された。他の遺構との重複はない。プランは、ほぼ円形で、径は約1.10mになる。確認面からの深さは約28cmで、緩やかな皿状に立ち上がる。遺物の出土はない。

第29号土壙（第69図　図版20）

29号土壙は、C－4グリッドから検出された。他の遺構との重複はない。プランは楕円形で、規模は約1.58m×1.07mになる。確認面からの深さは約20cmと浅く、緩やかに立ち上がる。遺物の出土はない。

第30号・31号土壙（第69図）

30号土壙は、C－3グリッドから検出された。31号土壙と重複しており、当土壙が古い。プランは楕円形で規模は約1.41m×1.11mになる。確認面からの深さは約38cmで、緩やかに立ち上がる。床は多少でこぼこしている。遺物の出土はない。

31号土壙もC－3グリッドから検出された。30号土壙を壊している。プランは、ほぼ円形で径は約0.95mになる。確認面からの深さは約30cmで、緩やかに立ち上がる。遺物の出土はない。

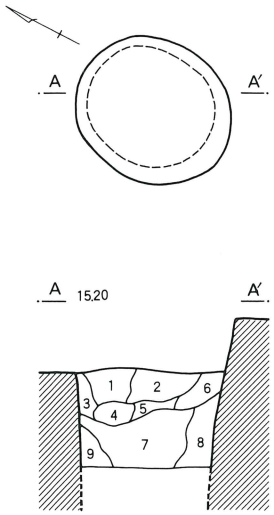
第32号土壙（第69図）

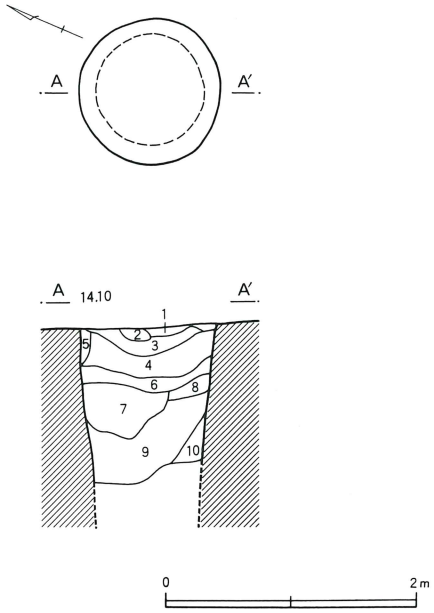
32号土壙は、C－3グリッドから検出された。30号・31号土壙の南西にある。プランは楕円形で、規模は約1.20m×0.80mになる。確認面からの深さは約44cmで、緩いカーブで立ち上がる。遺物の出土はない。

第38号土壙（第69図）

38号土壙は、D－6グリッドから検出された。2号方形周溝墓を壊す。プランは楕円形で、規模は約1.00m×0.82mになる。確認面からの深さは約15cmで、皿状に立ち上がる。遺物の出土はない。

第70図　1号・2号井戸





1　黒色土
2　黒褐色土　ローム粒子少量混
3　黒褐色土　ロームブロック混
4　黒色土　ローム粒子多量混
5　黒褐色土　ローム粒子微量混
6　黒褐色土　ローム粒子多量混
7　黒色土
8　暗黄褐色土　地山の崩落
9　灰黄褐色土　ロームブロック多量混

1　黒褐色土
2　褐灰色土　ロームブロック
3　黒褐色土　ローム粒子多量混
4　黒褐色土　ローム粒子微量混
5　暗褐色土　地山の崩落
6　黒色土　締まりなし
7　黒色土　締まりよし
8　黒褐色土　ロームブロック多量混
9　黒褐色土　粘性有　ロームブロック多量混
10　黒色土　粘性有　ロームブロック微量混

第41号土壙（第69図）

41号土壙は、D－5グリッドから検出された。1号焼土土壙と重複する。プランは、ほぼ円形で、径は約0.85mになる。確認面からの深さは約25cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。1号焼土土壙を壊しているが、覆土に焼土等は混じらない。遺物の出土はなかった。

(5)　井戸跡

今回の調査で井戸跡は2基検出された。井戸の形状は二つとも同じであり、ほぼ同時期のものと考えられる。出土地点も調査区の南側に寄っている。遺物が出土していないため、厳密な時期は不明である。

第1号井戸跡（第70図　図版20）

1号井戸は、D－6グリッドの調査区南壁際から検出された。1号方形周溝墓と重複する。プランは、ほぼ円形で、径は約1.20mになる。覆土の崩落が激しいため、確認面から約80cmを掘り下げた時点で調査を取りやめた。壁は直線状にまっすぐ立ち上がる。覆土には地山の崩落したものやローム＝ブロックが多く混じる。遺物の出土はなかった。

第2号井戸跡（第70図）

2号井戸は、F－5グリッドから検出された。縄文時代の2号住居跡を壊し、1号溝に壊される。プランは、ほぼ円形で、径は約1.12mになる。覆土の崩落が激しいため、確認面から約120cmを掘り下げた時点で調査を取りやめた。壁は直線状にまっすぐ立ち上がる。覆土には地山の崩落したものやローム＝ブロックが多く混じる。9層・10層あたりからは水が浸みだしている。遺物の出土はなかった。

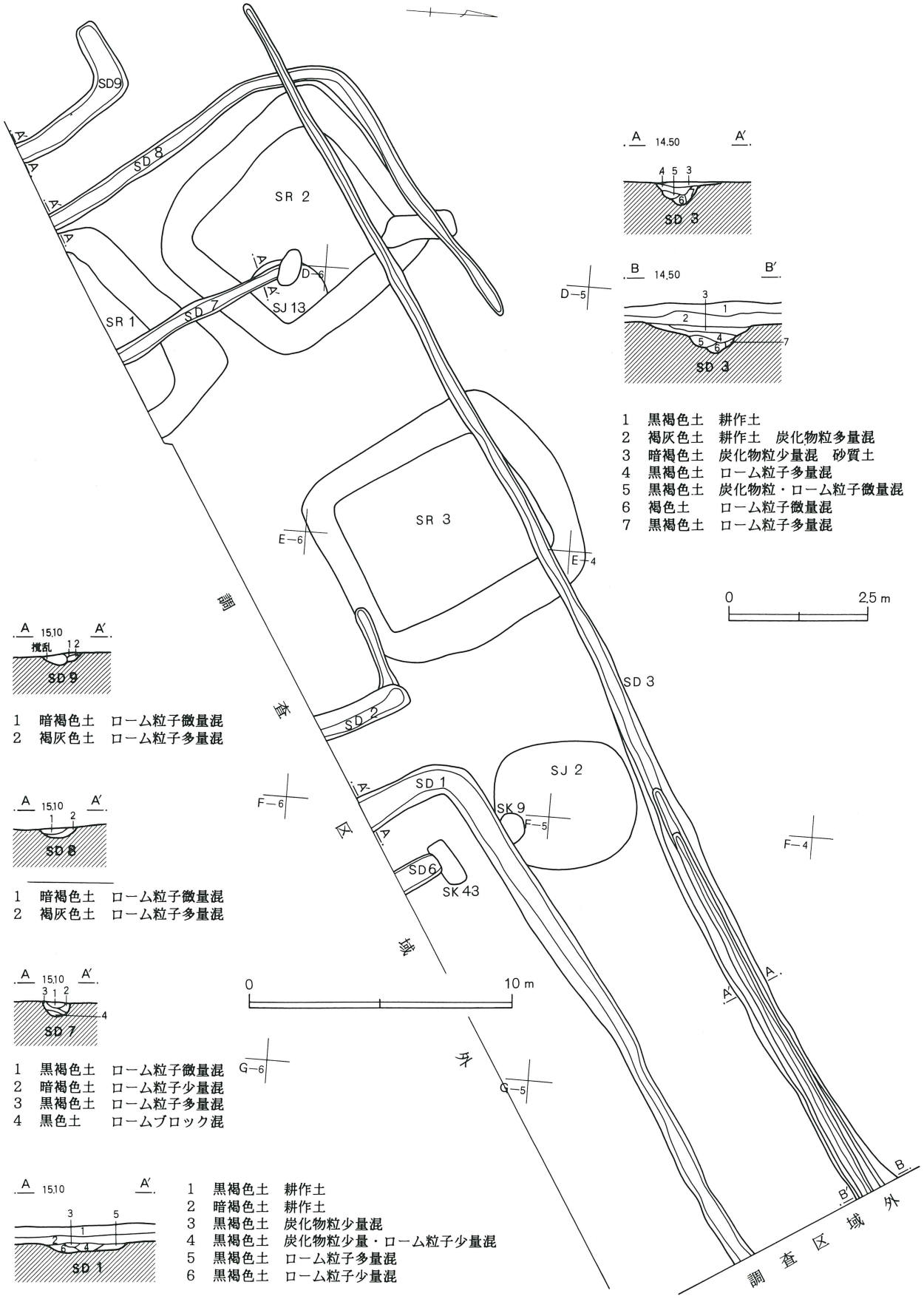
(6)　溝

溝は全部で9条検出された。

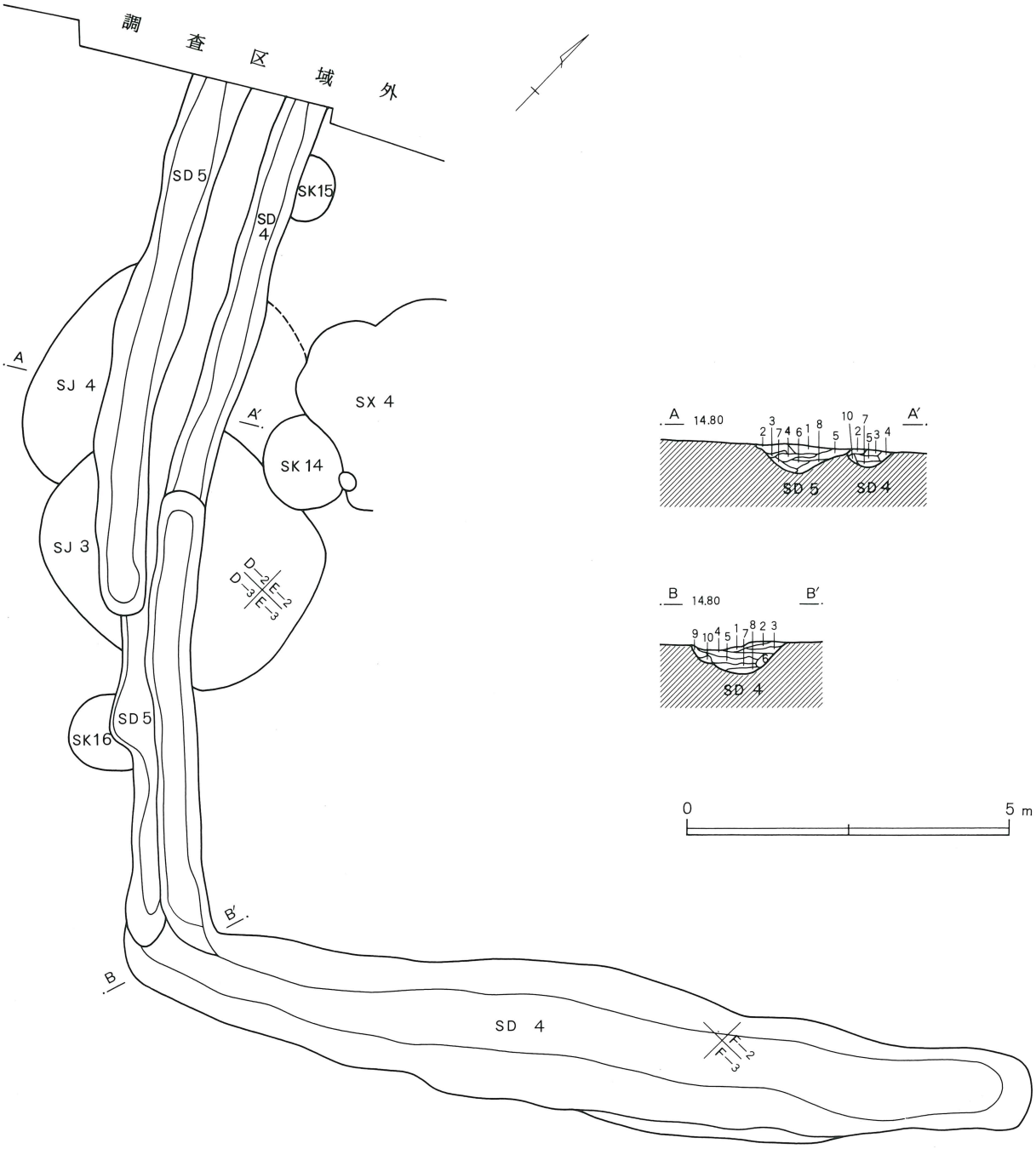
第1号溝（第71図）

1号溝は、E・F－5グリッドからF－4・G－4

第71図　1号・2号・3号・6号・7号・8号・9号溝



第72図　4号・5号溝



4号溝

1　灰黄褐色土　ローム粒子混
2　黒褐色土　炭化物粒・ローム粒子混
3　褐灰色土　焼土粒微量混
4　暗褐色土　炭化物粒・ローム粒子少量混
5　灰黄褐色土　炭化物粒・ローム粒子多量混
6　褐色土　ロームブロック
7　黒褐色土　炭化物粒・ローム粒子多量混
8　黒褐色土　ローム粒子少量混
9　褐色土　ロームブロック
10　暗褐色土　炭化物粒少量混

5号溝

1　黒褐色土　焼土粒微量混
2　黒色土　焼土粒少量混
3　褐色土　黒色土微量混
4　暗褐色土　焼土粒・炭化物粒多量混
5　灰褐色土　炭化物粒少量・ローム粒子多量混
6　黒褐色土　炭化物粒多量混
7　暗褐色土　炭化物粒・ローム粒子多量混
8　暗褐色土　炭化物粒少量・ローム粒子多量混

グリッドにかけて検出された。北東から南西に向かって延び、E－5グリッド内で、ほぼ90度の角度で南東方向に曲がり、調査区外に達する。溝の幅は平均で約1mになり、深さは約15cmになる。2号井戸を壊している。覆土は全体にふかふかしている。遺物の出土はなかった。

第2号溝（第71図）

2号溝はE－5グリッド内から検出された。南西方向から北東に向かい、E－5グリッド内で、ほぼ90度の角度で南東方向に曲がり、調査区外に達する。溝の幅は平均で約1m弱で、深さは約10cm程度である。覆土は、1号溝同様、全体にふかふかしている。遺物の出土はなかった。

第3号溝（第71図　図版20）

3号溝はC－6グリッドからG－3グリッドにかけて、調査区の南側三分の一ぐらいの所を横走するかたちで南西方向から北東方向に向かい調査区外に達する。北東部の調査区際では、溝は三段になり、上幅も約1.20mになる。そしてE－4グリッドあたりで徐々に細くなり、最後のC－6グリッドでは約30cm幅になり消滅する。北東部の調査区際深さは、約50cm、南西の溝が消滅する直前では、深さ約15cm程度になる。8号溝を壊している。覆土は、全体にふかふかしている。近世の陶器片が数点出土している。

第4号・5号溝（第72図　図版20）

4号溝はF－2グリッドから南西方向に向かい、E－3グリッドでほぼ90度北西方向に向きを変え、D－2グリッドで、調査区外に達する。D－2・3グリッドでは、5号溝が4号溝の西側を併走する。4号溝は上幅が平均2mぐらいになり、深さも、最深部では約65cmほどになる。16号土壙を壊す。覆土はふかふかしている。近世の陶器片が数点出土している。

5号溝は、D－2・3グリッドのところで、4号溝の西側を併走する。5号溝の上幅は平均約0.9mになり、深さは約45cmになる。4号溝を壊す。覆土は、全体にふかふかしている。遺物の出土はない。

第6号溝（第71図）

6号溝はF－5グリッドで検出された。北西方向に走る溝である。溝幅は約1m、深さは約10cmと浅い。覆土は、全体にふかふかしている。遺物の出土はない。

第7号溝（第71図）

7号溝はD－5グリッドで検出された。北西方向に走る溝である。溝幅は約0.70m、深さは約20cmになる。覆土はよく締まっていた。遺物の出土はない。

第8号溝（第71図）

8号溝はC－7グリッドの北西隅から北西方向に延びC－5・6グリッドの境目あたりで約90度北東方向に向きを変える。3号溝に壊される。溝幅は約0.70m、深さは約25cmになる。覆土はよく締まっていた。遺物の出土はない。

第9号溝（第71図）

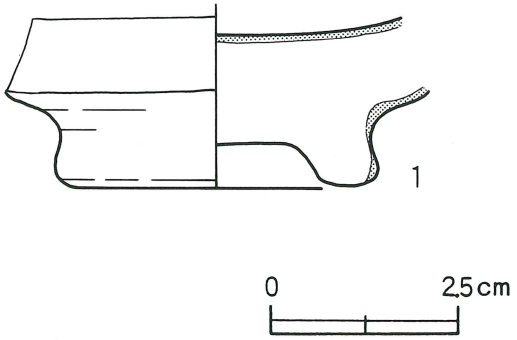
9号溝はC－7グリッドから北西方向に延びC－6グリッドで約90度南西方向に向きを変える。溝幅は約0.90m、深さは約15cmになる。覆土はよく締まっていた。遺物の出土はない。

(7)　中世・近世の遺物

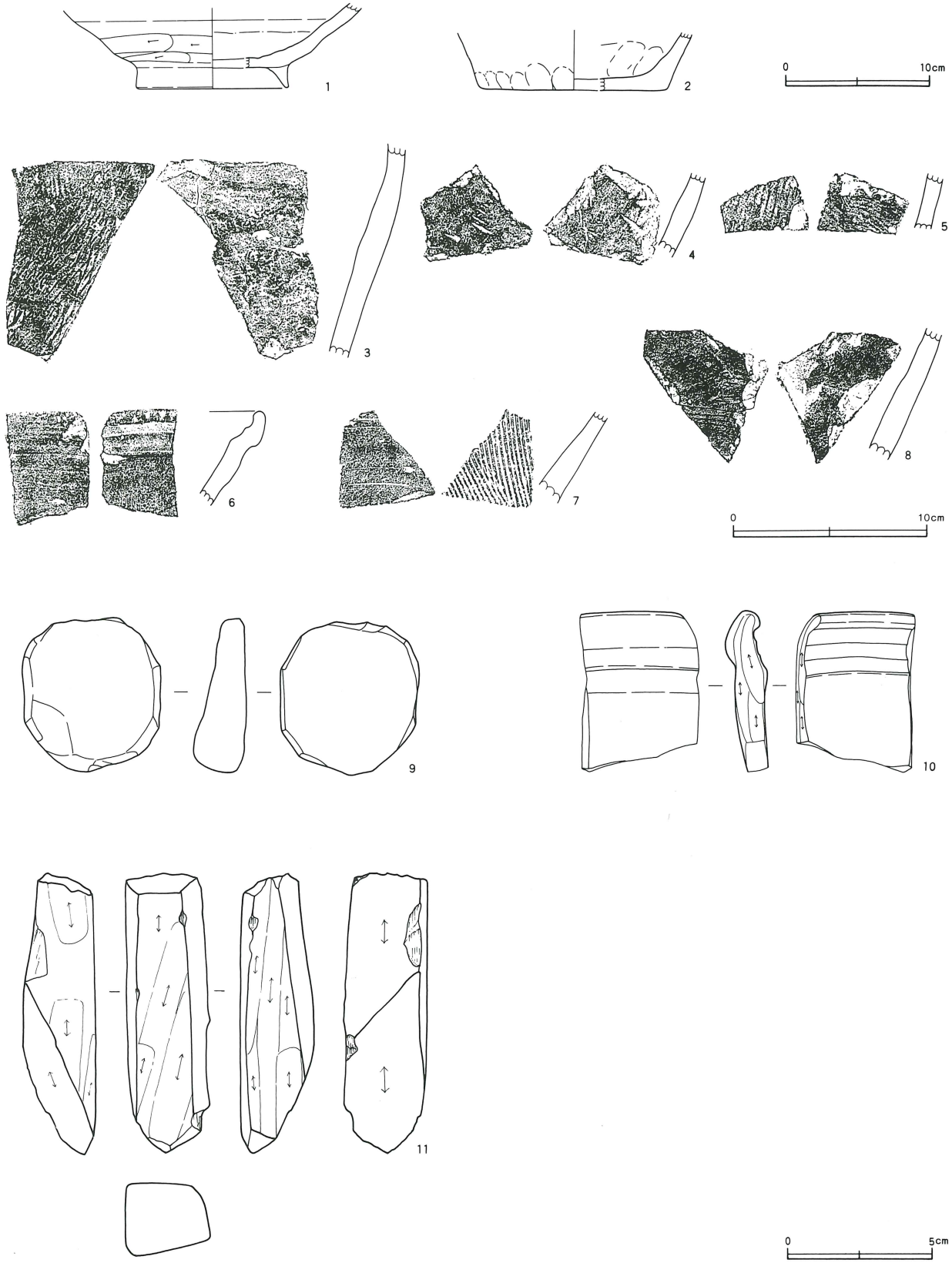
青磁片（第73図　図版37）

F－2グリッドより青磁の破片が出土している。遺構外からの出土であり、他の遺物との関連は不明である。また、高台部分の破片のみであり、器種も不明である。器壁は厚く、高台部分は削りだしている。釉は2mmほどの厚さでかけられている。(73図のスクリントン部分)

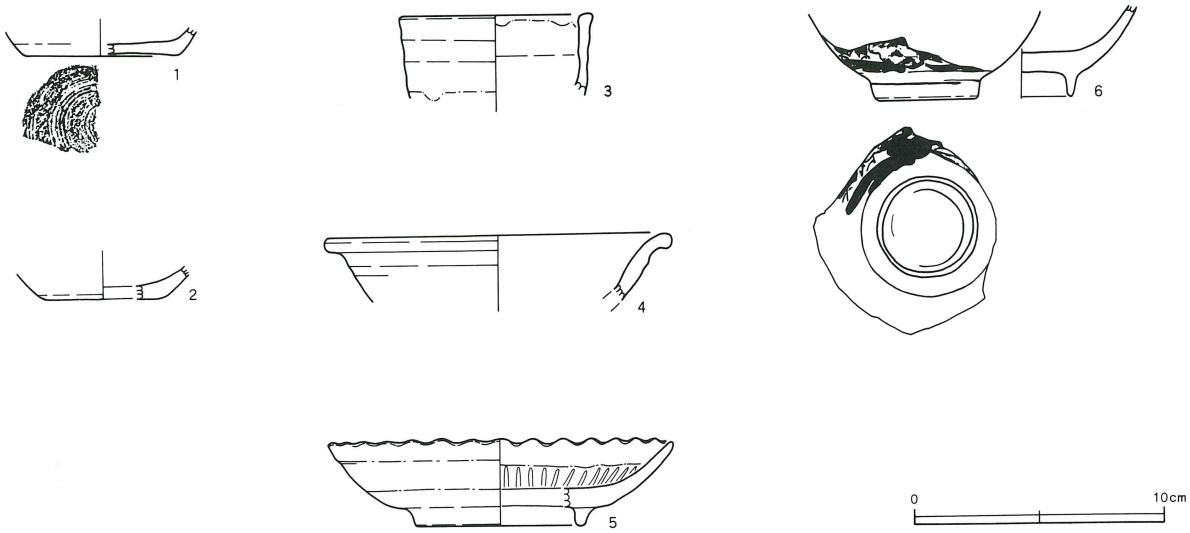
第73図　青磁片

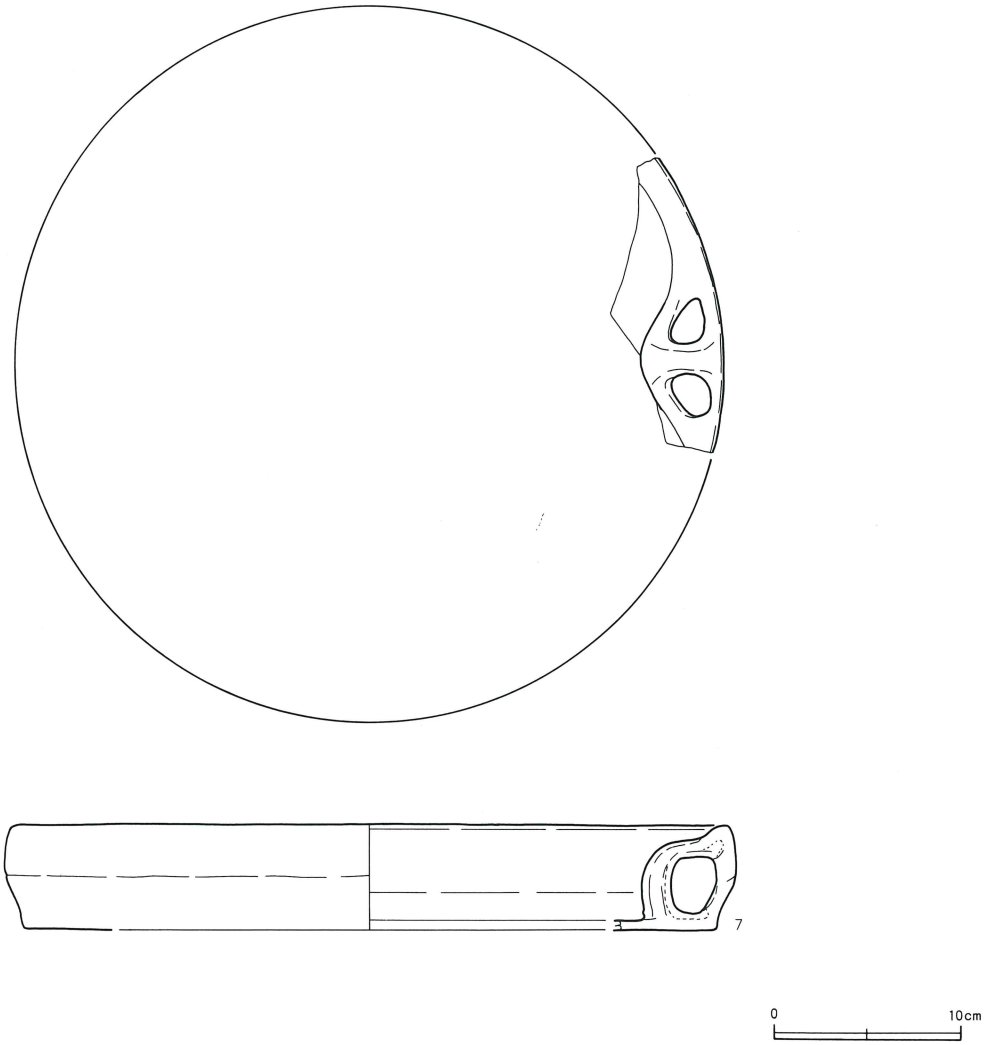


第74図　中世・近世の遺物(1)



第75図　中世・近世の遺物(2)





中世・近世の遺物（第74・75図　図版37）

74図１は常滑の片口鉢の破片である。高台の径は10.5cm、現存高は5.8cmになる。色調は灰褐色。擂り鉢として使用されたもので、よく使われている。

２は壷の底部である。在地産のものである。底部径は13.0cm、現存高は4.2cmになる。色調は明赤褐色。寄居周辺から南比企あたりの石が混じる。15世紀前後のものと考えられる。

３～５・８は須恵質の破片である。

６・７は瀬戸・美濃系の擂り鉢の破片である。胎土は黄白色で、鉄釉がかけられている。10は６の実測図であるが、陶器の割れ口を砥石として利用したものである。

９は常滑の陶器の破片と思われるが、周囲を打ち欠いて丸く加工しており、何らかの工具かと思われる。

11は砥石である。

第75図１・２はかわらけの破片である。１は底径が6.2cm、現存高は1.1cmになる。糸切り底である。２は底径が4.8cm、現存高は1.2cmになる。

３は香立てと思われる。推定口径は7.6cm、現存高は3.3cmになる。古瀬戸と思われる。

４は皿になると思われる。推定口径は13.5cm、現存高は2.7cmになる。志野と思われる。

５は花弁状の皿である。口径は13.5cm、底部径は6.8cm、器高は3.4cmになる。瀬戸・美濃系である。１号焼土土壙から出土している。

６は江戸末から明治ぐらいの碗である。高台の径は4.0cm、現存高は3.5cmになる。３号溝から出土している。

７は内耳土鍋である。推定口径は37.8cm、底部径37.0cm、器高は5.6cmになる。内耳の付き方から近世のものになると思われる。

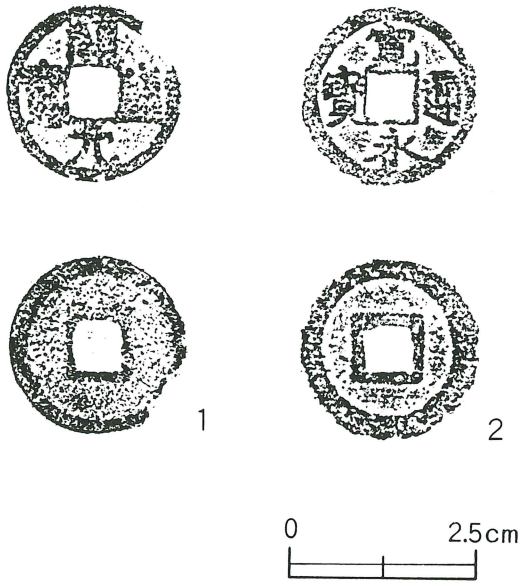
以上、代表的な中世及び近世の資料を取りあげたが他にもグリッドから多数破片が出土している。

古銭（第76図　図版37）

第76図１は、開通元寶である。一部欠損していたが文字等が判別できる状態で出土した。２号方形周溝墓の覆土に落ち込んで出土している。

第76図2は、寛永通寶である。17号土壙より出土している。

第76図　古銭



V　結　語

1　縄文時代の遺構と遺物

縄文時代住居跡の性格と分布状況

縄文時代の住居跡は拡張された住居跡も入れると全部で15軒検出された。うち５軒は単独の住居跡で、それなりの規模を持っているものが多い。ただ諸々の条件から現在の確認面から、ある程度の深さを持って残っていたものは、２号住居跡と10号住居跡のみである。ただし10号住居跡は一度拡張されているので、２軒分と考えてさしつかえないであろう。

他の９軒は、先にも指摘したが、C・D－２・３グリッド及びその周辺から纏まって検出された。そのうち、３号・４号・５号・12号の各住居跡は比較的規模が大きく、この纏まりの外周から検出されたが、残りの６号・７号・８号・９号の各住居跡は、いずれも規模が小さく、それぞれ重複して存在する。また、11号住居跡は一部分だけしか確認できず、大半は調査区外にあるため、断言はできないが、まとまりの外周に存在する住居跡の一軒であった可能性が強い。

一定の規模を有する５軒の住居跡は、１号・２号・13号・10号・14号の順に東側より南側を経て西側の隅まで弧を描くように分布している。それぞれ単独の住居跡であり、時期的にも微妙な差があると考えられる。これらの住居跡の前後関係については後に詳しく触れたいと思うが、14号住居跡が最も古く、次いで８号・２号・10号住居跡、１号住居跡の順で新しくなると考えられる。なお、10(a)号、10(b)号住居跡の遺物は、覆土中で混ざり合っており、炉体土器以外はどちらの住居跡に属するものか判別が不可であった。

２号住居跡は、ほぼ楕円形で四本の柱穴は、ブラック＝バンドまでしっかり掘り込まれており、中央よりやや北寄りに地床炉を持つ。壁周溝も一周し、しっかり掘り込まれている。入り口は南側になる。10号住居跡は、ほぼ円形の住居跡で、拡張された住居跡である。住居跡の規模を計算すると拡張前の住居面積は約10.86㎡であったのが、拡張後には、約20.25㎡とほぼ二倍近くになっている。柱穴は２軒とも５本ずつ確認されており、それぞれ壁周溝を持っている。10(b)号住居跡からは炉体土器が検出されており、炉跡は中央よりやや南西壁寄りに存在する。10(a)号住居跡の炉跡は、10(b)号住居跡の炉跡を避けるように、中央よりやや南南西寄りに存在する。10(a)号住居跡の炉跡の南側には径が約40㎝、深さ約30㎝程の pit が存在し、土器が埋設されていた可能性がある。おそらく廃棄の時点で抜き取られたのであろう。炉の位置及び pit の配列、壁周溝の状態から南東方向に入り口があったと考えられる。13号住居跡は、10号住居跡のほぼ南東方向約10ｍのところで検出された。２号方形周溝墓に壊されているため全貌は明らかではない。確認面からの深さは浅く、壁周溝も検出されなかったが、中央よりやや西側寄りに、地床炉が見つかっており、柱穴も確認されている。14号住居跡は調査区の北西隅の調査区際で、住居跡の二分の一強が検出された。炉跡もちょうど半分だけ見つかっている。出土遺物は、10号住居跡や13号住居跡よりも、やや古めである。１号住居跡は調査区の東寄り、標高も13.8ｍと低いところで検出された。住居プランは円形と考えられるが、後世の攪乱が激しく、約半分は住居の壁は確認できなかった。柱穴は壁際を一周するように巡り、炉跡は中央からやや北寄りで検出された。地文が撚り糸の深鉢の胴部が、炉体土器として使われており、その外側には無文の浅鉢の破片が配されていた。入り口は南東側である。これらの一定規模を有する住居跡は、微妙に時期がずれて存在しており、出土遺物の内容から併存していた可能性があるのは10号住居跡と13号住居跡ぐらいと考えられる。

C・D－２・３グリッド及びその周辺の外周から検出された３号・４号・５号・11号・12号の比較的規模の大きい住居跡は、他の６号・７号・８号・９号の小型の住居跡を取り囲むように存在している。３号・４

号住居跡は後世の溝に壊され、11号住居跡はその大半が調査区外に存在するため、住居跡の構造は判然としないが、５号及び12号住居跡は４本の柱穴と地床炉を持つ。確認面からの深さは浅く、壁周溝も持たない。５号住居跡の炉は住居跡のほぼ中央にあるが、12号住居跡の炉は中央よりやや北西寄りに位置する。これは５号住居跡がほぼ円形で、12号住居跡がほぼ楕円形であることと関係すると思われる。いずれの住居跡も遺物の出土量は少ない。

次に６号～９号の小型の住居跡であるが、いずれも径が３ｍから４ｍ前後のほぼ円形に近い住居跡で、確認面からの掘り込みも浅く、柱穴の本数や規格もまちまちである。また、６号住居跡の場合は確認が不可能であったが、他の７号・８号・９号の各住居跡からは炉跡は検出されていない。８号住居跡以外は遺物の出土量も少なく、これらの住居跡を通常の住居跡と認定するのは無理があると思われる。しかしながら、それぞれの重複関係の追跡は可能であり、これらの中で最も新しいと考えられる８号住居跡からは、一定時期の遺物が纏まって出土していることなどから、何らかの建物跡であったと思われる。また、これらの小型の建物跡の周辺からは、遺物を伴う土壙も数基検出されている。これらは、住居跡から出土する遺物と相前後する時期のものであり、この周辺が一定期間、当時の人々の生活の場であり、小型の建物跡が何らかの遺構であったことは間違いないであろう。なお、この地点から出土している中期中葉の土器は、当遺跡の中では古いものが多い。また、磨製石斧と磨製石斧の刃先だけの部分も多く目に付く。

６号～９号の各住居跡が集中するＤ－２・３グリッドは、ちょうど地形の変換点際にあたり、このグリッド内で台地が東に向かって低くなり始める。標高は14.60ｍ～14.70ｍぐらいである。確認面の等高線を見ると、この箇所に向かって東側からかなり緩やかな谷が入っていたことがわかる。

今回の調査は、東町二丁目遺跡全体の西南側三分の一の、更に約四分の一ぐらいにあたる約2,200㎡の調査であり、遺跡全体でこれらの遺構の分布がどのような位置を占めるのかについては言及できないが、表面採集資料も含めた全体の傾向として、より北側に古手の土器が出土するようである。このことは、今回の調査区の北東地点で上尾市教育委員会が行った確認調査（上尾市教委 1994）の際に出土した資料からも指摘できる。なお、この確認調査の際には遺構は検出されていない。

遺構外の遺物の分布状況

遺構外からは多量の縄文土器片と少量の石器などが出土している。

当遺跡から出土した縄文土器は大半が中期中葉のものであり、他に中期後葉の土器と後期中葉の土器が出土している。

全体の傾向としては、Ｃ・Ｄ－２・３グリッド、Ｃ・Ｄ－６グリッド、Ｆ－３グリッドなどからの出土量が多い。なお、今回の調査区内では座標軸Ｙ＝－20.340以西では遺構の検出量、遺物の出土量が共に少ないことが指摘できる。遺物の大半は、中期中葉の土器であり、これに中期後葉のものが若干混じる状況といえよう。また、後期中葉の土器が一地点から纏まって出土しており、今回は検出できなかったが、今後、同時期の遺構が検出される可能性も強い。上尾市史（上尾市 1992）によれば、以前にも後期中葉の土器が当遺跡より表面採集されている。なお、今回の調査区内では、中期前葉以前の土器はほとんど見つかっていないが、これは、当遺跡の立地する場所が市内でもより遺跡の分布密度が薄い地域であること、当遺跡が台地の奥に位置することによるものであろう。

中期中葉の土器は調査区全体から見つかっているが勝坂式土器や阿玉台式土器の比較的古手の土器はＣ－３やＦ－３グリッドなど北寄りから多く出土する傾向を示している。これに反し、阿玉台式でもより新しい段階のものや加曽利Ｅ式期のものはＣ－６グリッドなど調査区の南寄りに多く出土する。また、10(b)号住居跡に炉体土器として使われているいわゆる中峠式（註１）の土器に代表されるような連続「コ」字状文を持

つ土器片は、遺構外はともかく、10号住居跡からも全くと言っていいほど出土していない。このことは大宮台地に中峠式系統の土器が持ち込まれる際の状況が伺えて大変興味深い。

中期後葉の土器は、調査区全体からわずかに出土しているが、どちらかといえば南東寄りに多く出土しているようである。

中期以外では、先にも触れたが後期中葉加曽利B式期の土器が出土している。加曽利B式期の土器はC－3グリッドと8号住居跡の覆土から出土している。いずれも同一個体の破片と思われる。今回の調査では同時期の遺構は全く検出されなかったが、上尾市史によれば、同時期の破片が以前に遺跡内で採集されたとのことであり、今後この時期の遺構が検出される可能性があるといえる。

土器以外の遺物では、F－3グリッドの1号溝の覆土中より三角壔型土製品と思われるものが出土している。胎土は脆く、欠損品であるが、均等な三角柱形ではなく、底面に対する上辺が弓状に張るタイプのものと考えられる。関東での出土は珍しく、これまでに茨城県下や東京都下で数点報告されているのみである。

石器は、石鏃、打製石斧、磨製石斧、スクレイパー、石皿、磨石などが出土している。

石鏃は黒曜石製のものが10号住居跡から1点見つかっているのみである。打製石斧や磨製石斧は分布にこれといった偏りはなく、各遺構内やグリッドから出土している。ただ、石器の出土状況で特筆すべきは磨製石斧の刃先だけの出土が目立ったことである。また、出土範囲は、座標軸X＝－3.490以北に限られる。この分布範囲は比較的古手の中期中葉の土器の分布と重なる。このことが何を意味するのか興味深いが、今回は数点だけの出土であり、事実関係を指摘するだけにとどめておく。

東町二丁目遺跡の中期中葉の土器

各遺構より出土した中期中葉の土器は、第77図・第78図に示した。

第77図－1は、21号土壙より単独で出土している。勝坂式系の小型深鉢である。口縁部が内湾し、胴部には長方形の区画を持つ。胴下半部は長方形区画のための隆帯を利用し、「く」の字状に屈曲する。長方形の区画は隆帯で表現され、隆帯に沿って連続爪形文が施され、その内側には沈線が施される。口縁部は無文で円環状の突起を持ち、突起状には刻みの入った隆帯が付けられる。

第77図－2・3・4は8号住居跡から一括して出土している。

2は勝坂式系終末の浅鉢である。口縁内部に稜を持ち「く」の字状に内湾する。両端を抱え込むような隆帯が特徴的な土器である。隆帯上は沈線で施文される。この部分しか残っていなかったが、反対側にも同様の隆帯が付くと思われる。

3・4は同様の深鉢になると考えられる。3はやや大きめのものと小さいものとの8個の波状に、4は4個の波状の深鉢になると考えられる。口縁部はやや内湾し、頸部は括れる。胴部は撚糸文が施される。やはり勝坂式系の深鉢になるのであろうか。終末の土器である。

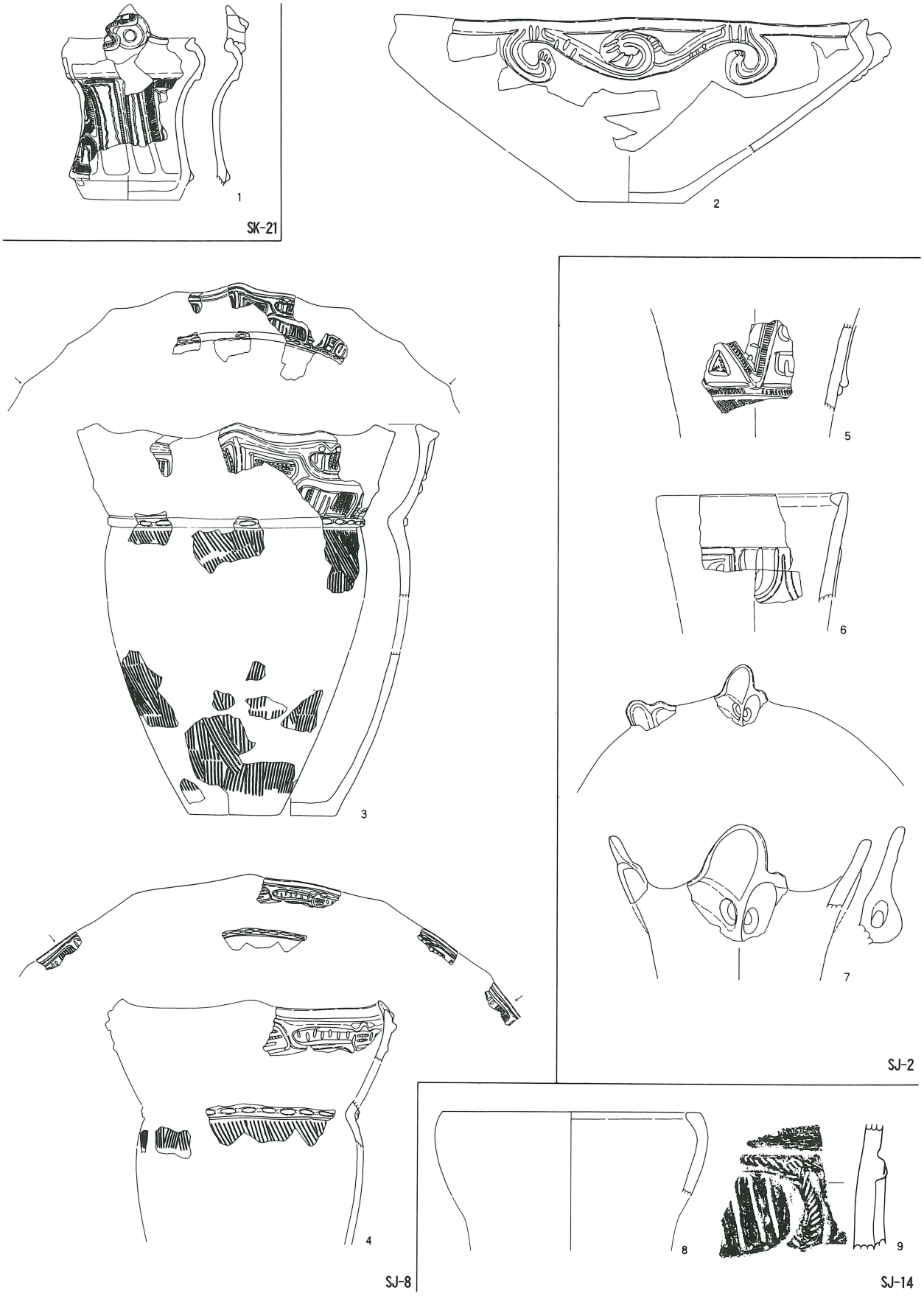
第77図－5・6・7は2号住居跡からの出土である。2号住居跡は出土土器の点数は多かったが、図示できるものが少なかった。勝坂式終末の土器、加曽利EⅠ式期の土器などが混在している。

5・6は勝坂式終末の円筒形深鉢土器である。5は口縁部を欠く。胴部上半に文様帯が見られ、下半部にはRLの縄文が施される。胴上半部は刻みを持つ隆帯、沈線、連続刺突で施文される。6も5同様の深鉢で、口縁部が無文帯になる土器である。口唇部は平らになり、断面三角形になって内側に肥厚する。沈線と隆帯で施文される。7は波状部分だけであり、残っている部分は無文である。正面の把手だけを見ると勝坂式系の土器のように思えるが、器形からは阿玉台式系の土器に近いように思われる。今後に課題を残す土器である。

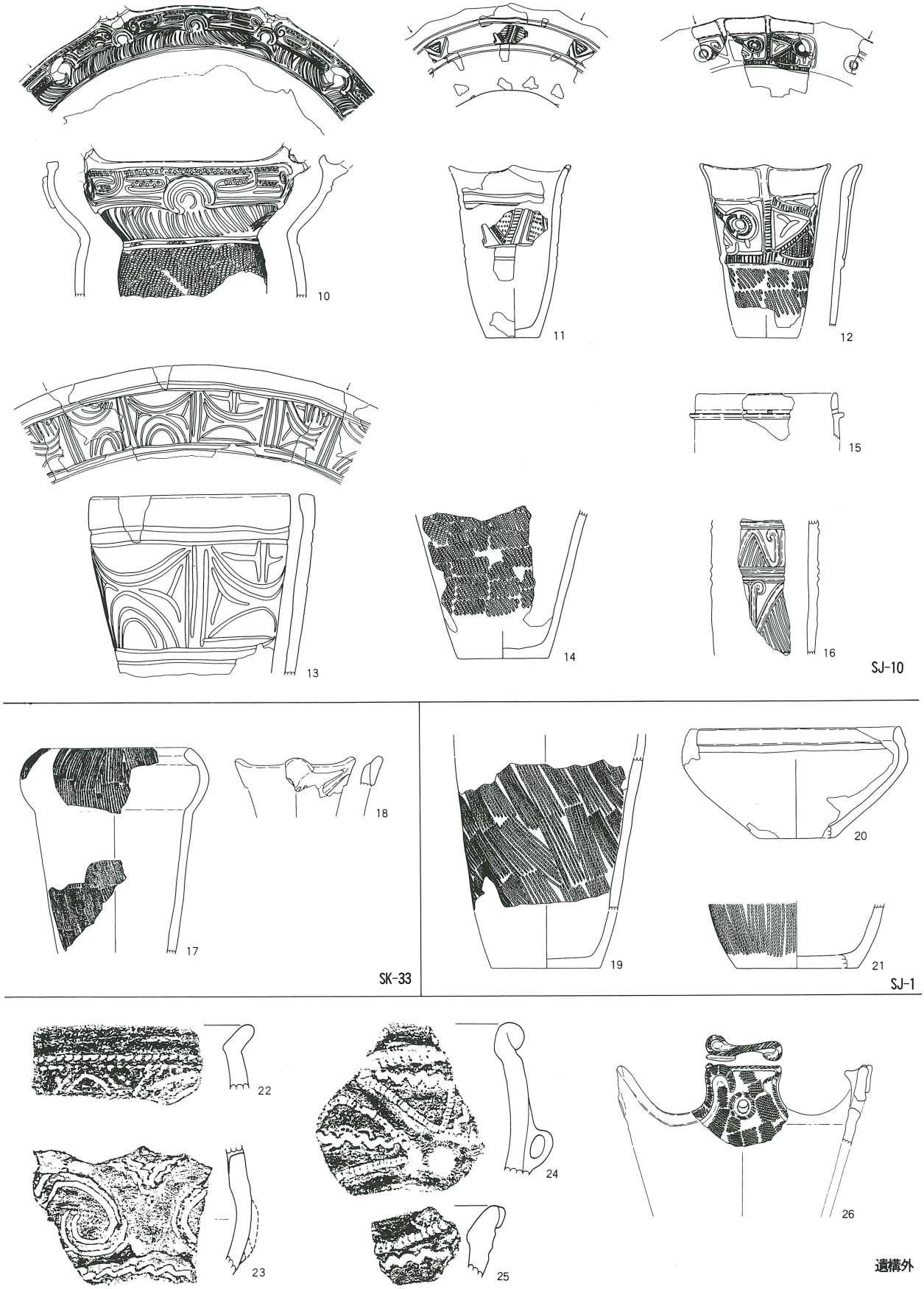
第77図－8・9は、14号住居跡から出土している。

8・9は勝坂式終末の深鉢土器片である。8は口縁

第77図　東町二丁目遺跡　中期中葉の土器(1)



第78図　東町二丁目遺跡　中期中葉の土器(2)



部が無文になる土器で、口縁部は緩やかに内湾する。

９は、８とは別個体であるが、同様の土器の頸部文様帯にあたる。刻みを持つ隆帯で区画された内部は、縦方向の沈線で施文される。８号住居跡や２号住居跡よりも先行する可能性がある。

第78図－10・11・12・13・14・15・16は10号住居跡からの出土である。10号住居跡は、住居を拡張しており、住居跡の深さもあったため出土土器の点数は多い。また、10号住居跡の周辺からは、ほとんど土器片が見つかっておらず、10号住居跡が後世においてあまり攪乱を受けていなかったことが伺える。しかし、住居内の遺物に完形品はなく、廃棄された住居跡がどのようなものであったのかを物語っている。

なお、10の土器が拡張前の炉跡に残っていた以外は拡張前と拡張後の土器を判別することは不可能であった。

10は、いわゆる中峠式とされる深鉢土器である。拡張前の住居跡で炉体土器として使われていたものである。２単位の波状突起を持つと思われるが、炉体土器として使用するためなのか、突起の部分は壊されてから埋設されたようである。口縁部から頸部文様帯を区画する隆帯の間は、連続する「コ」字状文と沈線により装飾される。頸部文様帯には暗文状の浅い沈線が無造作に施されている。頸部の括れから下の胴部にはＲＬの縄文が全体に施される。また、括れの部分には横走する２本の沈線が施されているが、この沈線は、胴部に縄文が施された後に付けられている。この土器の時期的な帰属については、子和清水遺跡83号住（松戸市教育委員会1978）と花積貝塚２Ａ号住（埼玉県遺跡調査会1970）の中間ぐらいの位置を考えておきたい。

11は、勝坂式終末の小型の円筒形深鉢土器である。四単位の小波状になり、口縁部は無文になる。胴部上半の文様構成は77図－２と同様になると考えられる。胴下半部は無文である。

12も勝坂式終末の小型の円筒形深鉢土器である。口縁は四単位の小波状になり、波長部から縦方向の隆帯が、胴部文様帯を区画する隆帯の部分まで垂下している。胴下半部にはＲＬの縄文が施される。胴上半部は刻みを持つ隆帯、沈線、連続刺突等で施文される。

13は、円筒形深鉢土器の上半部である。平縁で、口唇部は平らになり、やや内側に肥厚する。沈線のみで施文される。口縁部は無文になり、胴上半部文様帯との区画は二本の沈線が施される。また、胴下半部との区画も同様の沈線が施される。上下の区画の間は、それぞれ三本の沈線で四つに区画され、三叉状文や弧状の文様が施される。勝坂式系の深鉢である。

14は、深鉢の下半部で地文にＲＬの縄文が施される勝坂式系もしくは中峠式系の深鉢と考えられる。

15は有孔鍔付土器の口縁部破片である。小破片であるが、その傾斜の度合いから、どちらかというと寸胴タイプの土器になると思われる。

16は、半肉隆線を多用した勝坂式系土器の胴部破片で、ほぼ円筒形になる深鉢である。

第78図－17・18は、33号土壙から出土している。

17は器面全体に撚糸文のみが施される土器で、口縁部は内湾する。胴部の形態から口縁部に突起が付くタイプの土器とは考えられず、平縁になると思われる。

33号土壙の覆土上半部から纏まって出土している。

18を除いて、古手の土器は出土しておらず、加曽利ＥＩ式期ぐらいのものと考えられる。

18は、17の土器片が纏まって出土した箇所よりもやや深い箇所から出土している。焼成の良い無文の土器で、四個の小突起を持つ小型の深鉢になると考えられる。勝坂系の土器と考えられる。

第78図－19・20・21は、１号住居跡から出土した土器で、19・20は炉体土器である。19の外側を20の破片が囲むような状況で出土している。20の口縁部の形態等から加曽利ＥＩ式末から加曽利ＥII式の初め頃のものと思われる。

19は胴部破片のみで、地文に撚糸文が施される深鉢である。

20は無文の浅鉢である。口縁はやや内側に肥厚し、稜が入る。口縁の外側には浅い幅広の沈線が巡る。

21も地文に撚糸文が施される深鉢の底部である。

第78図－22・23・24・25・26は、阿玉台式系の深鉢の破片である。22を除き、遺構外からの出土である。22は８号住居跡の覆土から、23はＦ－３、24・25はＣ－３、26はＣ－６グリッドからそれぞれ出土している。26を除き、他は、調査区北側からの出土であり、８号住居跡のものも含めるとＣ－３グリッドからの出土が目立つ。同様の土器は1994年の確認調査（上尾市教委1994）の際にも出土している。

22は、併行する角押文で施文される平縁の土器で、当遺跡の阿玉台式土器では最も古く、阿玉台II式の古段階の土器になると思われる。

24・25は口縁が波状になる土器で、隆帯に沿って施される角押文の幅はやや広くなる。頸部の変換点に凹みを持つ小突起が付く。阿玉台II式の新段階の土器になると思われる。23も同様の時期のものであろう。

26は大波状口縁になる深鉢の波状部で、口縁上端の外周及び、口唇部に付けられる「Ｓ」字状の隆帯が特徴的な土器である。器面及び隆帯上にはＬＲの縄文が施される。また波状把手の中央には小孔が穿たれる。以上のような特徴から阿玉台IV式に位置づけられると思われる。

まとめ

以上、縄文時代の各遺構および代表的な遺物についての概観を述べてきた。これを遺構単位で考えると、21号土壙出土の土器は、東京都の貫井遺跡２号住（小金井市教委1978）や多摩ニュータウンNo.46遺跡８号住等の資料と関連しており、当遺跡では最も古い様相を示す。

次いで、破片ではあるが14号住の資料がある。これは貫井南遺跡15号住や多摩ニュータウンNo.46遺跡１号住、丘ノ上遺跡ＳＢ－５等との関連からである。

８号住居跡も２の浅鉢の文様からやはり、勝坂式の終末の比較的古い段階に位置づけられよう

２号住と10号住は同じような内容の土器を出土しているが、10号住に比べて図示できる土器の量が極端に少なく、一概には結論を出せないが、住居形態の違いなどからこの２軒の住居跡は系統を異にするものであった可能性も強い。

10号住からは、いわゆる中峠式土器と勝坂式系土器の終末段階の土器が纏まって出土しており、大宮台地でもこれらの土器が伴出することが判る。また、興味深いことに、10号住居跡からの加曽利ＥＩ式系の土器の出土があまり多くなかった。

第78図－10の炉体土器は、器形的にはやや古い様相を示すが、頸部に沈線を施す手法などからは、頸部が無文のものより新しいと考えられる。しかし、花積貝塚２Ａ号住のような頸部文様帯以下に撚糸文を施し、地文の上から更に沈線で施文するような例よりは古いと考えられる。したがって、子和清水83号住と花積貝塚２Ａ号住の中間の位置を与えてみた。

次いで、33号土壙の全面に撚り糸が施された土器があげられる。器形の点でさほど古くはならないと考えられる。

１号住居跡は、今回の調査で検出された遺構では最も新しいものである。19の深鉢だけでは、時期を限定できないが、20の浅鉢が炉跡から一緒に出土していることから、この浅鉢の時期と同様に考えても差し支えないと考えられる。

遺構内からの出土遺物については以上であるが、このほかに阿玉台式の土器片が多少ではあるが、グリッドより出土している。わずかな資料ではあるが、上記したように時期差も捉えることができ、当遺跡の土器の構成を考える上で貴重な資料と言える。

註１　中峠式土器については、従来いろいろな問題点が指摘されているが、いわゆる中峠段階の土器という意味でとりあえず「中峠式」という名称を用いた。

2　方形周溝墓

東町二丁目遺跡の方形周溝墓

本遺跡の３基の方形周溝墓は芝川右岸の台地上に立地する。河川に面する台地上といえば、各時代を通じて遺跡の存在する可能性が大きいところであるが、とりわけ弥生時代以降、古墳時代前期にかけて水田可耕地となるべき低湿地帯が谷部にある程度付随することが前提条件と考えられる。しかし本遺跡では眼前に芝川が南流しているとはいえ、その沿岸の低湿地帯の幅は現在わずか50m程であるばかりか宅地化の及んでいない明治時代の陸軍迅速図上においてもほぼ同じで、本遺跡付近を境にしてこの上流部では水田可耕地はきわめて少ないといわざるをえない。上尾市の遺跡分布図中にも芝川上流域では当該期の遺跡はほとんど記載されておらず、このような地形的条件のもとで調査前に古墳時代前期の遺跡の存在を予測することは難しかった。

検出された方形周溝墓は３基で群としての範囲は南側へ広がると見られるものの、上述のように存立基盤となる水田可耕地域が狭いため、群の規模は大きくならないことが予想される。全掘できた２基の周溝墓の方台部の規模は第２号墓で6.3m×5.5m、第３号墓で6.9m×5.9mで、いずれも周溝は全周する。第１号墓は部分的な検出だが、軸方向や北西辺長などから他の２基と同じ規模や形態になると考えられる。また、３基からは少量ながら土器が出土しているが、第１号墓と第３号墓から出土した受け口状口縁の鉢や小型丸底土器をもって古墳時代前期の築造と考えた。

溝中土壙は第２号墓と第３号墓で複数基が、また第１号墓でも１基が確認できたが、いずれも長径２～３m程のものである。周溝内の土層観察からは溝中土壙部分において明確な被覆土や周溝埋土への掘り込みなどを認めることはできなかったが、各土壙とも他の周溝部とは異なって最下部にハードロームブロックを多量に含む土層が存在した。また総じて土器の出土量がわずかだった３基の周溝墓のうち、第１号墓と第２号墓のものは溝中土壙上部からの出土であり、第２号墓では壷の胴部下半から転用された鉢が正位に据え置かれた状態だった。科学分析を実施していないため溝中土壙が埋葬施設かどうかの言及は避けるにしても、２基の周溝墓での土器の出土状態からは溝中土壙の存在が意識され、意図的に土器が置かれたり、土器片が振りまかれたりした可能性を指摘しておきたい。

以上が本遺跡の方形周溝墓が具備する要素であるが、次に大宮台地における方形周溝墓と集落の概要をのべて本遺跡の位置付けを試みてみたい。

大宮台地の方形周溝墓の推移

大宮台地は埼玉県東半の平野部に島状に存在する。秩父山地へと続く東松山・入間・武蔵野などの各台地とは荒川流域の沖積地によって大きく切り離されているが、大宮台地東側には綾瀬川や元荒川を隔てて蓮田・岩槻・白岡・慈恩寺の各台地が近接している。しかし、これら東側の台地では実態の明らかな方形周溝墓がほとんど無いため、西側の荒川、東側の綾瀬川・元荒川によって完結した地形となる大宮台地について方形周溝墓の推移を概観してみることにする。

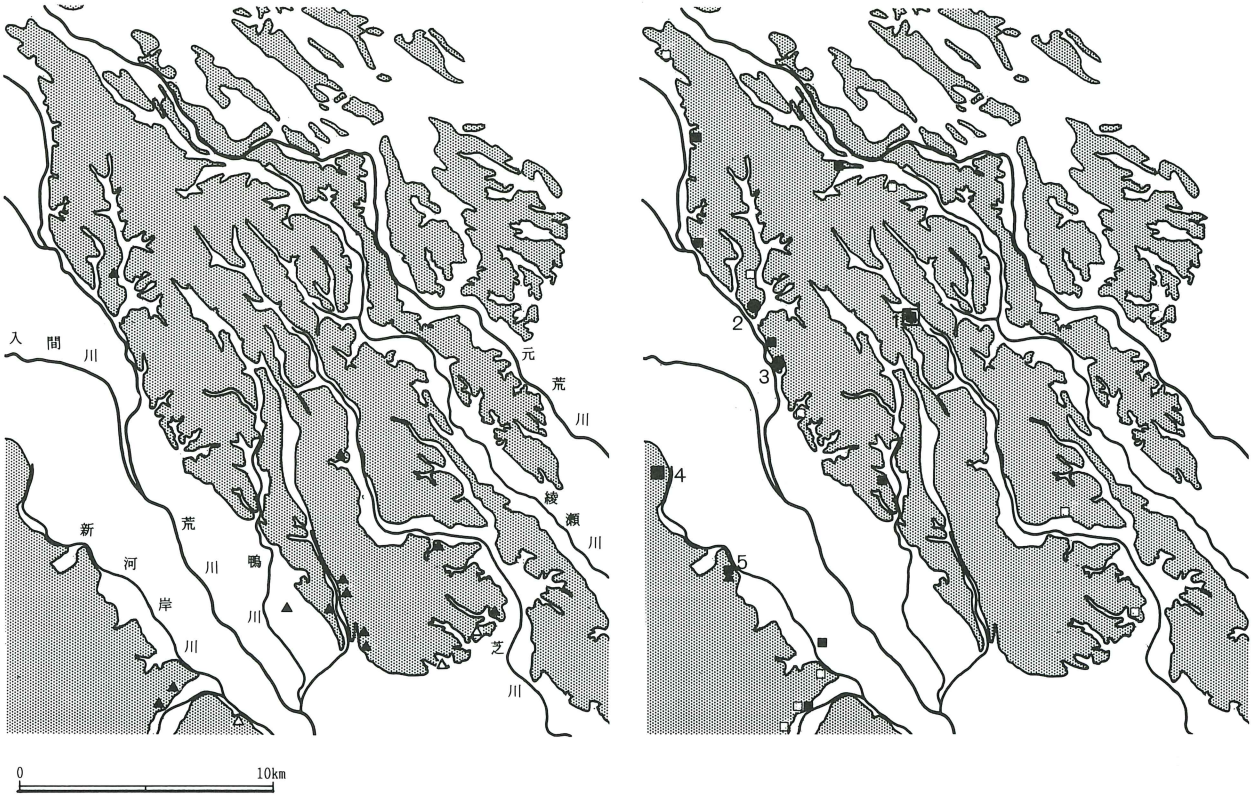
大宮台地では20か所以上の遺跡で方形周溝墓の存在が確認されている。これらを時期ごとに分けて分布を示したものが第79図である。

・Ⅰ期（弥生時代中期前半）：須和田期の方形周溝墓で行田市小敷田遺跡で検出された四隅切れの周溝形態のものが著名だが、元荒川水系に属する岩槻市諏訪山遺跡でその可能性のある溝が検出されている以外に知られておらず、大宮台地上では確認されていない。

・Ⅱ期（弥生時代中期後半）：宮ノ台期のもので大宮台地最南端の川口市小谷場台遺跡、浦和市明花向遺跡で検出されているが、いずれも四隅切れの周溝形態のものである。

・Ⅲ期（弥生時代後期）：弥生町期および吉ケ谷期のものでこの時期の大宮台地南半に分布する周溝墓はすべて弥生町式土器の分布圏にオーバーラップする。周溝墓の形態は浦和市北宿遺跡のように一部で四隅切れのものが見られるが、主流は四隅切れではない形態のも

第79図　大宮大地の方形周溝墓分布



のとなるようである。

・Ⅳ期(弥生時代後期末～古墳時代前期初頭)：壷や甕に弥生時代後期の土器の特色を残しながらも高坏や小型器台などが参入し、一方で土師器としては小型丸底土器定着以前の段階である。前時期に比べると周溝墓は台地南半では大幅に減少し、反対に台地北半に分布が増加する。この時期には四隅切れの周溝形態のものはなくなる。坂戸市入西遺跡群の広面遺跡・中耕遺跡などでは同じ時期に四隅切れのものが併存し、鴻巣市登戸新田遺跡では吉ケ谷式土器系統の壷が出土しているが、四隅切れの周溝形態ではない。

・Ⅴ期(古墳時代前期)：小型丸底土器定着以降の段階である。弥生時代のⅡ・Ⅲ期の分布と対比させると状況は一変し、台地南半ではきわめて少なく、一方北半では数は多くはないが相対的に分布の中心が移動しているように見える。東町二丁目遺跡の方形周溝墓はこの時期に属する。

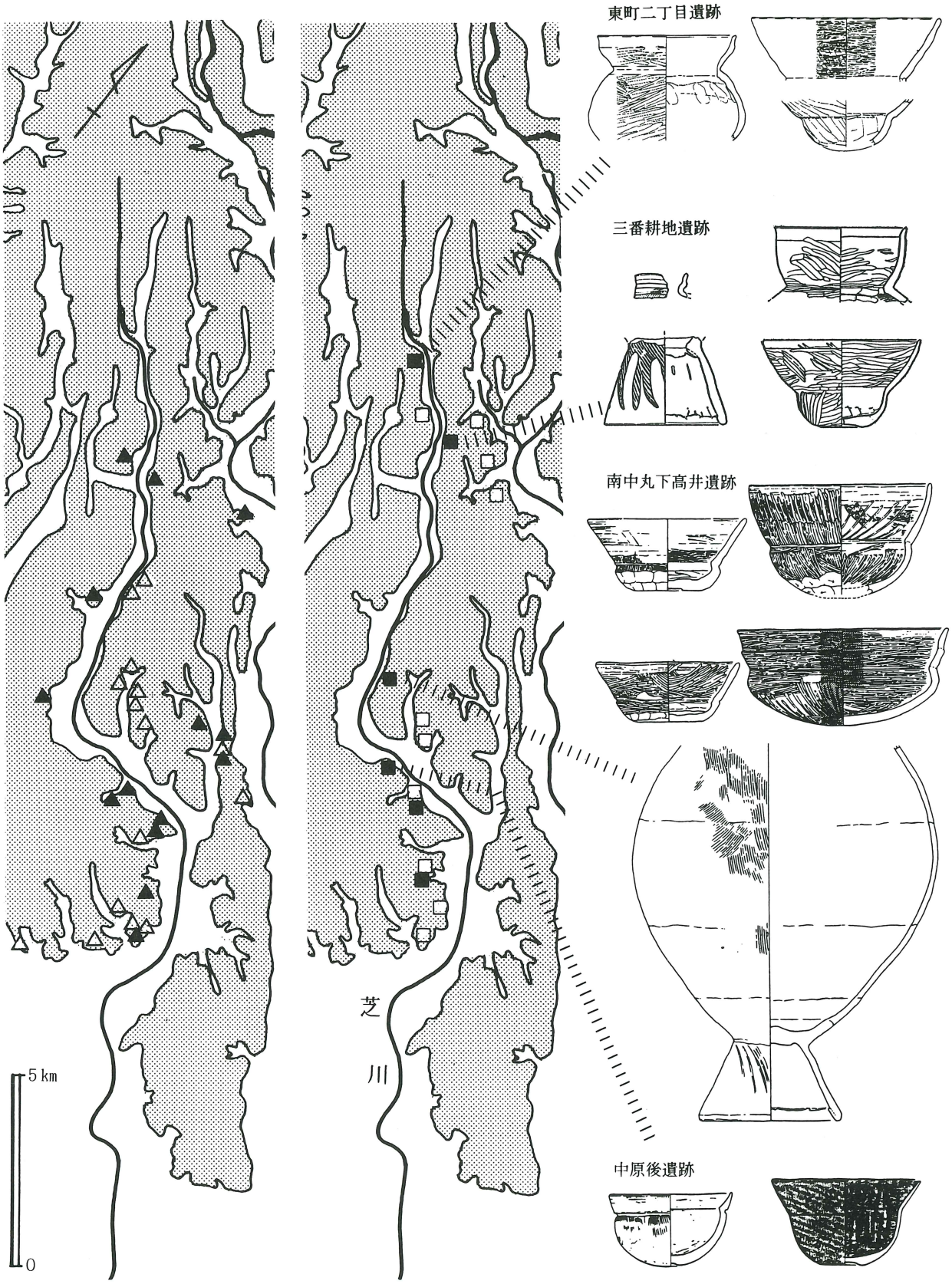
大宮台地における方形周溝墓の造営基盤

①台地側縁部

大宮台地におけるⅡ期とⅢ期の土器様相は南関東的であり、宮ノ台式土器から弥生町式土器をもち谷水田を経営する集団が占有する台地南半部に方形周溝墓が造営されたといえる。したがってⅡ・Ⅲ期の集落の少ない台地北半ではこの時期の周溝墓もまたきわめて少ない。南の東京湾岸地域と連携はあったものの入間川、市野川や元荒川などを遡上して北半部への進出はほとんどなかったかの感がある。

これに対して、弥生時代の地域性が薄まりさらに払拭されていくⅣ・Ⅴ期には大宮台地上の分布は逆転していく。集落や方形周溝墓が南半部で減少する原因には言及できないが、北半部で顕在化する背景には技術的に水田開発が進んだと同時に、河川を利用した交通との関連が考えられる。Ⅳ期の段階では外来系土器およびその影響下にある土器の混在が目立ち、台地西縁

第80図　芝川流域の遺跡分布



では上尾市畦吉遺跡、北本市八重塚遺跡、鴻巣市赤台遺跡、同市馬室小校庭遺跡、同市下閻遺跡などで東海系のパレス壷、パレス文小型高坏、多条沈線文高坏、S字状口縁台付甕などが出土している。一方、台地東側では綾瀬川を隔てた岩槻・蓮田台地になるが岩槻市平林寺遺跡や蓮田市馬込大原遺跡・同市ささら遺跡などで叩き調整甕や手焙形土器、さらに東海系・近江系の土器が出土している。これらは東京湾岸地域から河川を利用した交通によってもたらされ、その傾向はV期にも継続されていく。台地西側の方に分布が集中気味なのは弥生時代から集落や造墓活動の活発だった比企地域とつながっているからと考えることもできるが、もっと視野を広げると台地の東側とともに東京湾岸地域と毛野地域とを結ぶ交通路にあたっていたと見ることができ、新たな水田経営に加えてそのような性格をもつ集団によって方形周溝墓が造営されたと考えられる。

②芝川流域

以上のような台地の東西両側縁部が開かれた地形的状況なのに対して、東町二丁目遺跡の周溝墓群が面する芝川の流域は台地が開析されて狭長な谷となり、地形的に完結している。大宮市東大宮付近より下流域では幅500mから900mほどの低湿地帯が続き、支谷も合わせて安定した水田可耕地となっている。

この地域での方形周溝墓の検出例は必ずしも多くはないが、II期からV期にかけての集落が大宮台地ではもっとも集中する地域でもあり、今後増加していく可能性も大きい。II期の大宮市御蔵山中遺跡と大宮A－165遺跡、III期の浦和市北宿遺跡と馬場北遺跡はいずれも環濠集落であり、IV期の大宮市鎌倉公園遺跡では多数のパレス文小型高坏や多条沈線文高坏などが出土していることなどから、むしろ先進地域として外来要素も流入し、順調な発展をとげていたと見られる。また、V期の大宮市南中丸下高井遺跡や上尾市三番耕地遺跡からはS字状口縁台付甕も出土しており、この土器が集中する台地南側の草加市や戸田市の低地帯との交流があったことがうかがえる。しかし、芝川流域の様相が側縁部のそれと決定的に違うのは上流部で水田可耕地が減少、消滅するのと同時に谷筋も閉塞して河川交通の要をなさない点や耕地の拡張に限界がある点などにあり、この違いはV期以降の古墳時代の集落に顕著なものが少ないことや古墳の存在も知られていないという実態に如実にあらわれている。

このような状況下で、芝川最上流部に位置する東町二丁目遺跡は、墓域に対応する集落が確認されていないものの、水田可耕地を求めて分村を繰り返した結果の最奥部での終末的な姿であると考えておきたい。

引用・参考文献

赤石光資　1981　「大宮台地東部の遺跡分布について－芝川・原沼上流域の遺跡立地移動－」埼玉考古第20号

上尾市　1992　『上尾市史』　第１巻資料編１

上尾市教育委員会　1994　『十四番耕地遺跡（第３次調査）・菅谷北城遺跡・東町二丁目遺跡』　上尾市文化財調査報告第42集

大宮市　1968　『大宮市史　第１巻　考古編』　大宮市役所

川口市　1988　『川口市史』　通史編上巻

恋ヶ窪遺跡調査団　1979　『恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅰ』　恋ヶ窪遺跡調査会・東京都国分寺市教育委員会

恋ヶ窪遺跡調査団　1980　『恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅱ』　恋ヶ窪遺跡調査会・東京都国分寺市教育委員会

恋ヶ窪遺跡調査団　1982　『恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅲ』　恋ヶ窪遺跡調査会・東京都国分寺市教育委員会

小金井市教育委員会　1978　『貫井』　小金井市文化財報告書５

小金井市中山谷遺跡調査会　1987　『東京都小金井市中山谷遺跡第９次～11次調査（1981～1983）』

国分寺市遺跡調査団　1990　『恋ヶ窪東遺跡発掘調査概報Ⅰ』　国分寺市遺跡調査会・国分寺市教育委員会

小島俊彰　1983　「三角とう形土製品」『縄文人の精神文化』　縄文文化の研究９　雄山閣

児玉町教育委員会　1995　『南共和・新宮遺跡』　児玉町遺跡調査会報告書第６・７集

埼玉県遺跡調査会　1970　『花積貝塚発掘調査報告書』　埼玉県遺跡調査会報告第15集

埼玉県教育委員会　1973　『岩の上・雉子山』　埼玉県遺跡発掘調査報告書第１集

埼玉県教育委員会　1979　『大山』　埼玉県遺跡発掘調査報告書第23集

埼玉県教育委員会　1980　『舟山遺跡』　埼玉県埋蔵文化財掘調査報告書第９集

㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1982　『中郷』　関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告－ＸⅡ－　埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書第13集

㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1983　『台耕地(1)』　関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告－ＸⅥ－　埼玉埋蔵文化財調査事業団報告書第27集

㈶埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1985　『原・丸山』　上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告－Ⅸ－　埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第42集

笹森紀巳子　1990　「大宮市内出土の外来系土器について」　『大宮市立博物館研究紀要』第２号

笹森紀巳子　1992　「稲作文化の到来－大宮台地における弥生時代中期後半の様相－」『大宮市立博物館研究紀要』第４号

Ｊ.Ｅ.キダー・小田静夫　1975　『中山谷遺跡』　日本信託銀行・中山谷遺跡調査会

自由学園南遺跡調査団　1983　『自由学園南遺跡－東京都東久留米市所在の先土器時代・縄文時代遺跡の調査－』　自由学園

東京都小金井市教育委員会　1972　『中山谷』　小金井市文化財調査報告書１

動坂貝塚調査会　1978　『文京区動坂遺跡』

所沢市教育委員会　1981　『第４次調査膳棚遺跡』　所沢市文化財調査報告書第５集

㈶栃木県文化振興事業団　1987　『御城田（本文編）』　栃木県埋蔵文化財発掘調査報告書第68集　栃木県教育委員会

船橋市教育委員会　1972　『海老ヶ作貝塚』　縄文時代中期集落址調査報告書

船橋市教育委員会　1981　『海老ヶ作貝塚（図版編）』　縄文時代中期集落址第２次調査報告書

細田　勝　他　1982　「縄文中期土器群の再編」『研究紀要１』　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

松戸市教育委員会　1978　『子和清水貝塚－遺物図版編１－』　松戸市文化財調査報告第８集

松戸市教育委員会　1985　『子和清水貝塚－遺物図版編２－』　松戸市文化財調査報告第11集

松戸市教育委員会　1984　『中峠遺跡・根木内遺跡』　松戸市文化財調査報告第９集

松戸市立博物館　1994　『縄文時代以降の松戸の海と森の復元』　松戸市立博物館調査報告書２

三鷹市遺跡調査会　1981　『井の頭池遺跡群Ｂ地点発掘調査報告』　三鷹市埋蔵文化財報告第６集

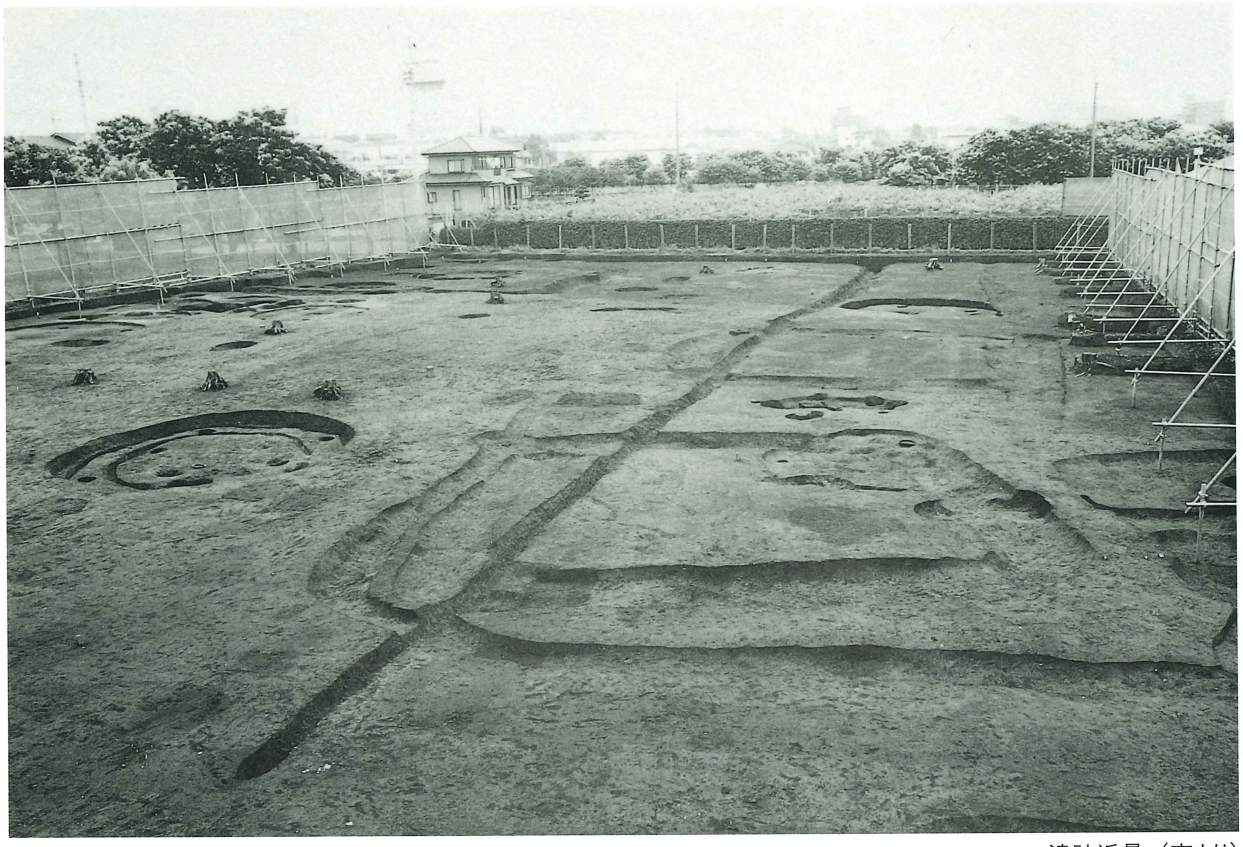
三原田遺跡調査班　1990　『三原田遺跡（中期前半期～後半初頭期篇）第二巻　－赤城山西麓における縄文中期集落跡－』　群馬県企業局開発課分室

写 真 図 版

遺跡全景（航空写真）

遺跡近景（東より）

遺跡近景（南西より）

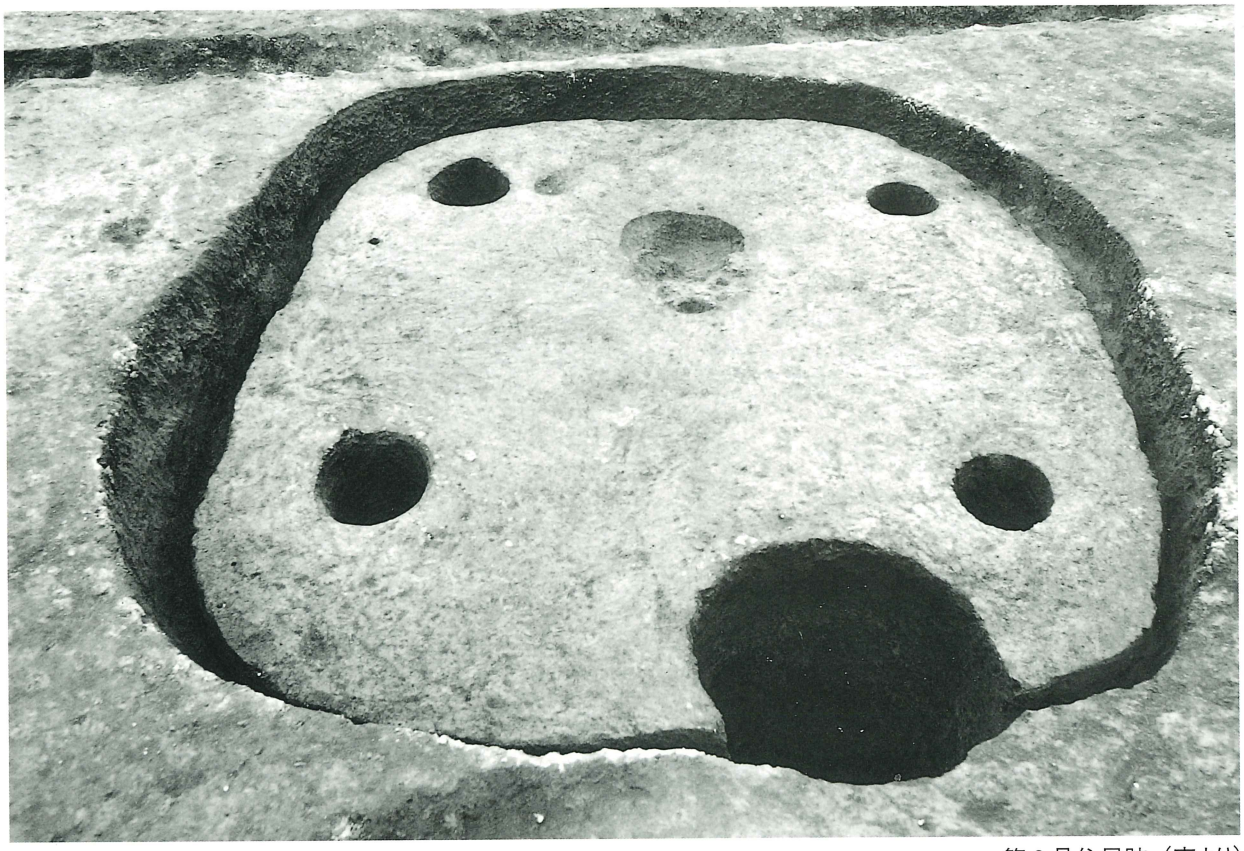


遺跡近景（南より）

基本土層

第１号住居跡（南より）

第１号住居跡　炉跡（南東より）

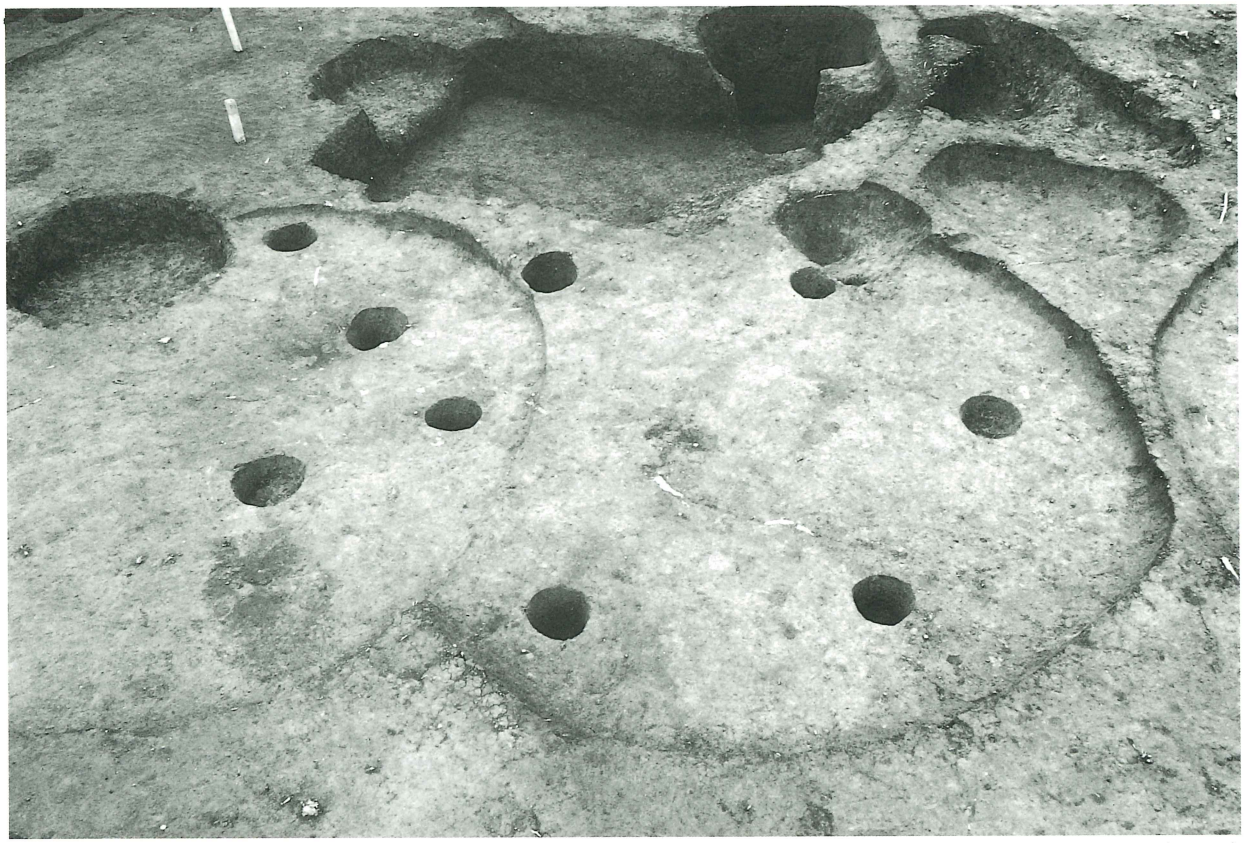


第２号住居跡（南より）

第３号・４号住居跡（南東より）

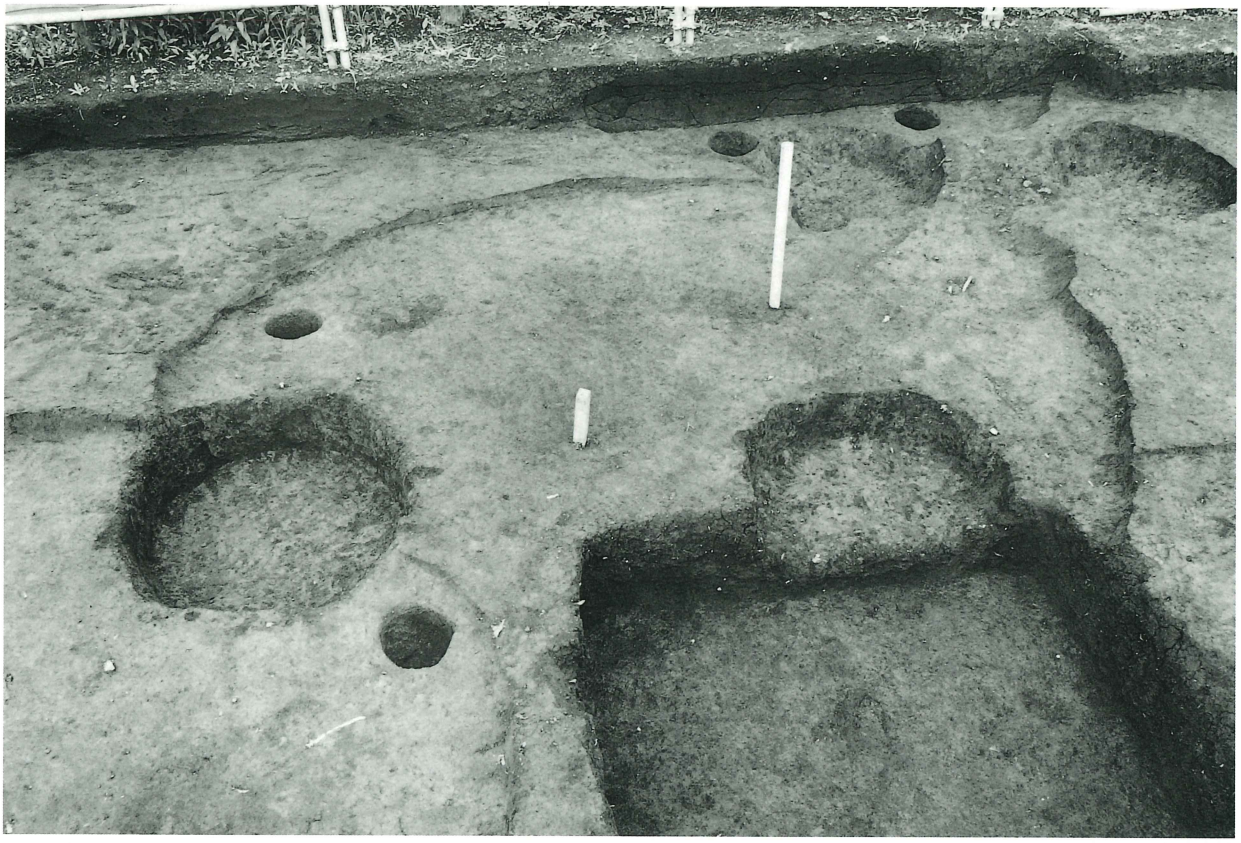
第 5 号住居跡（南より）

第 6 号住居跡（南より）

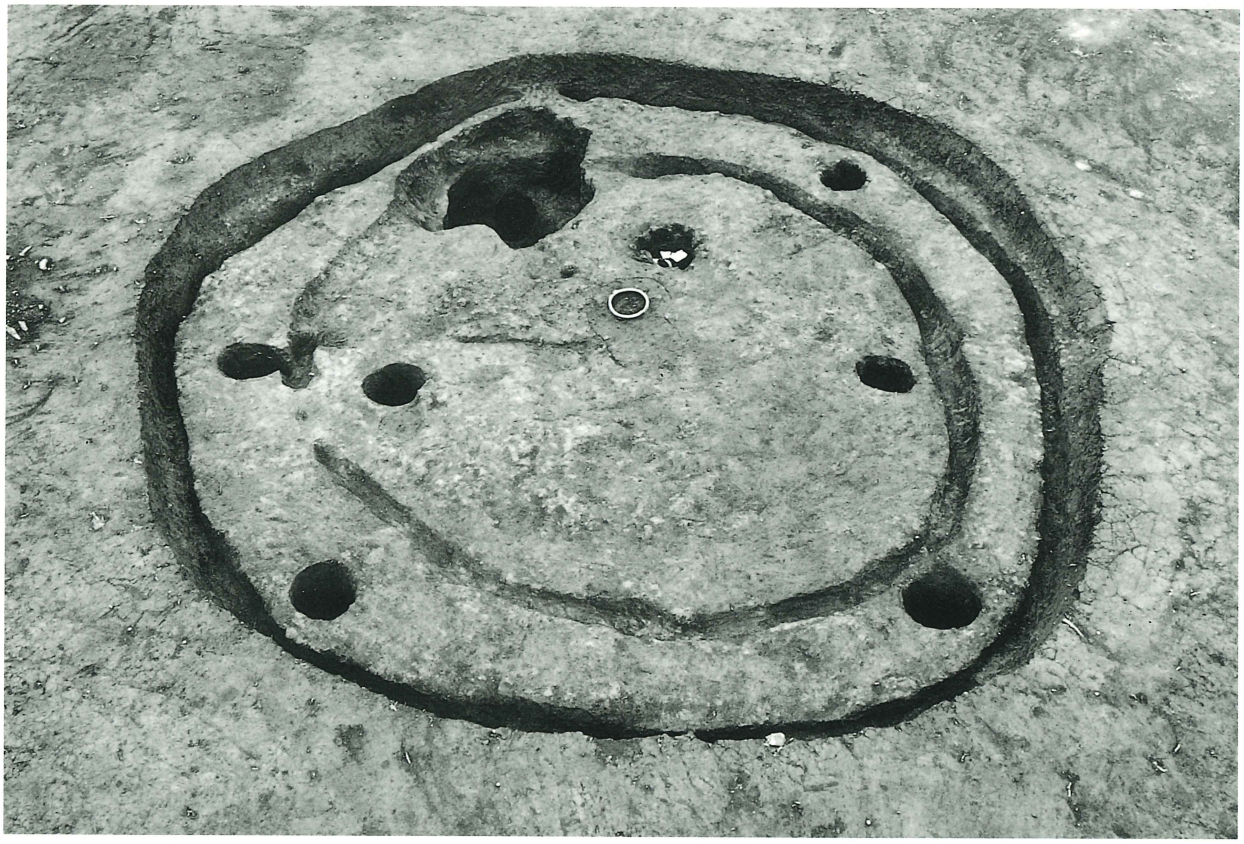


第 7 号住居跡（南より）

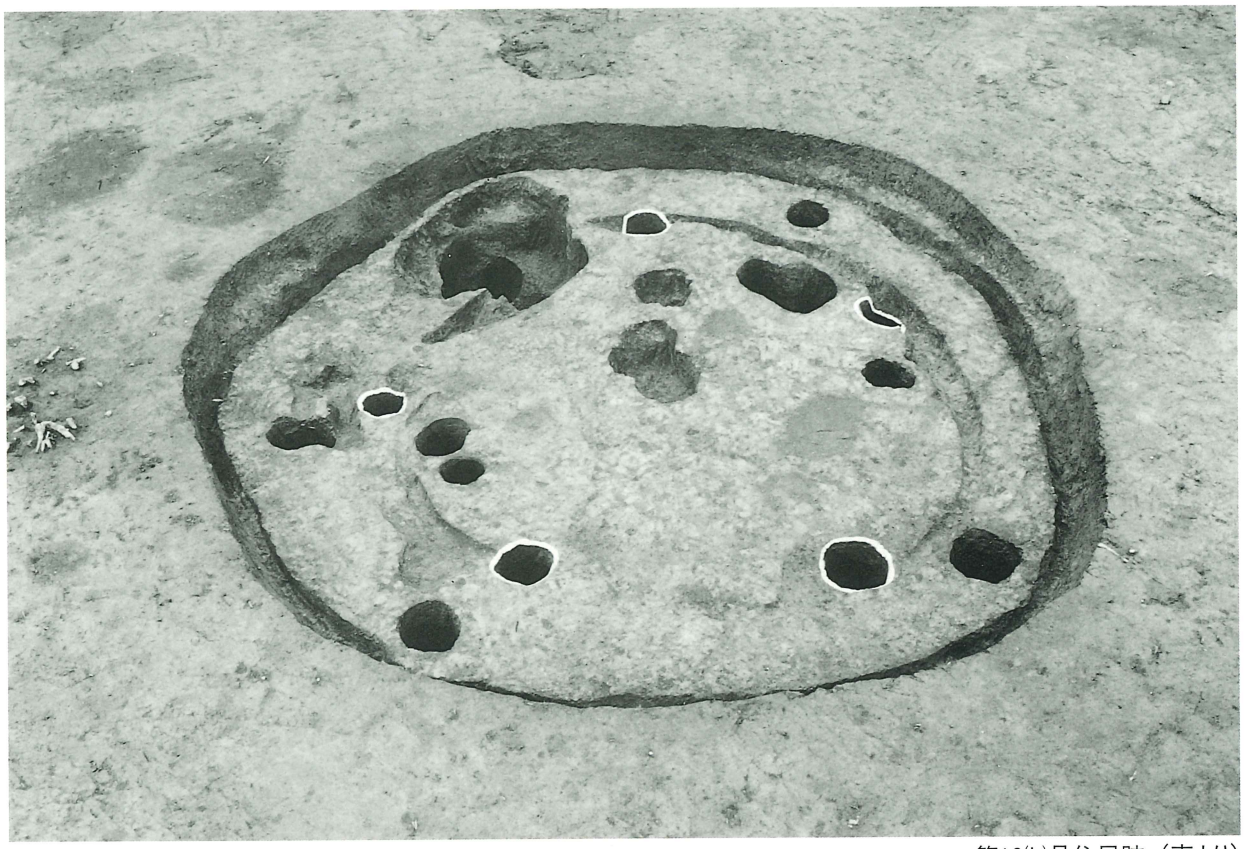
第 8 号住居跡（南西より）



第 9 号住居跡（南より）



第10(a)号住居跡（東より）



第10(b)号住居跡（東より）

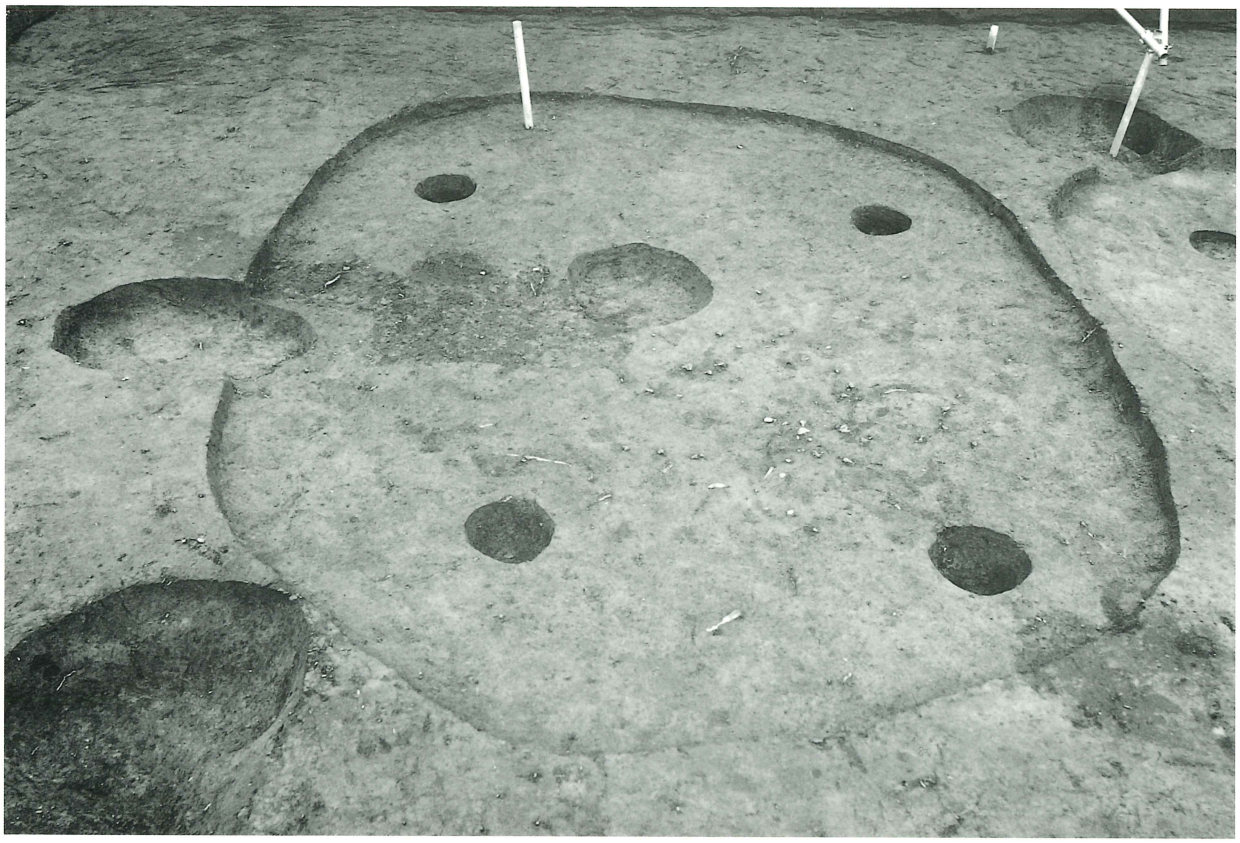
第10(a)号住居跡　炉跡（南より）

第10(b)号住居跡　炉跡（南東より）

第10(b)号住居跡　炉体土器出土状況（北東より）

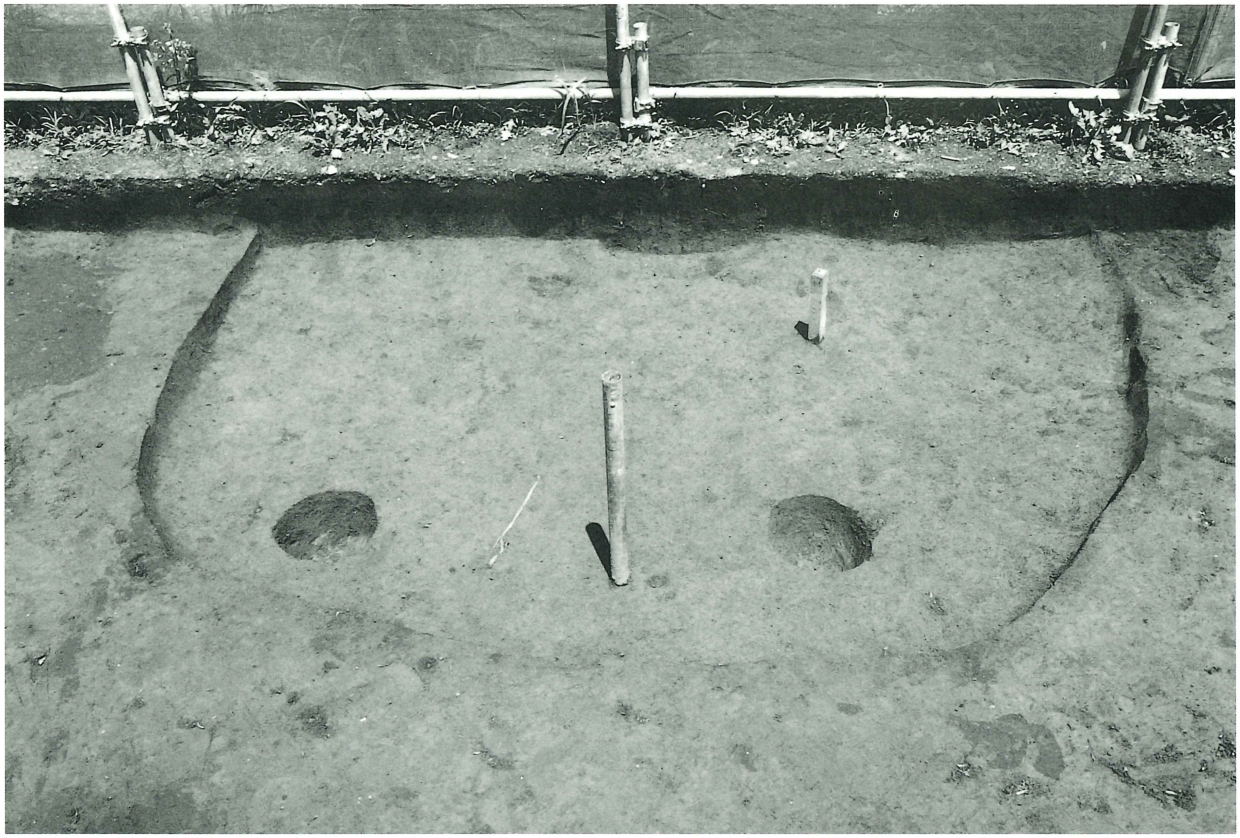
第10(b)号住居跡　炉体土器（北東より）

第11号住居跡（南東より）



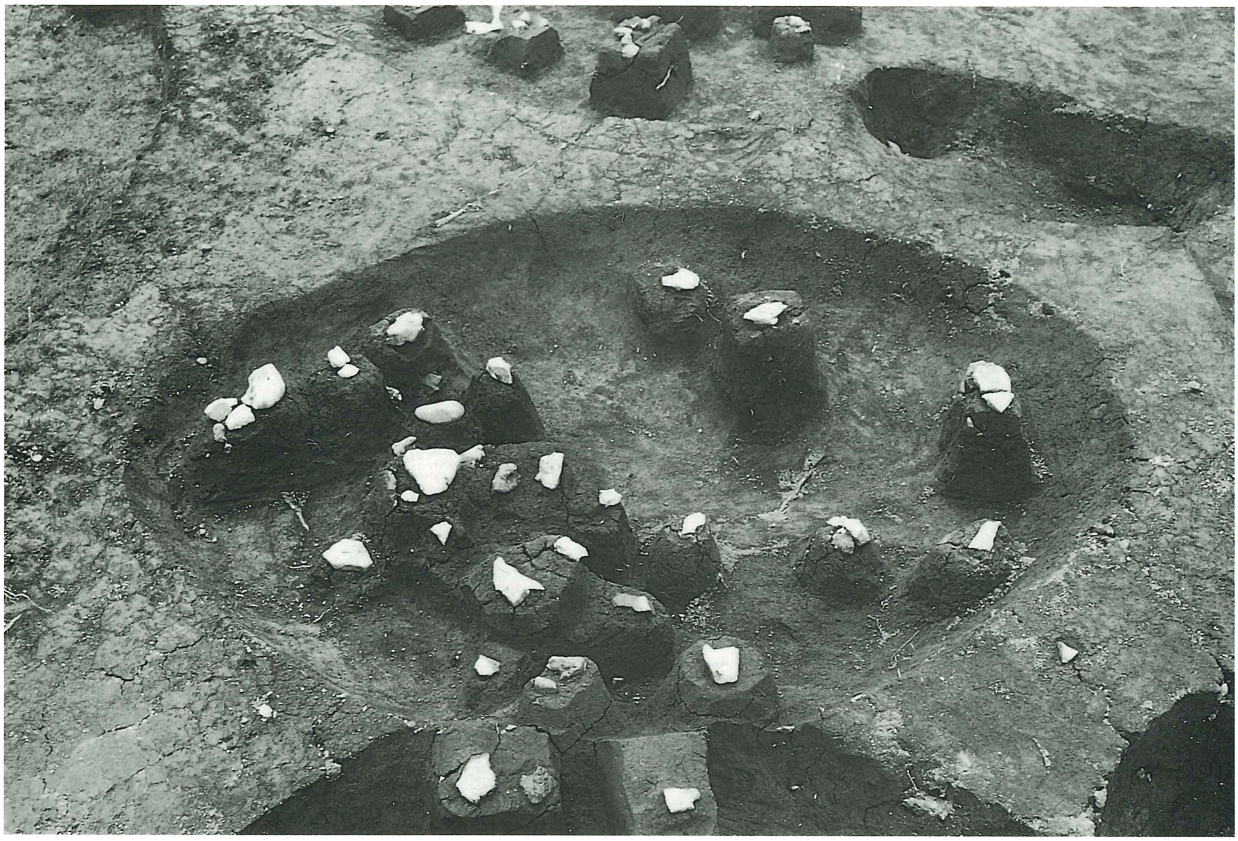
第12号住居跡（南東より）

第13号住居跡（東より）



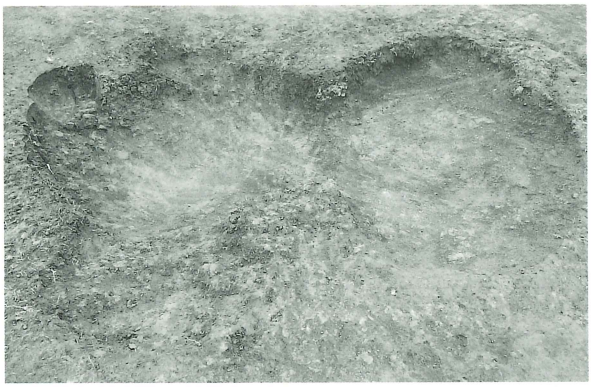
第14号住居跡（南より）

第21号土壙（南東より）

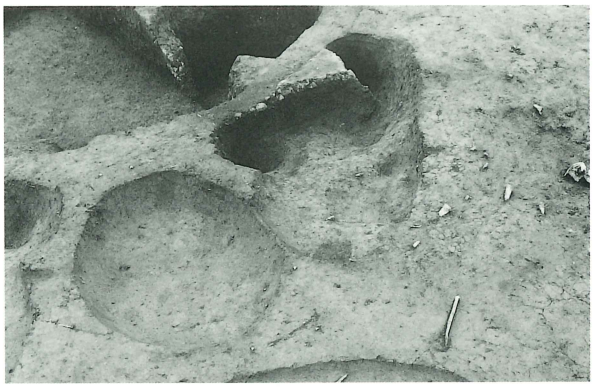


第24号土壙（北東より）

第33号土壙（南西より）

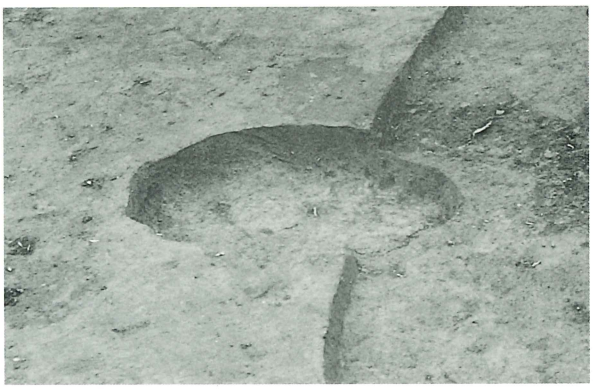


第６号・７号土壙（南より）



第24号・25号・26号土壙（南より）

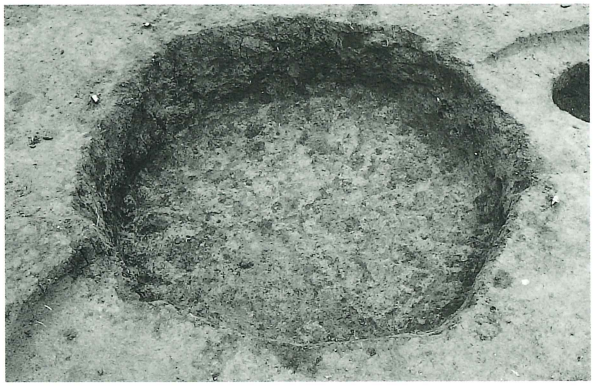
第19号土壙（南西より）



第34号土壙（南東より）

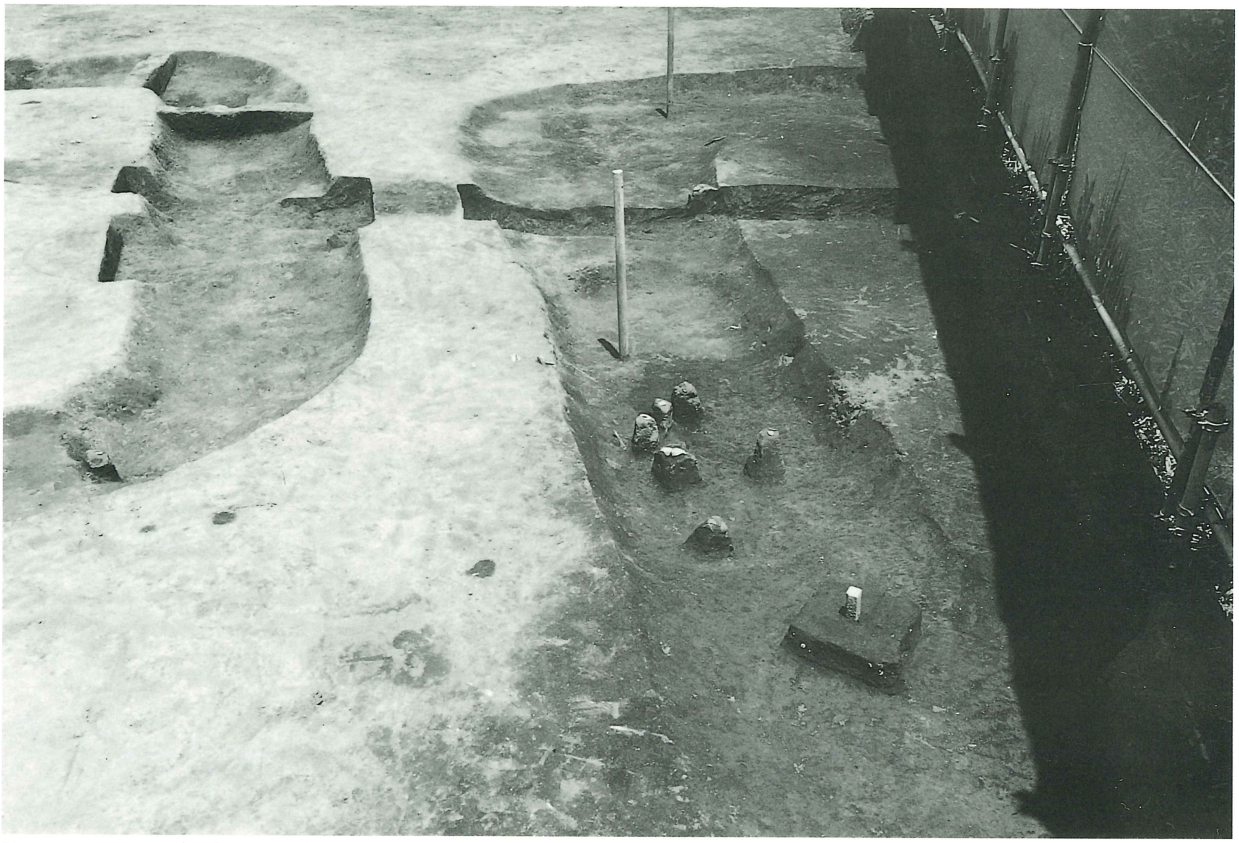
第20号・21号土壙（南東より）

第35・36号・37号土壙（南より）

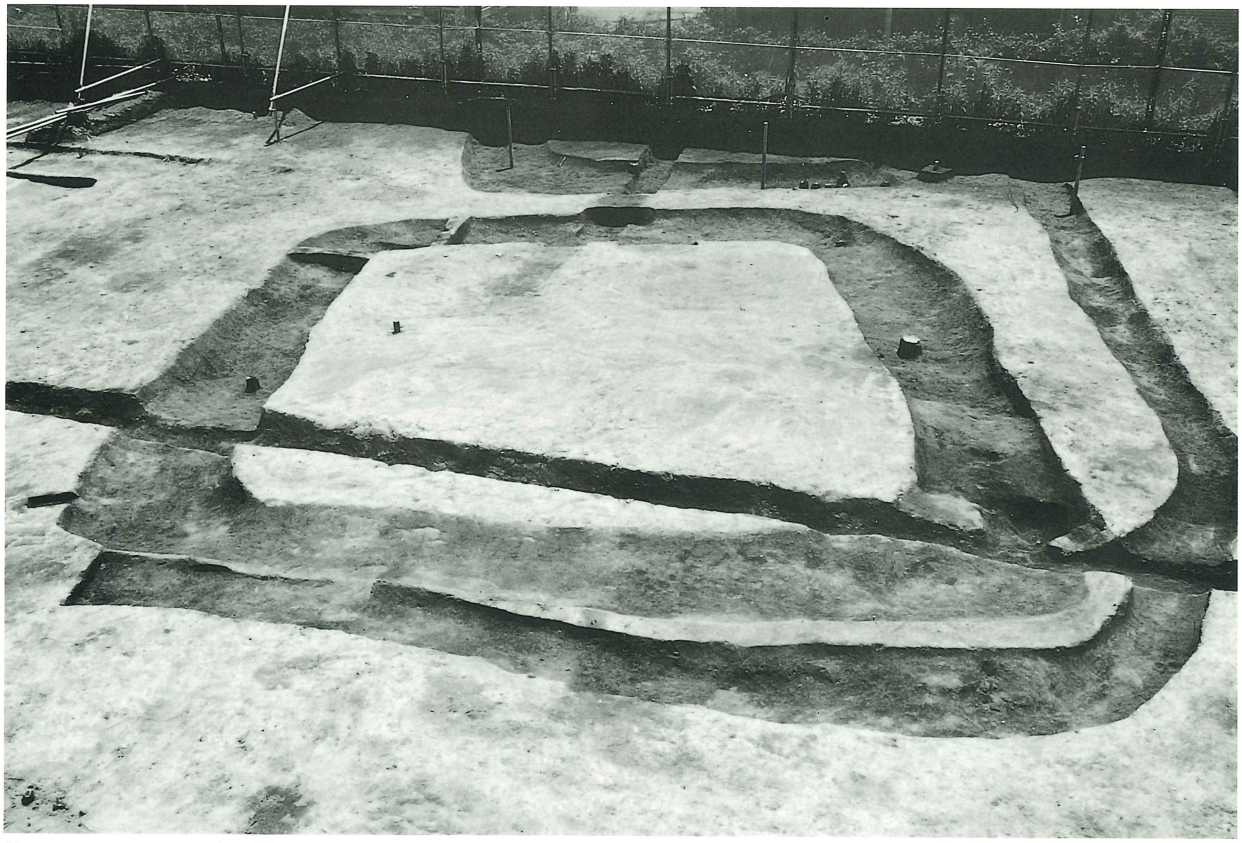


第23号土壙（南より）

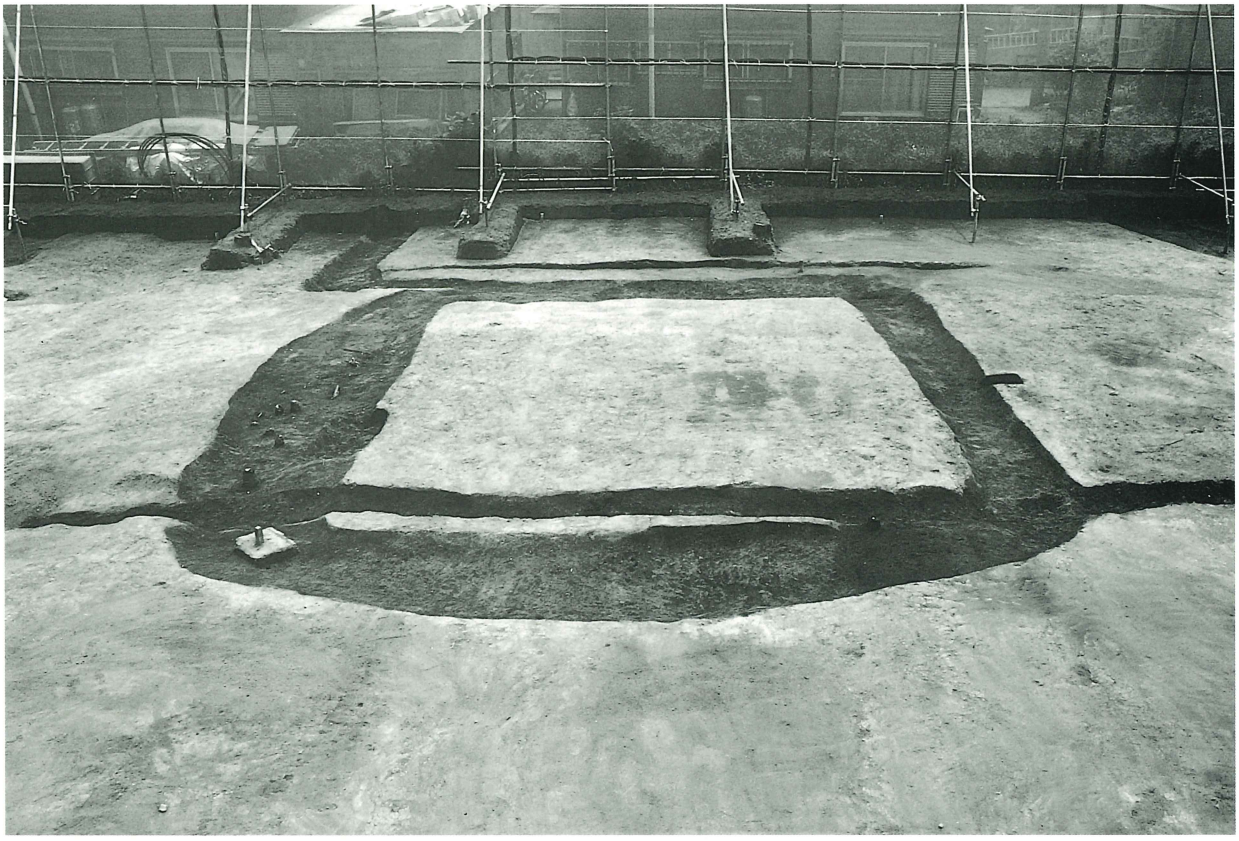
Ｄ－３Ｇ　土器集中（東より）



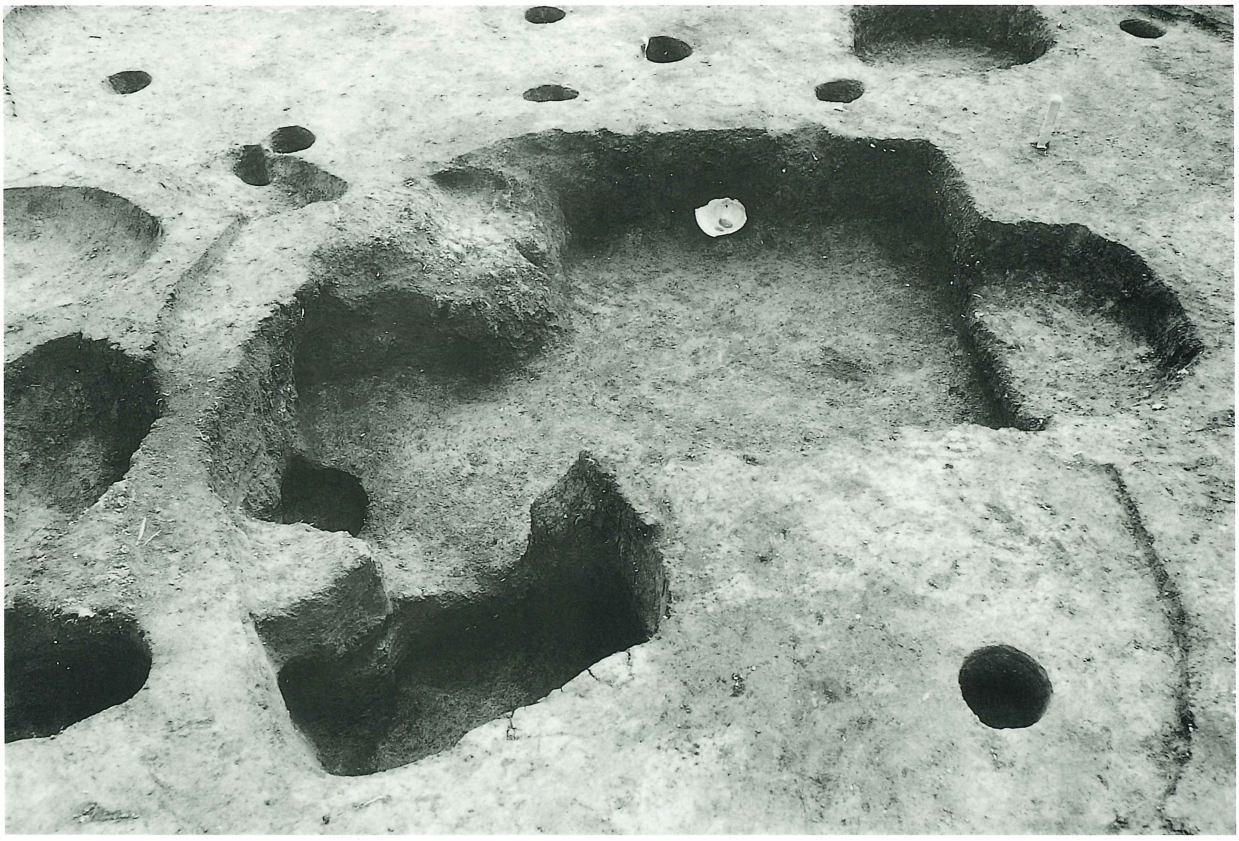
第１号方形周溝墓（南西より）



第２号方形周溝墓（北西より）



第３号方形周溝墓（北西より）

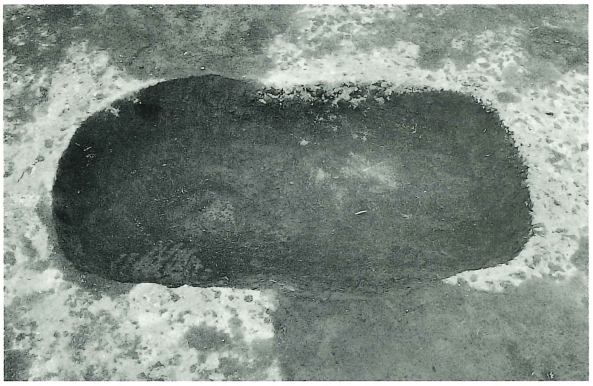


第１号竪穴状遺構・第９号土壙（北東より）

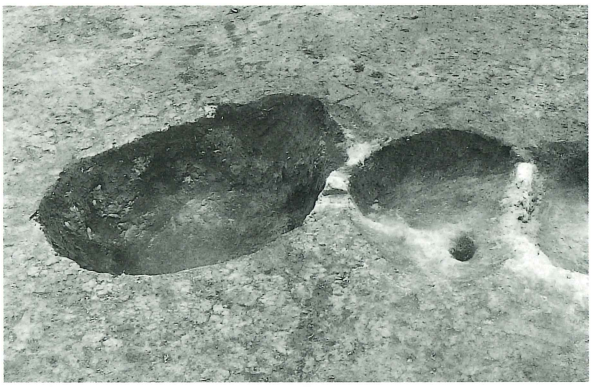
第１号・２号集合土壙（南東より）

第３号集合土壙（東より）

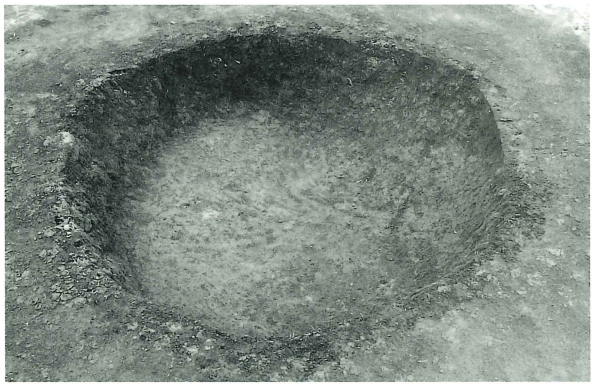
第１号焼土土壙・第41号土壙（南東より）



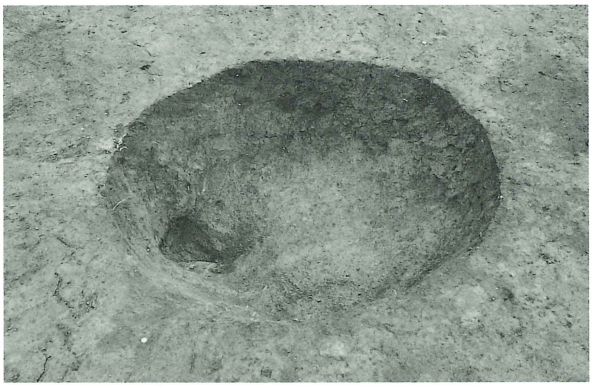
第４号土壙（南東より）



第17・18号土壙（南より）



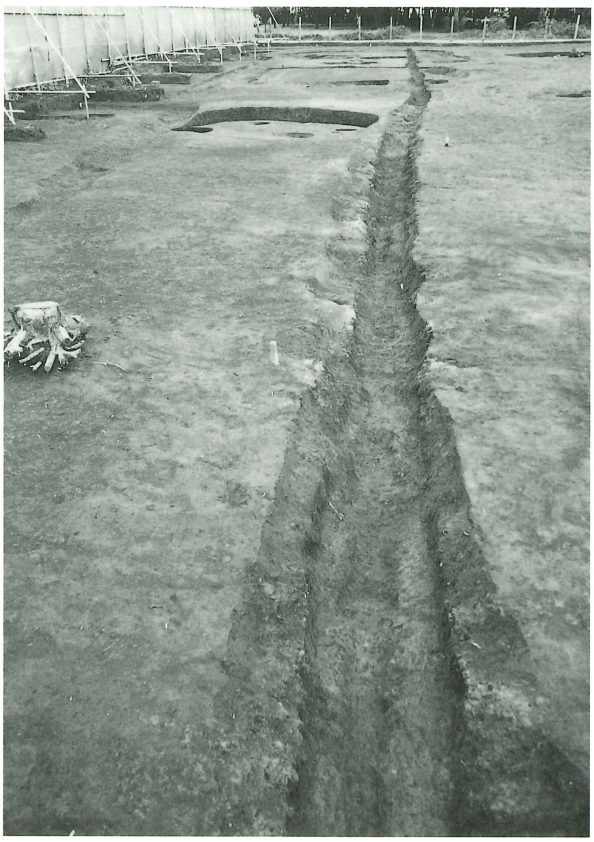
第５号土壙（東より）



第27号土壙（南より）

第29号土壙（南東より）

第１号井戸（北西より）



第３号溝（北東より）

第４号・５号溝（南東より）

第８図－１（１住）

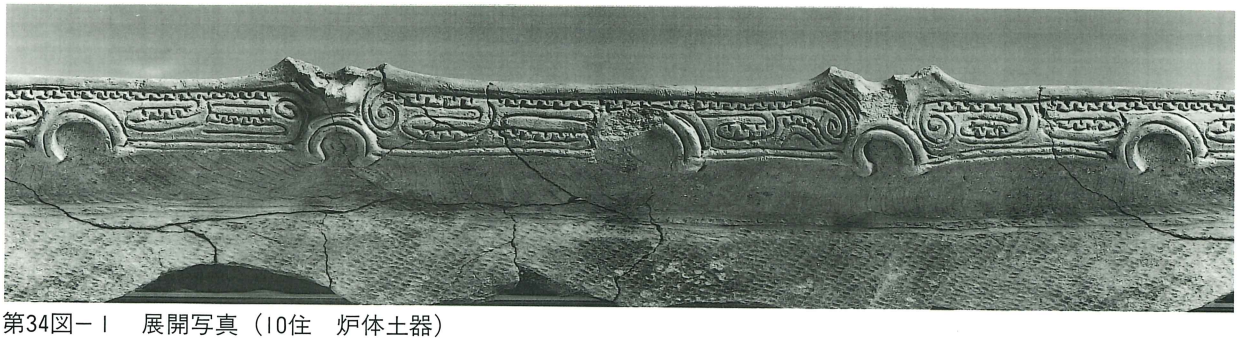
第８図－２（１住）

第12図－３（２住）

第23図－１（８住）

第23図－２（８住）

第24図（８住）



第34図－1　展開写真（10住　炉体土器）

第34図－2　展開写真（10住）

第34図－3　展開写真（10住）

第34図－1

第34図－1

第34図－2

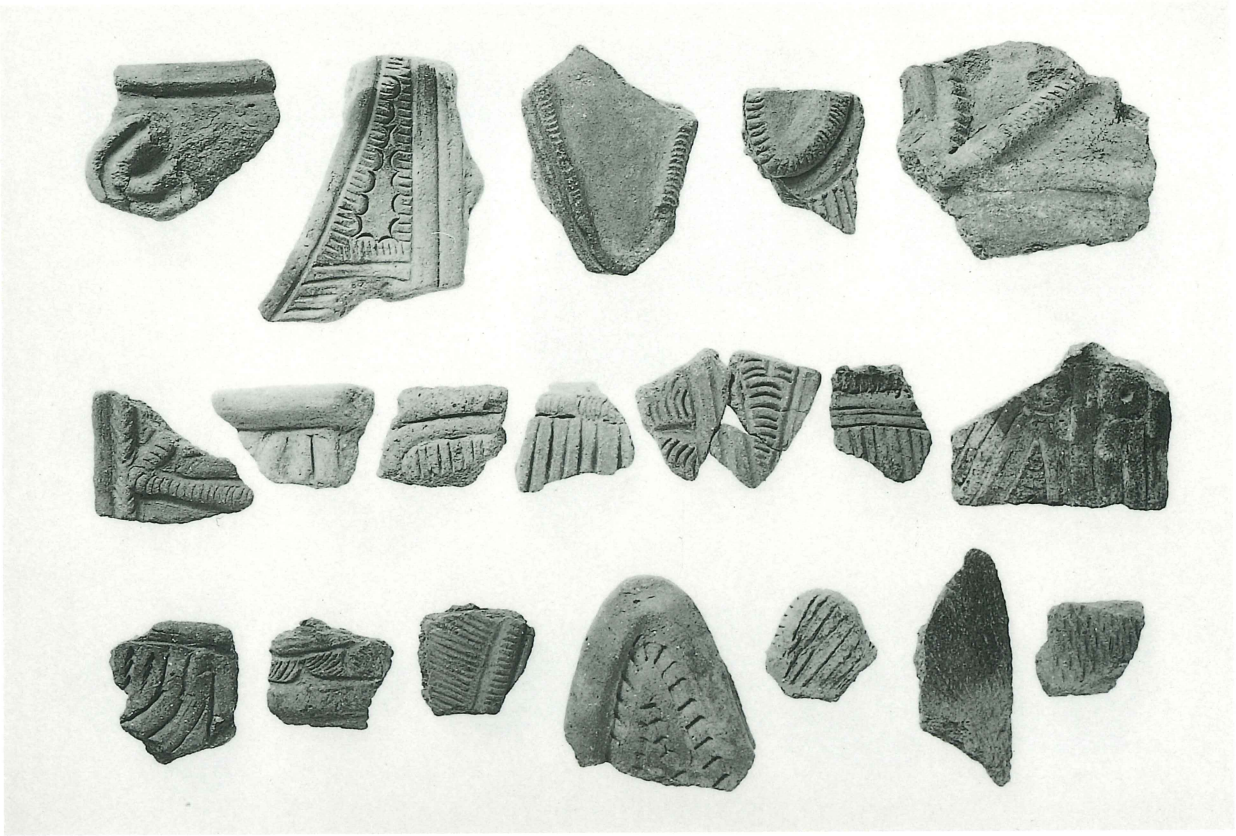
第34図－3

第34図－４（10住）

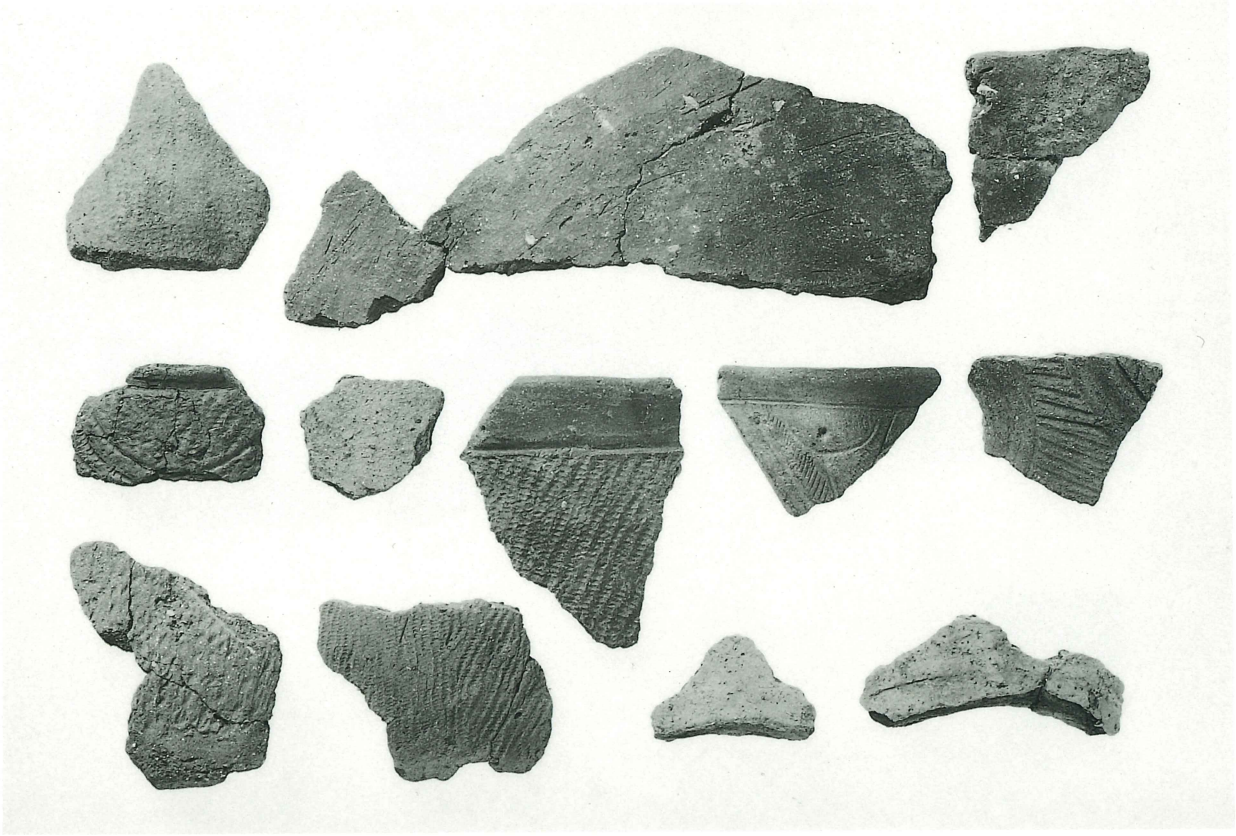
第35図－９（10住）

第44図－１（21土壙）

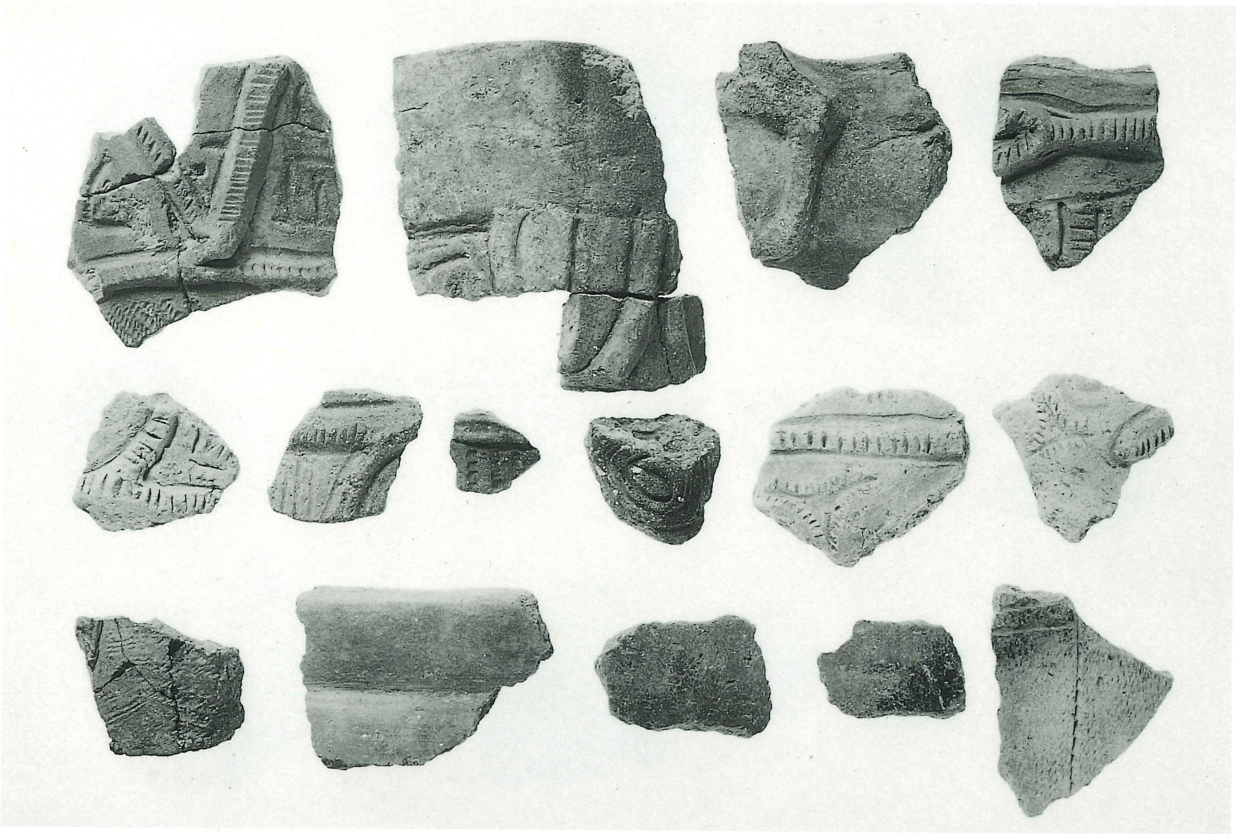
第48図－１（33土壙）



第１号住居跡　土器(1)

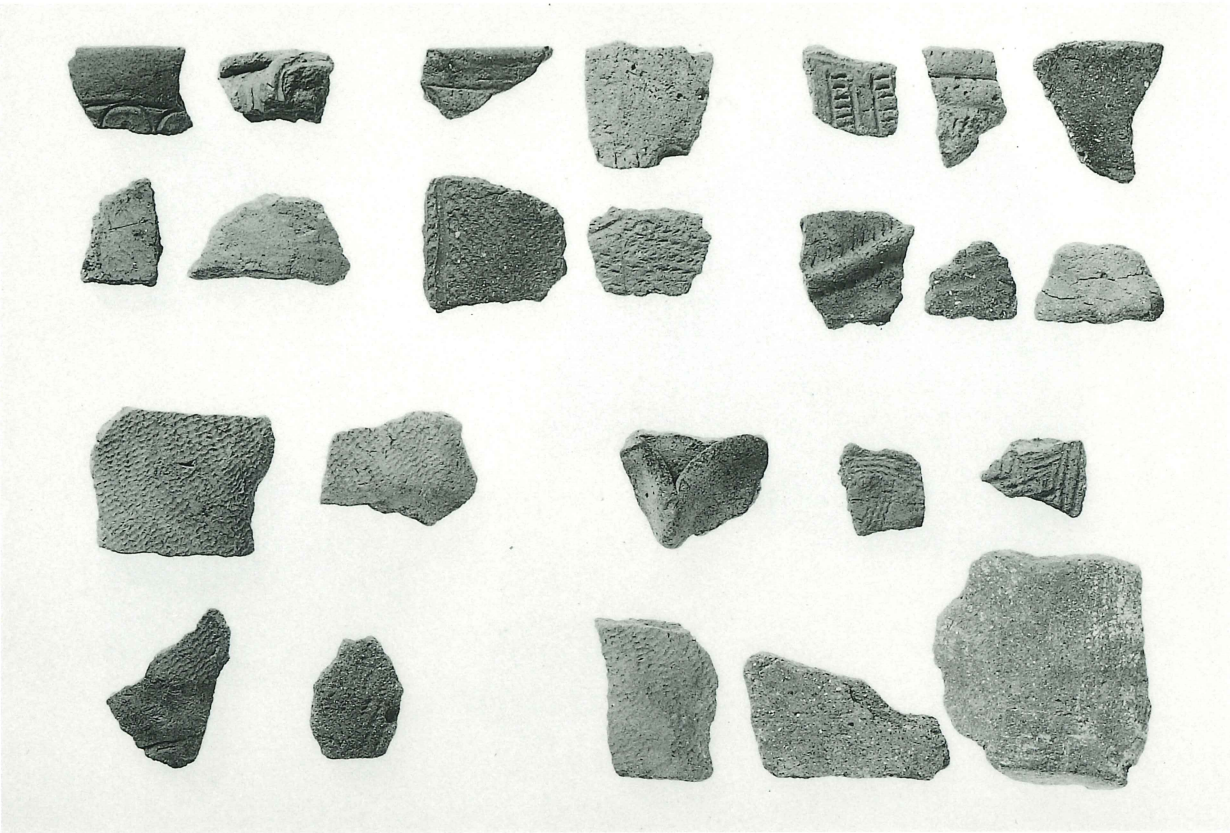


第１号住居跡　土器(2)

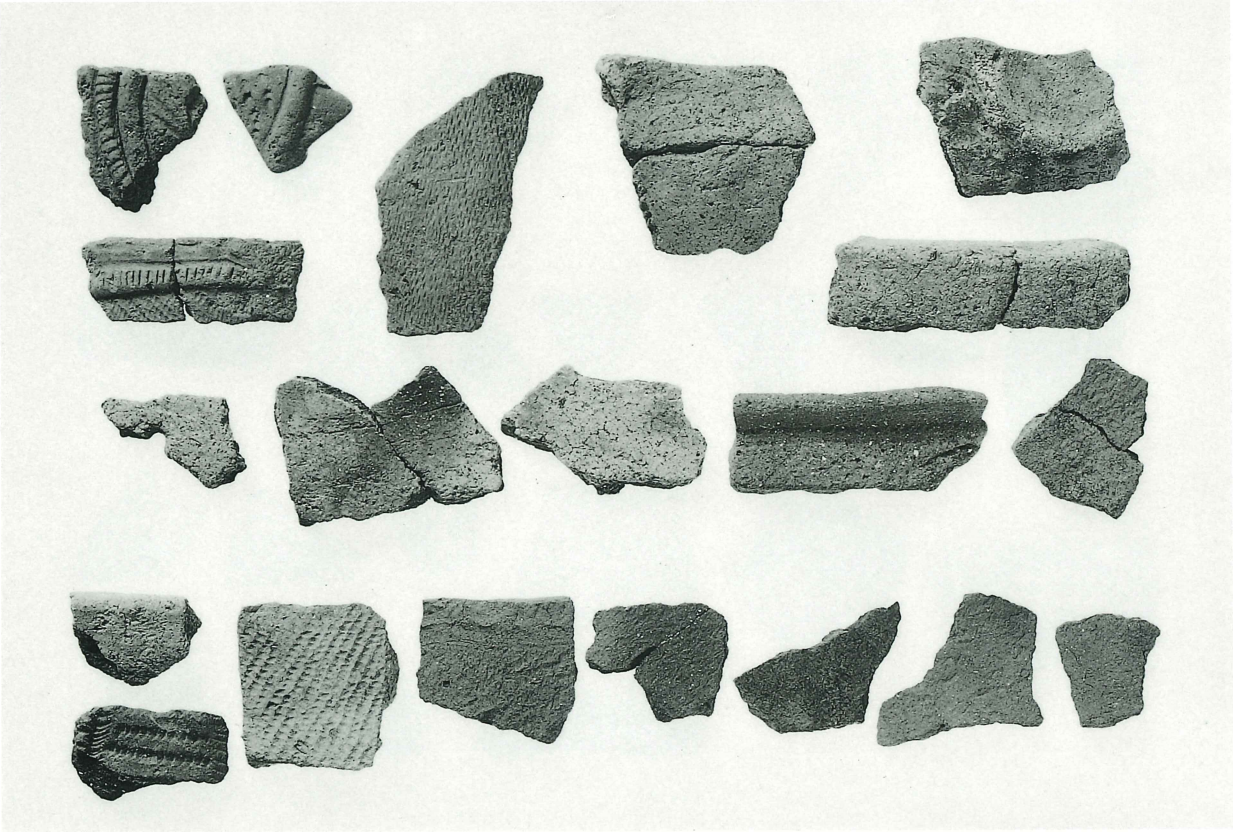


第２号住居跡　土器(1)

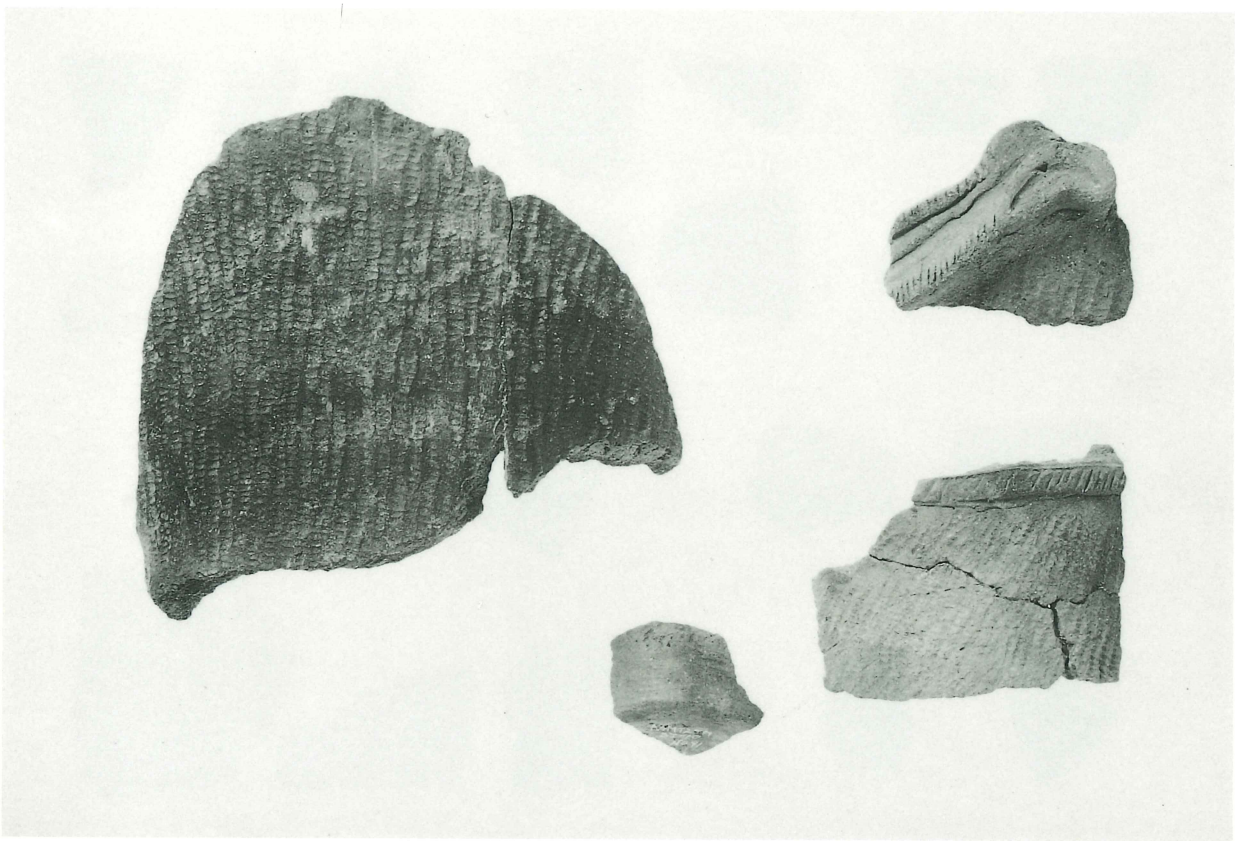
第２号住居跡　土器(2)



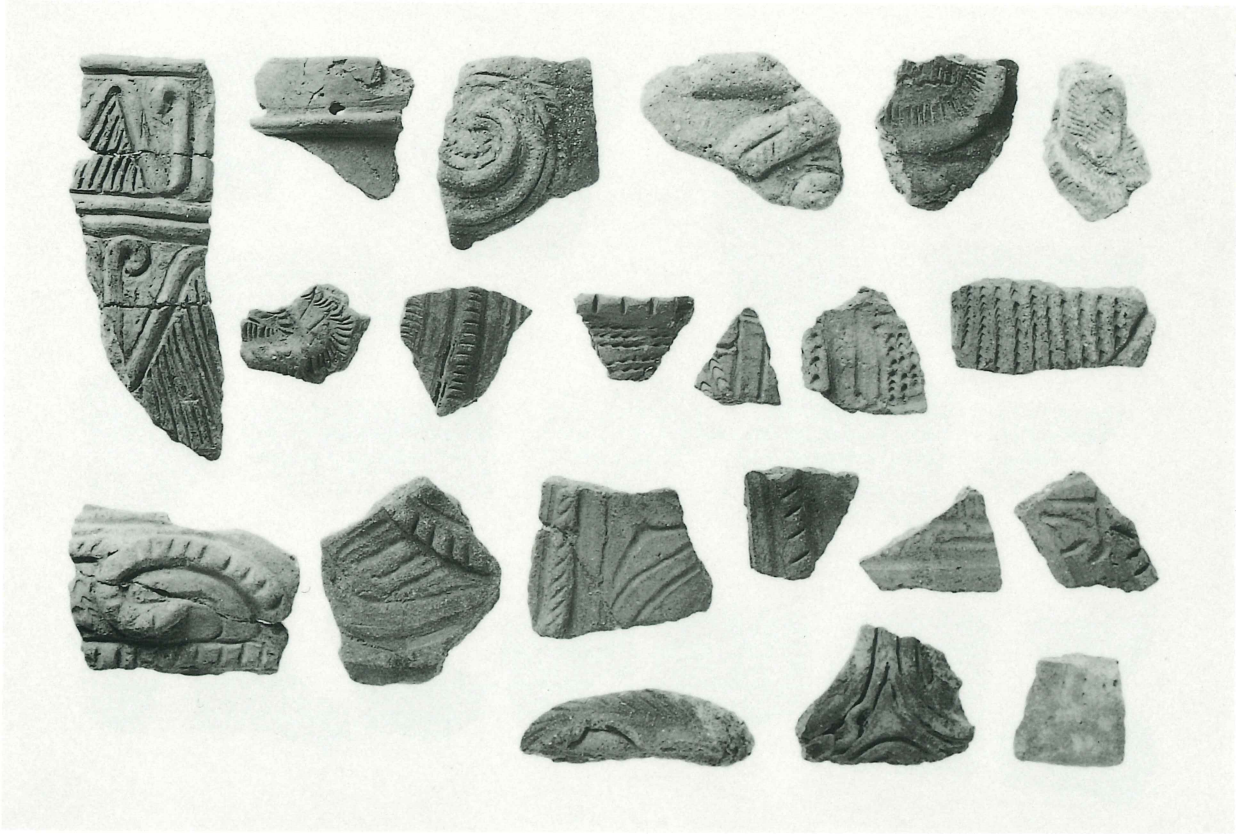
第３号・４号・５号・６号・７号住居跡　土器



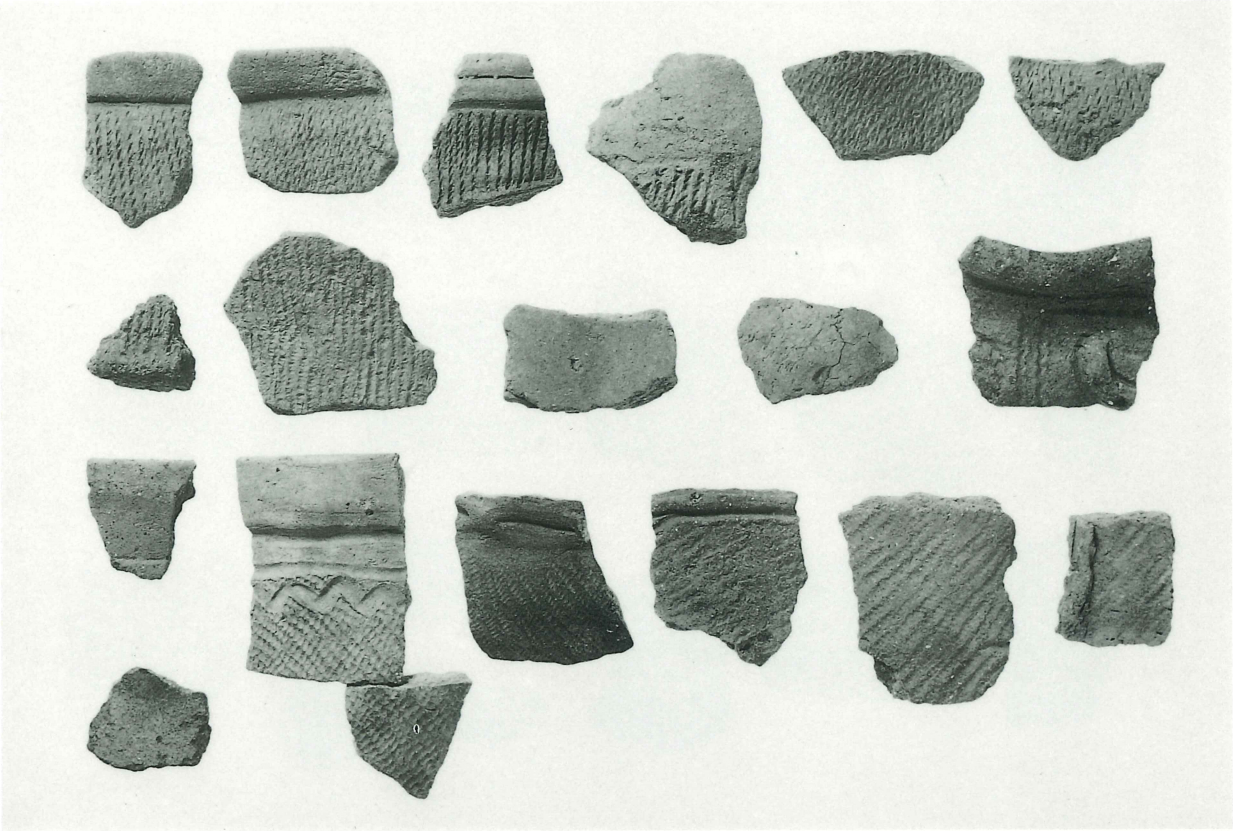
第８号・９号住居跡　土器



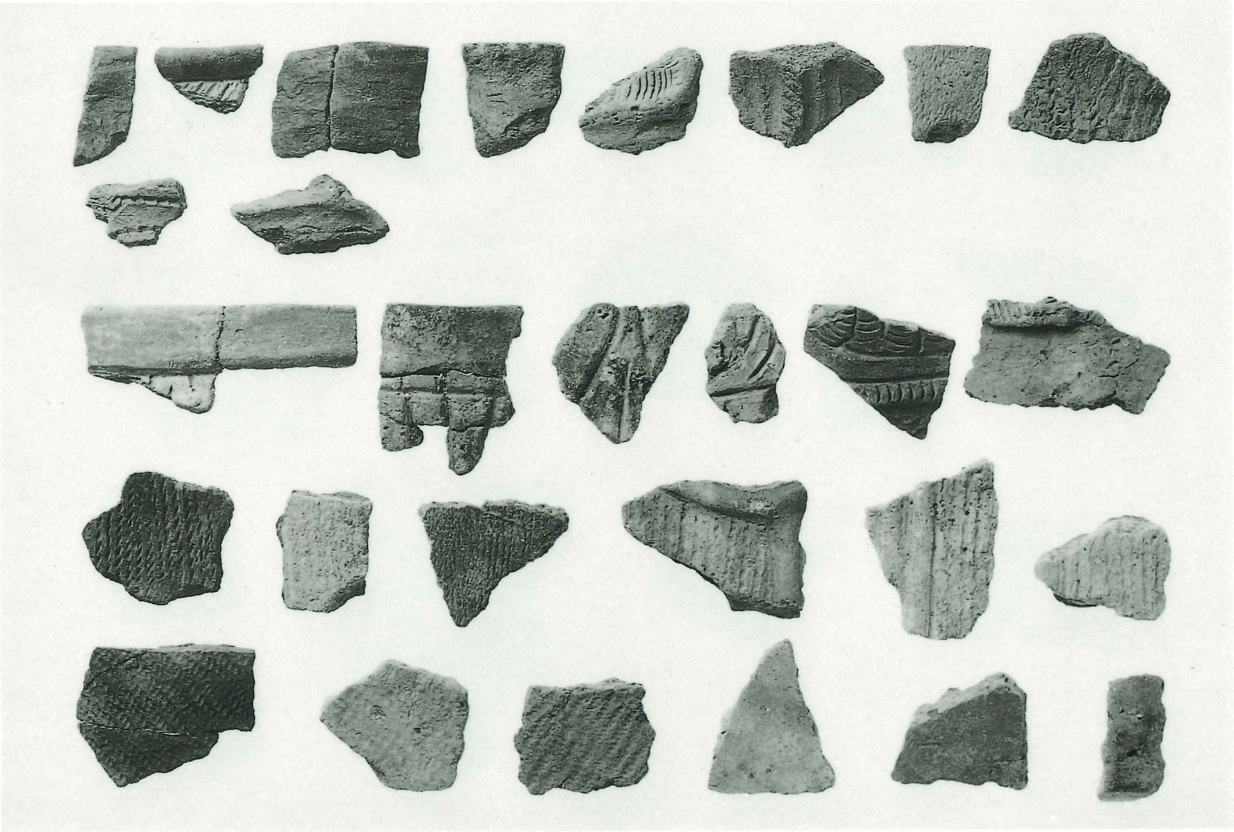
第10号住居跡　土器(1)



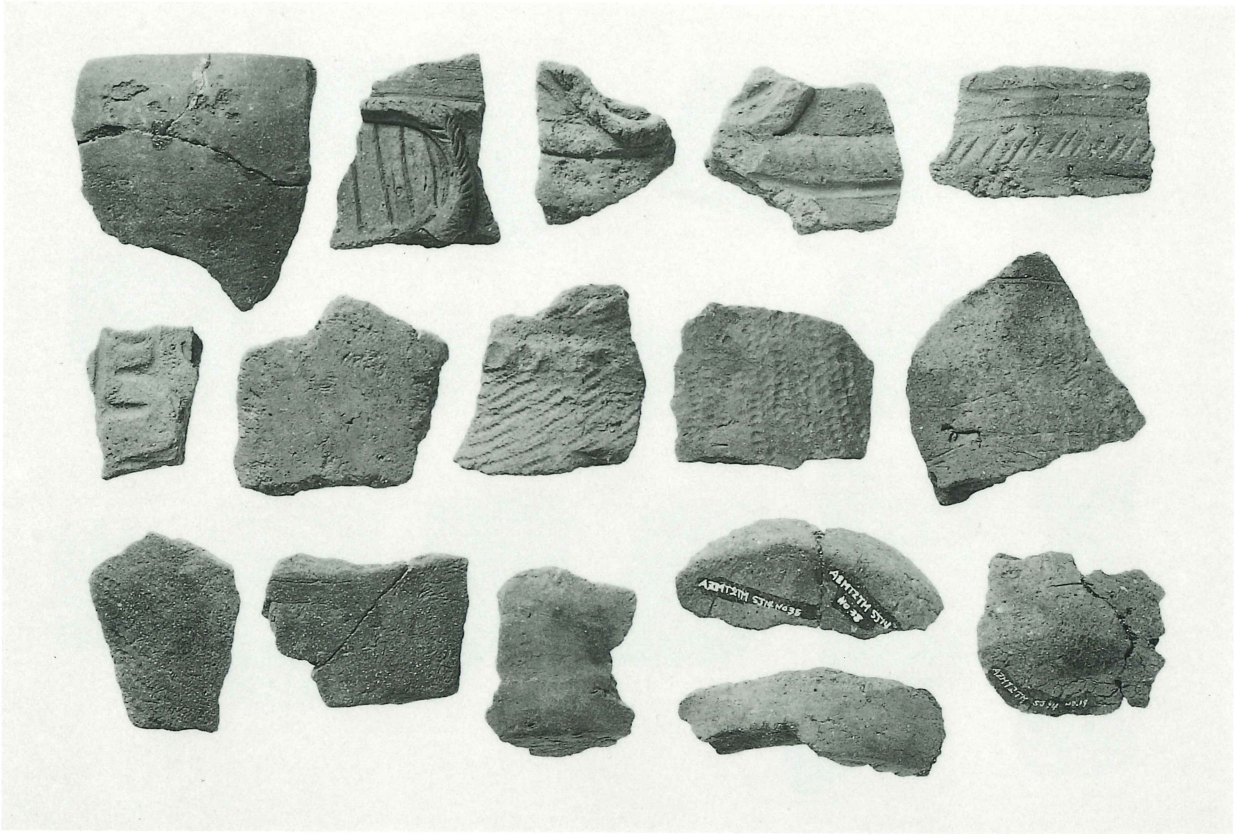
第10号住居跡　土器(2)



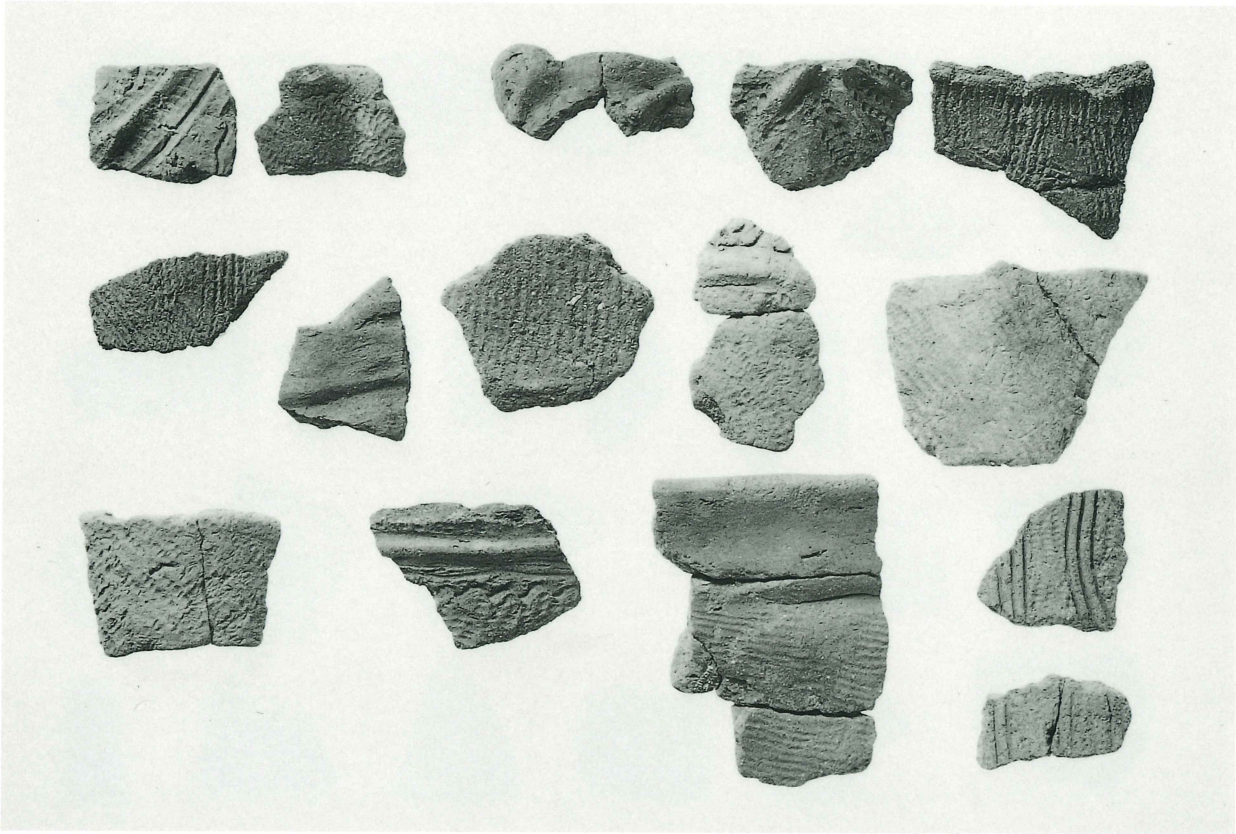
第10号住居跡　土器(3)



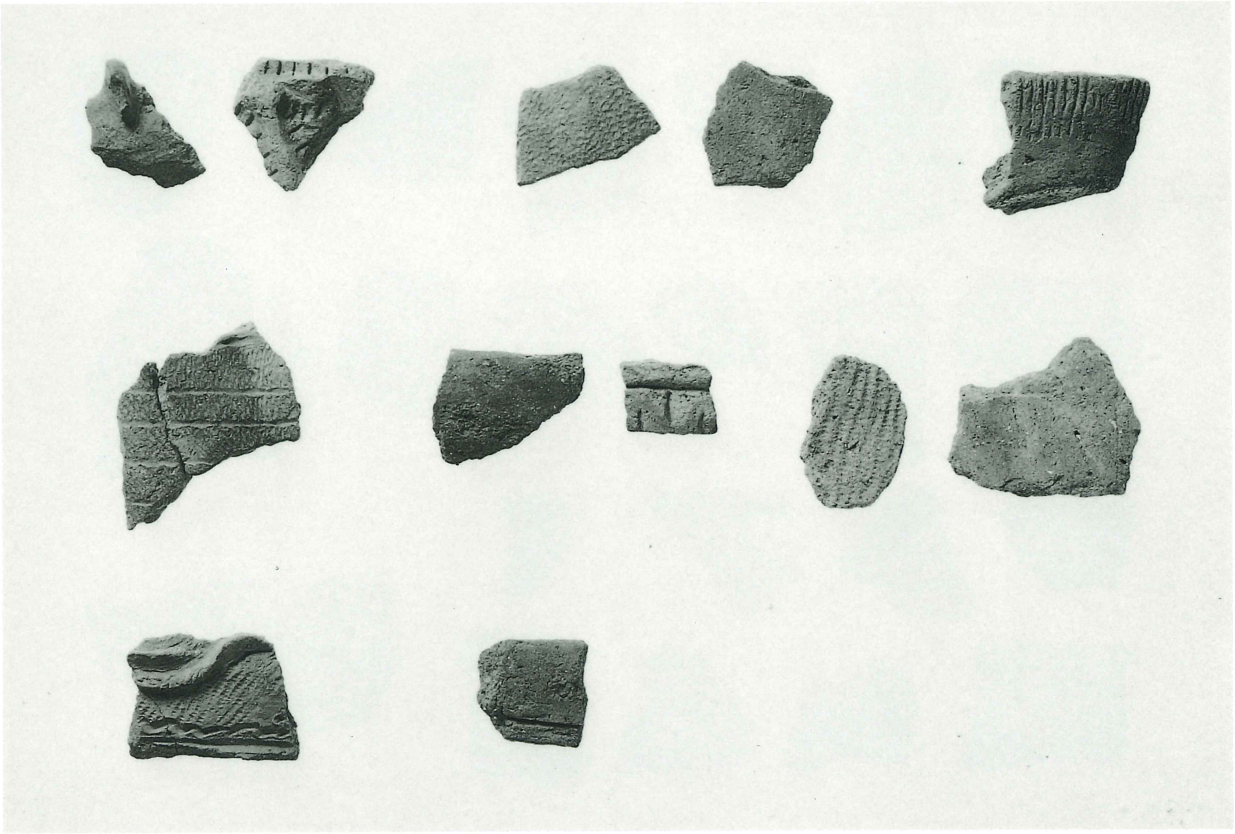
第12号・13号住居跡　土器



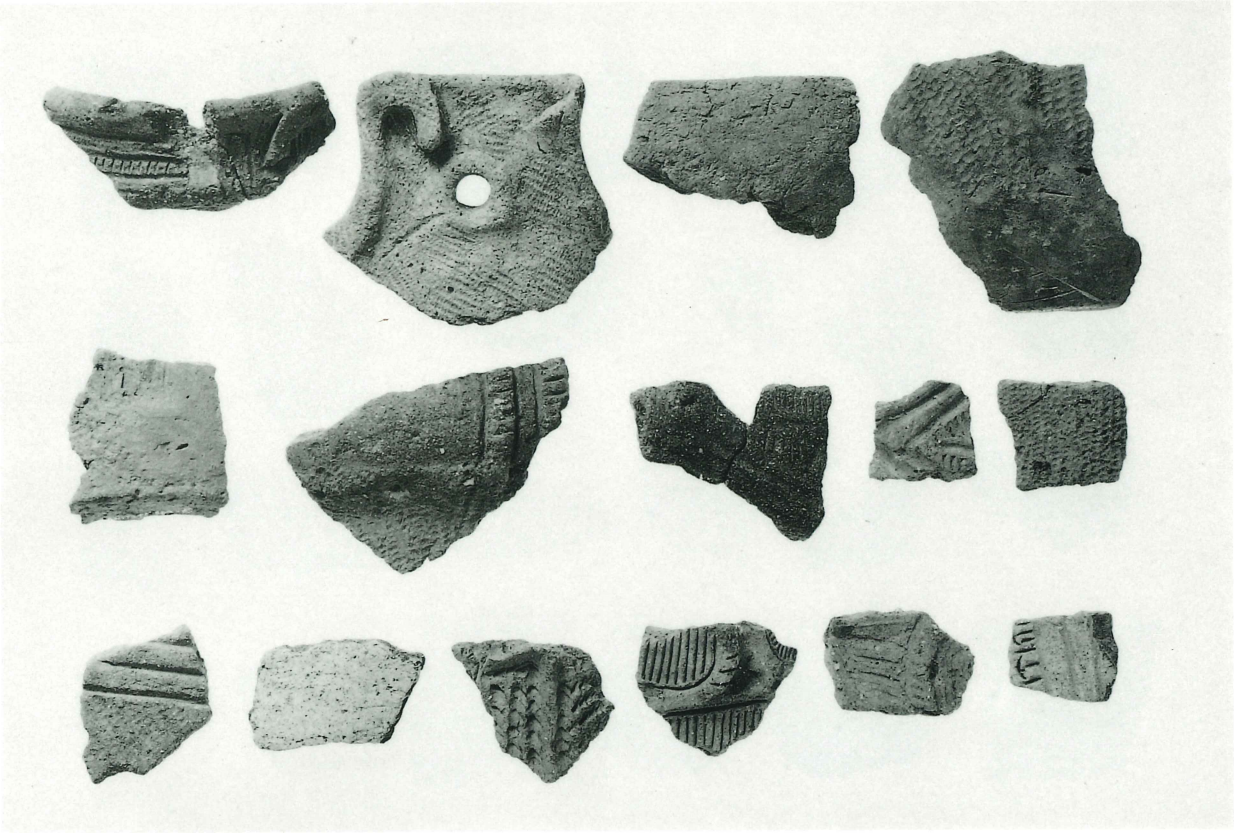
第14号住居跡　土器



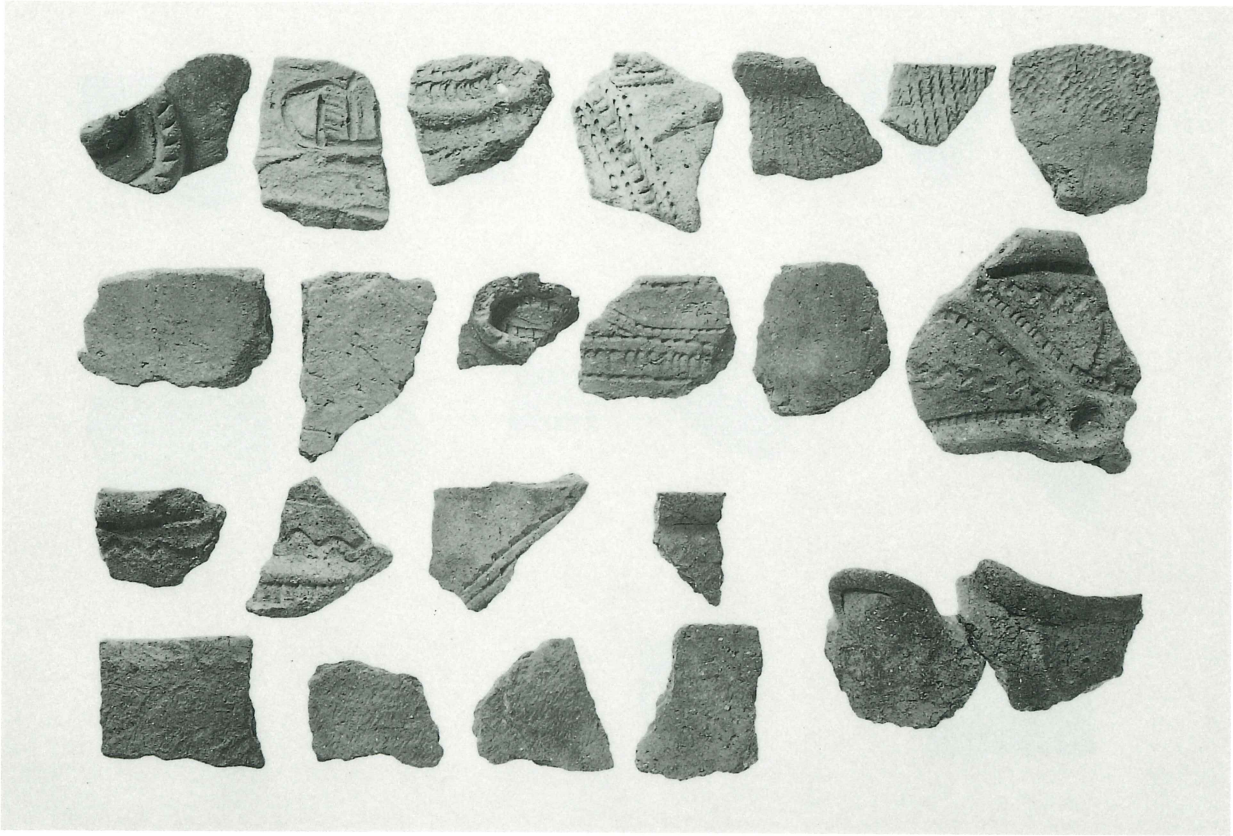
第21号・33号土壙　土器



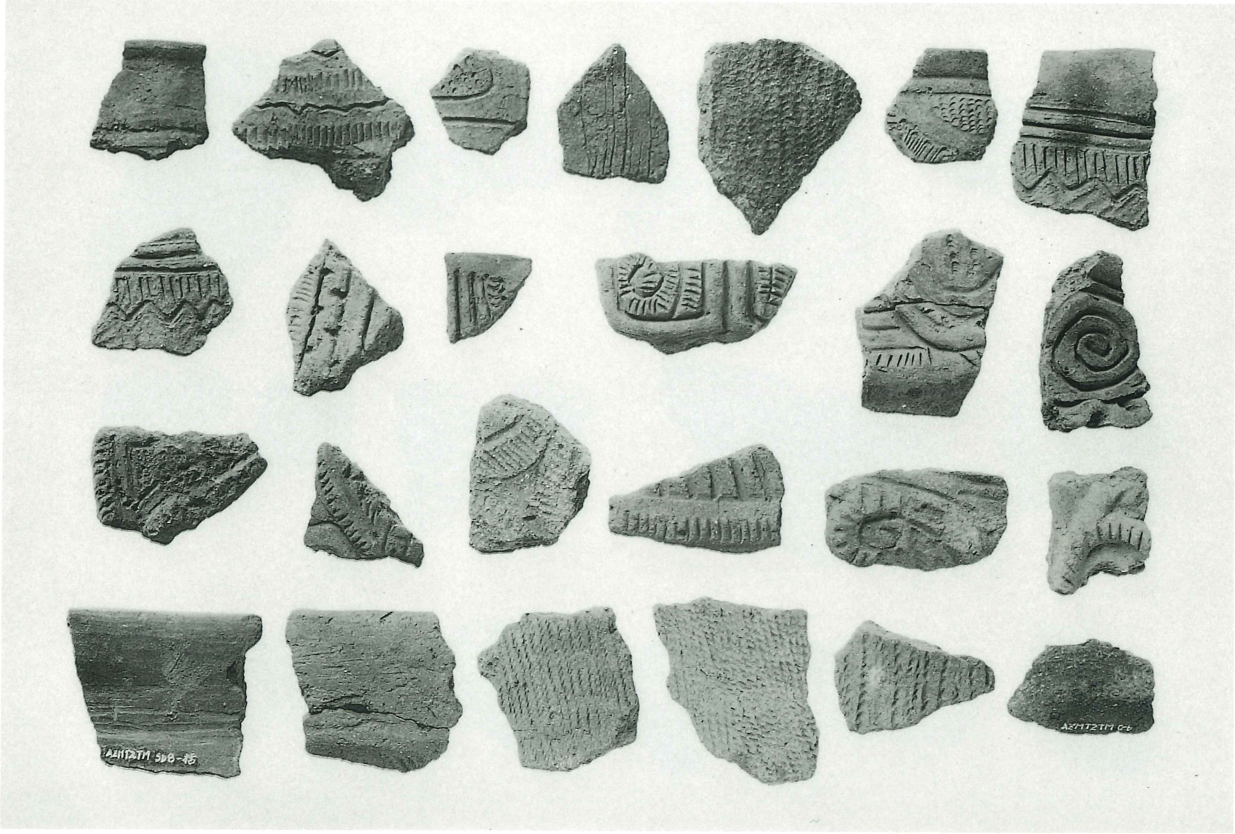
第19号・22号・23号・24号・25号・26号・35号・36号土壙　土器



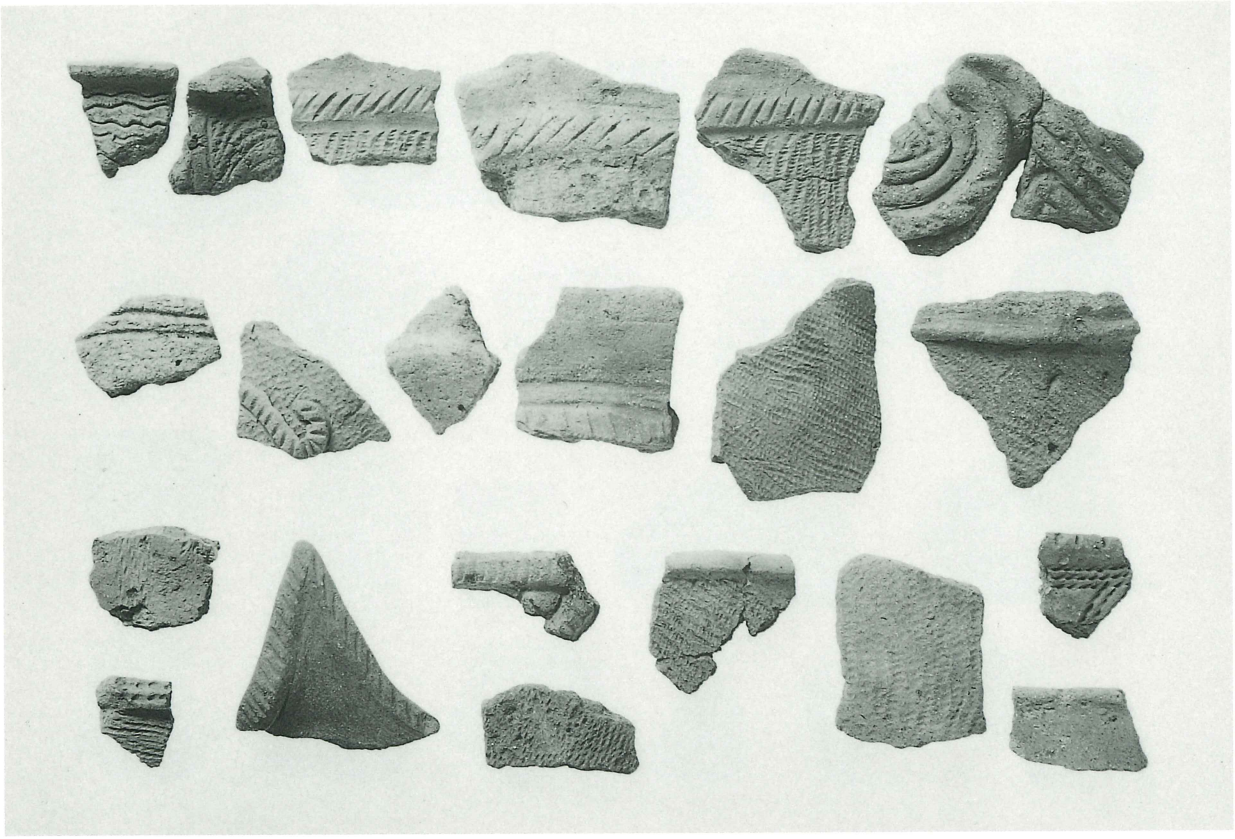
グリッド出土土器(1)



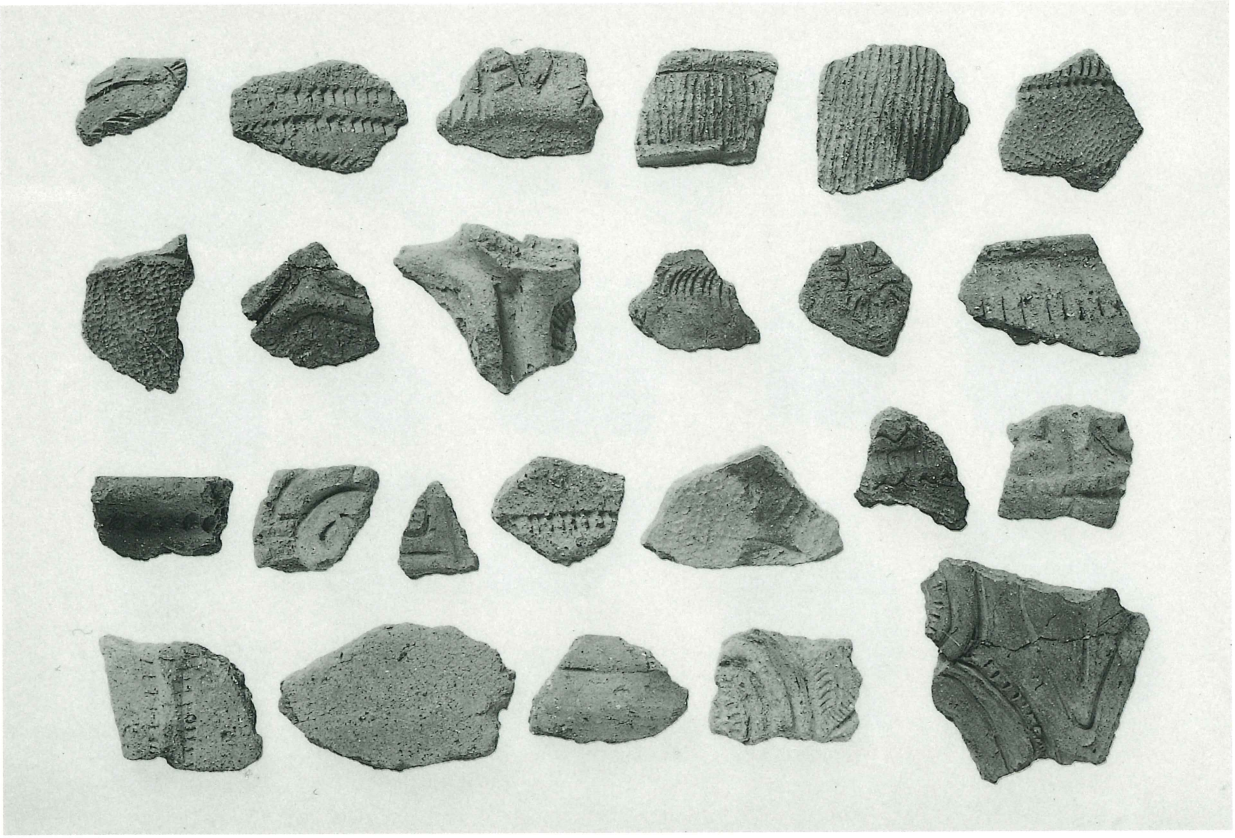
グリッド出土土器(2)



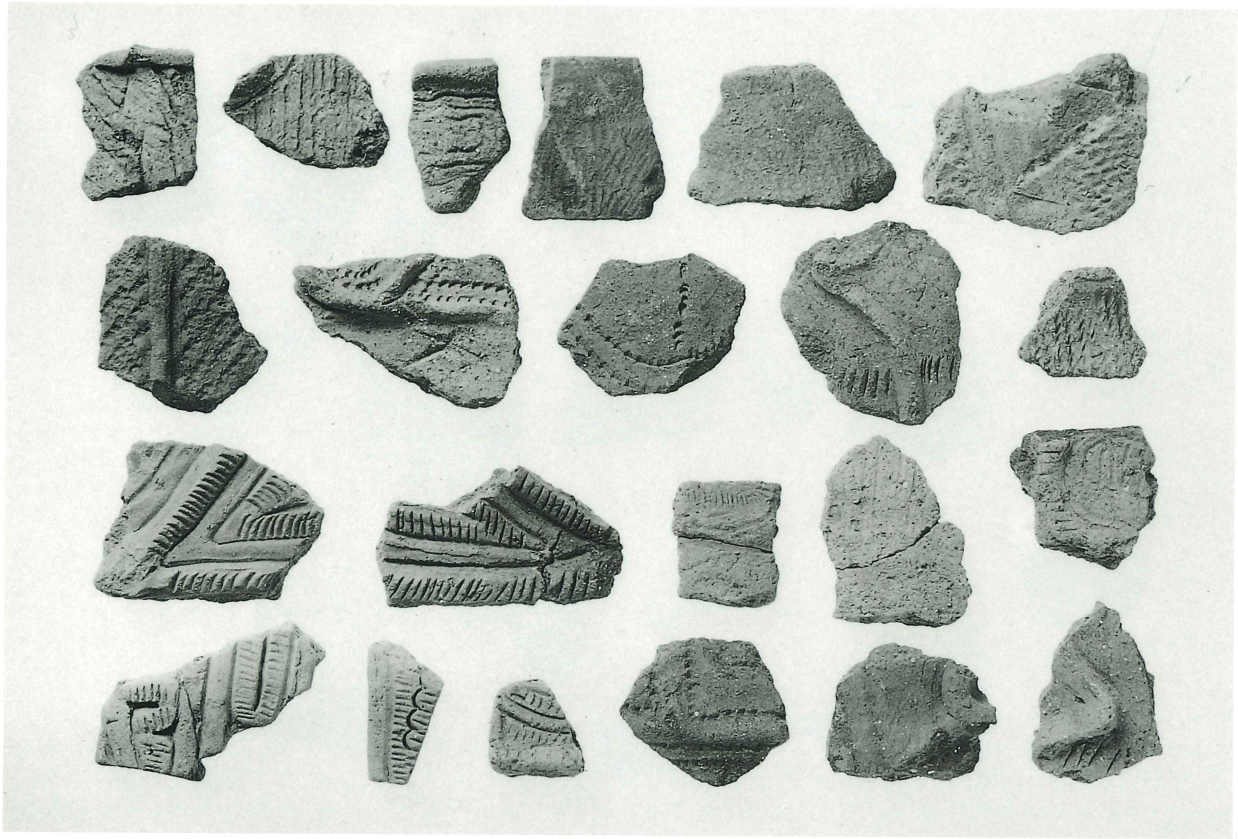
グリッド出土土器(3)



グリッド出土土器(4)

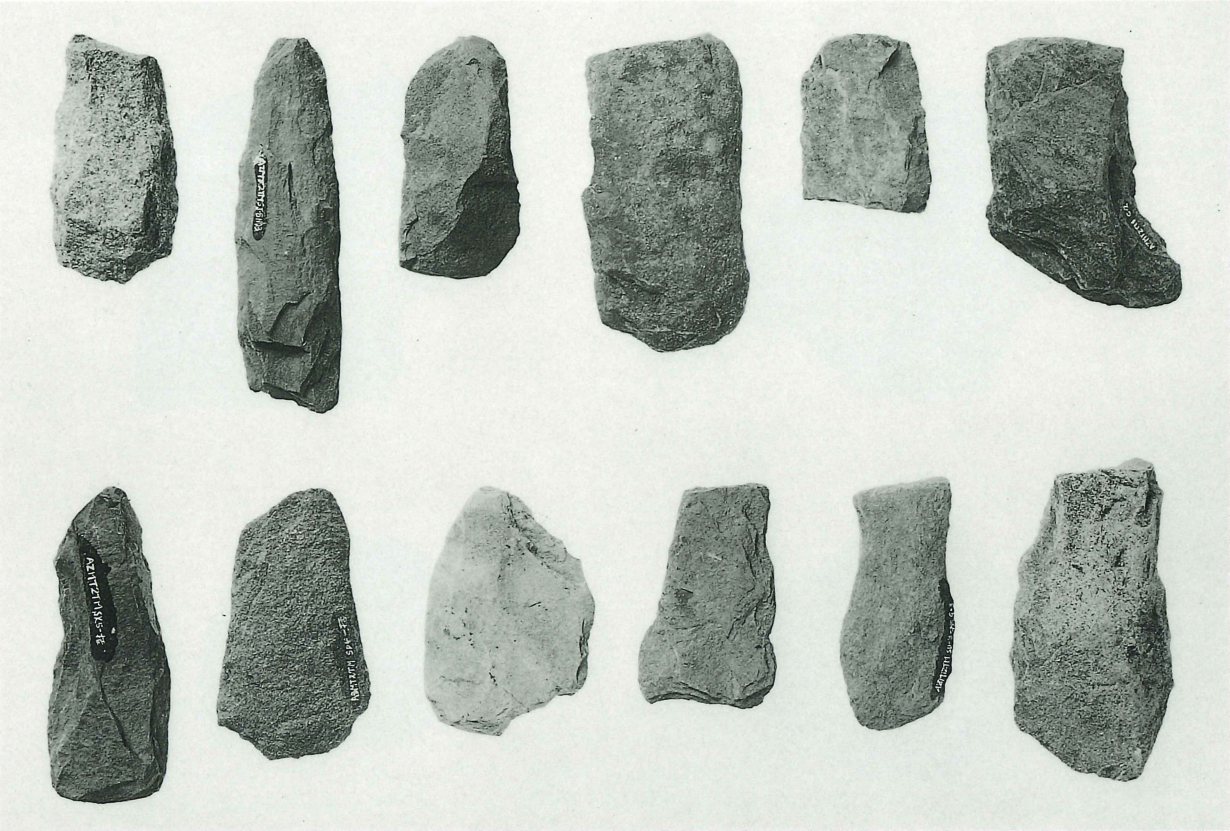


グリッド出土土器(5)

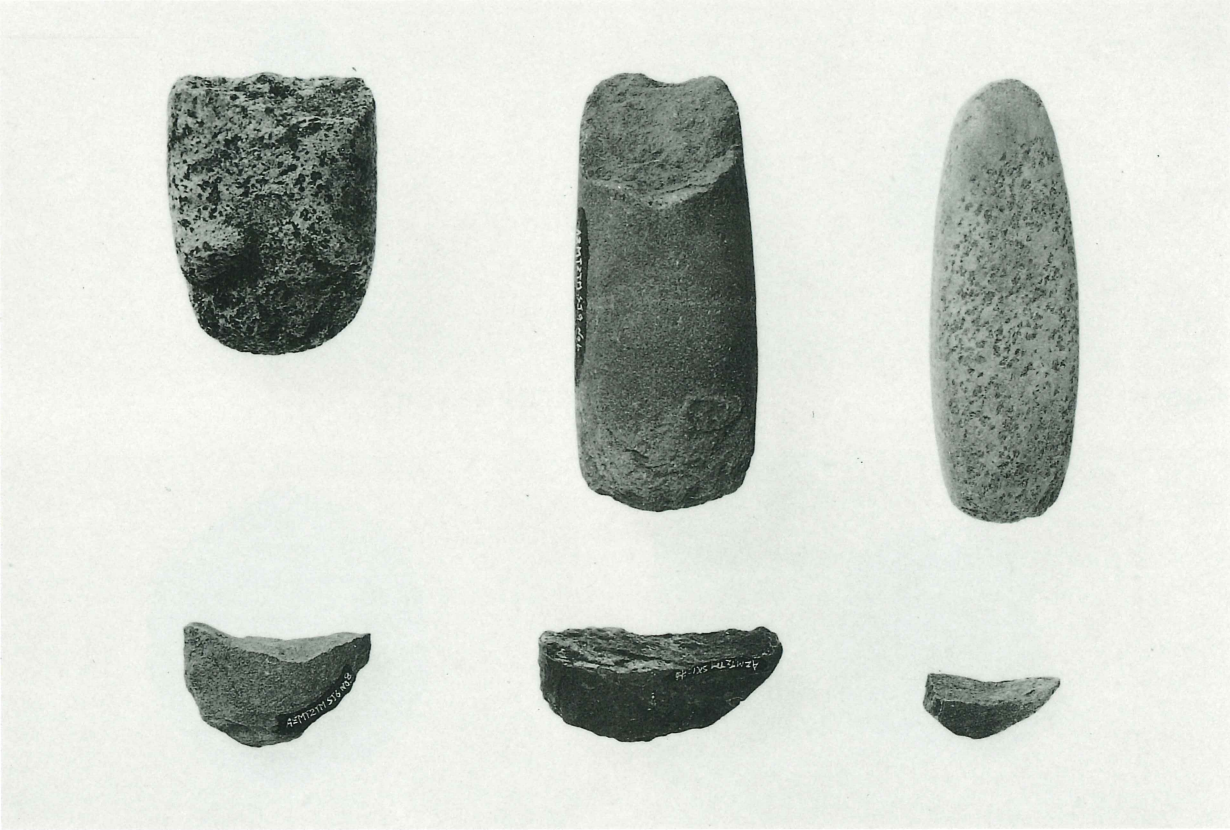


グリッド出土土器(6)

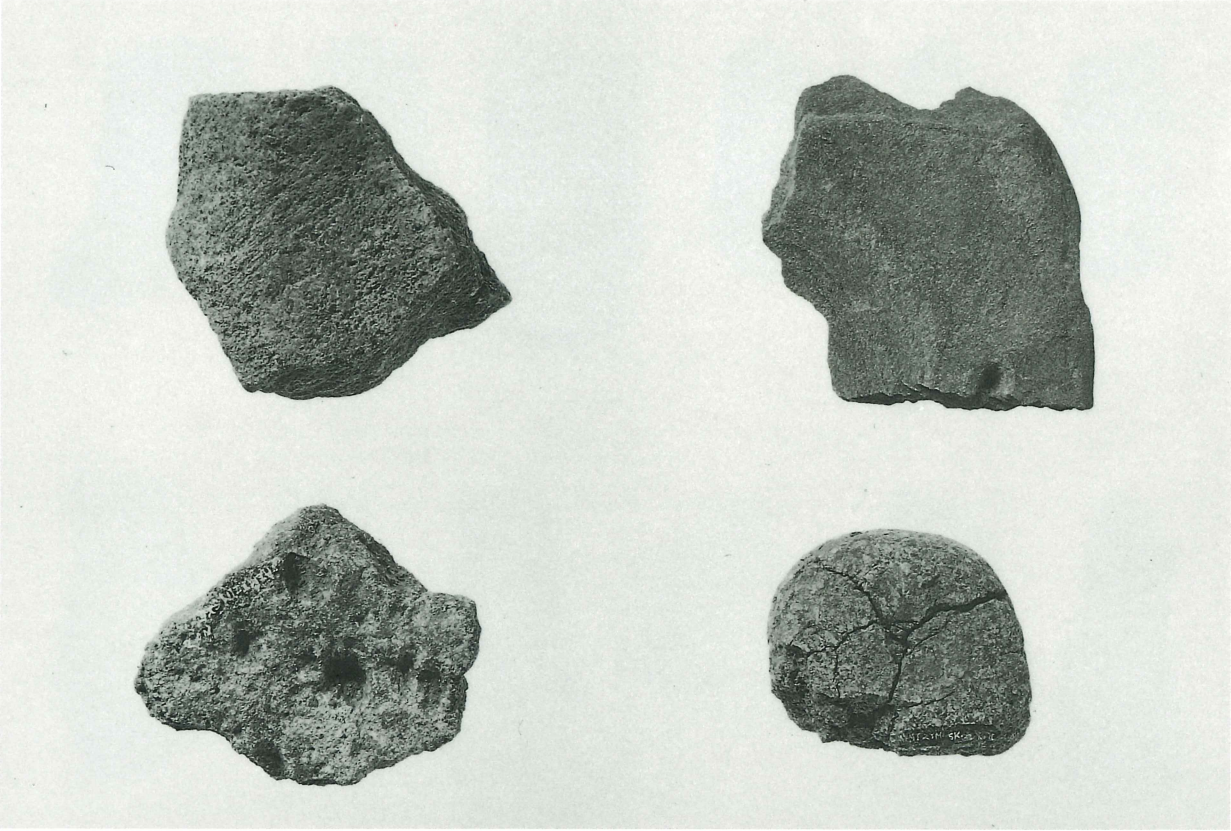
グリッド出土土器(7)



打製石斧

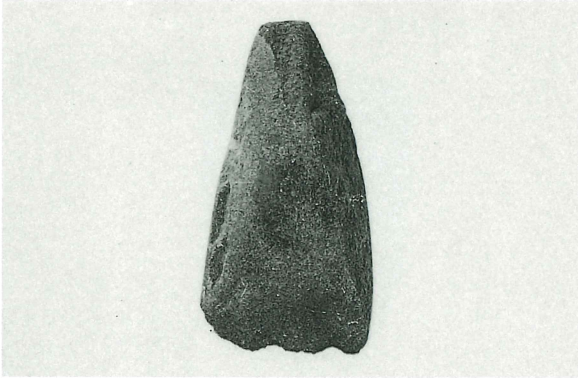


磨製石斧

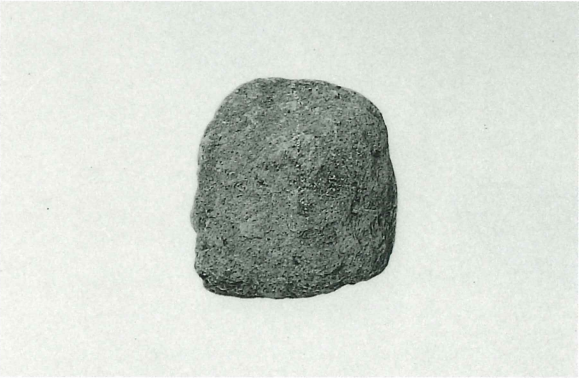


石皿・磨石

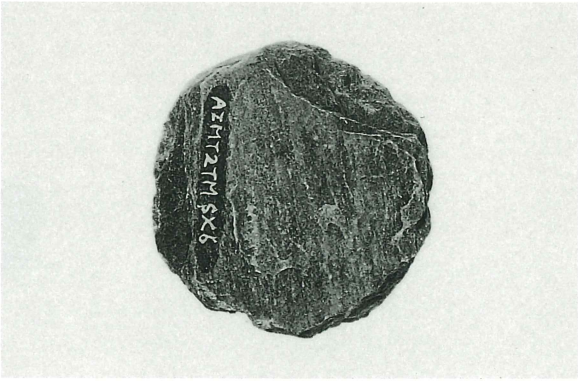
第36図−51（10住）



第13図−29（２住）



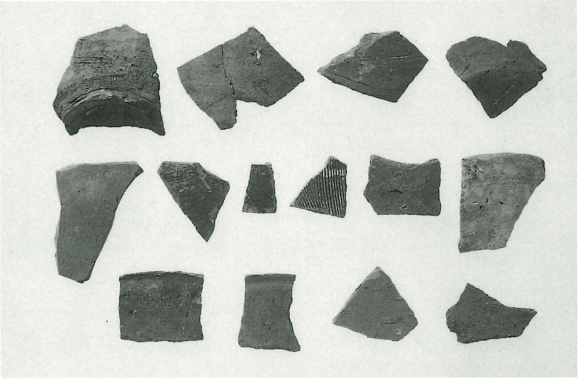
第56図−15（Ｆ−３Ｇ）



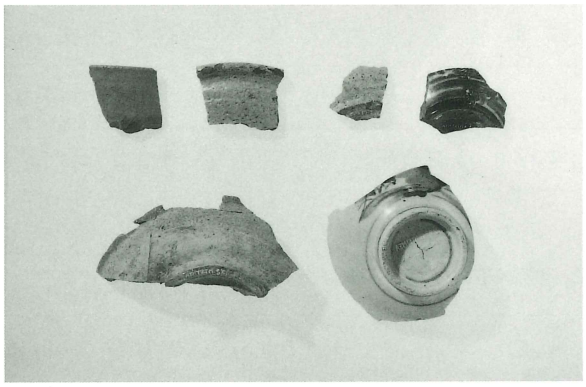
第61図

第60図－１（１方周墓）

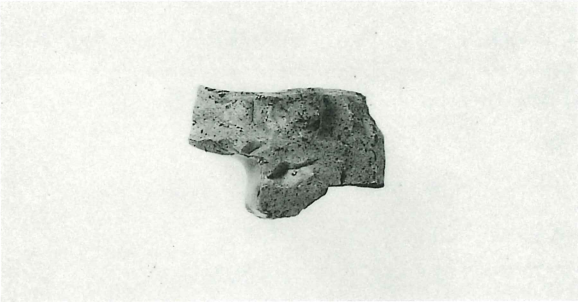
第60図－２（２方周墓）



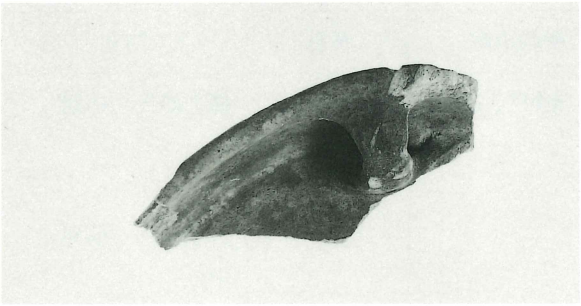
中世陶器片



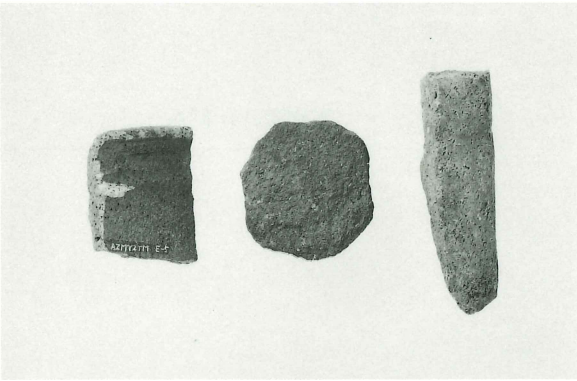
近世陶器片



青磁破片（73図）

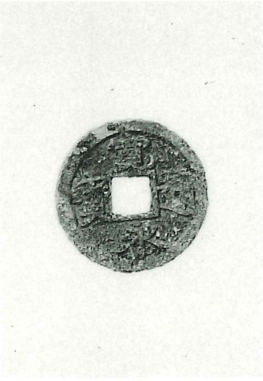


焙烙（75図－７）



砥石（74図－９・10・11）

開通元寶（76図－１）



寛永通寶（76図－２）

報告書抄録

ふりがな	あずまちょうにちょうめいせき
書名	東町二丁目遺跡
副書名	県営上尾東町団地関係埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書
シリーズ番号	第186集
編著者名	浜野美代子
編集機関	財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒369-01　埼玉県大里郡大里村大字箕輪字船木884　TEL 0493-39-3955
発行年月日	西暦1997（平成９）年３月24日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
東町二丁目遺跡（あずまちょうにちょうめいせき）	埼玉県上尾市（さいたまけんあげおし）東町二丁目（あずまちょうにちょうめ）1538-1番地（ばんち）	4	152	35°59′06″	139°36′28″	19950401～19950630	2,200	住宅建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
東町二丁目	集落跡	縄文時代　中期	竪穴住居跡	14	縄文土器・石器	
			集石土壙	1	焼石	
			土壙	16	縄文土器・石器	
		古墳時代　前期	方形周溝墓	3	土師器	
		中世	竪穴状遺構	1	中世陶器	
			集合土壙	3	おもり	
			焼土土壙	1		
			土壙	22		
			井戸跡	2		
			溝	9	青磁破片・砥石	

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第186集

上尾市

東町二丁目遺跡

県営上尾東町団地関係埋蔵文化財発掘調査報告

平成９年３月14日　印刷
平成９年３月24日　発行

発行／財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-01　大里郡大里村大字箕輪字船木884
電話　0493-39-3955
印刷／㈱太陽美術